金正日略暦

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ110(2021)

金正日略歴

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ110(2021)

『金正日略歴』(増補版)の
刊行にあたって

偉大な指導者金正日（キムジョンイル）総書記は、偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席が切り開いたチュチェの革命偉業を新たな高い段階へと発展させて、朝鮮革命と世界の自主化偉業の実現に不滅の貢献をした。

総書記は、抗日大戦の激戦場でパルチザンの息子として誕生して偉大な革命家に成長し、チュチェの革命偉業を継承し発展させるための闘争を賢明に組織・指導して、党と革命、祖国と人民の前に不滅の革命業績を築き上げた。

総書記は、非凡な思想・理論活動によって金日成主席が創始したチュチェ思想を全面的に、総合的に体系化し、深化・発展させて自主時代の指導思想として一層輝かせるとともに、卓越した、かつ洗練された指導によって朝鮮労働党をチュチェ型の革命的党として強化・発展させ、革命隊伍の一心団結を成し遂げた。

総書記は、金日成主席への崇高な道義心を抱いて主席を永遠なるチュチェの太陽として戴き、領袖永生偉業の実現と革命偉業継承の問題を立派に解決して社会主義偉業遂行の世紀的模範を生み出した。

総書記は、人民軍を無敵必勝の革命強兵として強化・発展させて社会主義制度を固守し、社会主義強国の建設と祖国統一偉業の遂行において新たな画期的局面を開いた。

総書記は、断固たる革命的原則と特出した政治力によって人類の自主偉業の遂行において不滅の業績を上げることによって、現代の最も傑出した政治元老として、偉大なチュチェの太陽として万民から限りない欽慕と称賛を受けた。

総書記は、生の最後の瞬間まで党と革命、祖国と人民のために精力的な革命活動を続け、現地指導の道で殉職した。

本編集部は、金正日総書記が祖国と人民の前に築き上げた不滅の業績を末長く伝えるために『金正日略歴』(増補版)を編纂して刊行する。

1

1942 年 2 月～1960 年 8 月

(1)

金正日総書記は 1942 年 2 月 16 日、白頭山（ペクトゥサン）密営で誕生した。

金正日総書記の家庭は最も愛国的で革命的な家庭であった。

父の金日成主席は、朝鮮人民が初めて迎え高く戴いた偉大な領袖であり、社会主義朝鮮の始祖である。

金日成主席は、チュチェ思想を創始して人民大衆を自己の運命の主人、歴史の主体として押し立てるとともに、銃剣によって朝鮮革命を切り開き、祖国解放の歴史的偉業を成し遂げた。

そして、アメリカ帝国主義の武力侵攻に抗する祖国解放戦争(朝鮮戦争)を勝利に導き、社会主義革命と社会主義建設において世紀的模範を生み出し、祖国の統一と人類の自主偉業の遂行において不滅の業績を残した。

母である抗日の女性英雄金正淑（キムジョンスク）女史は、祖国の解放と人民の幸福のための闘争に一生をささげた偉大な革命家である。

金正淑女史は、抗日武装闘争の時期と解放後の新しい祖国建設の時期に金日成主席を政治的・思想的に、命を賭して断固擁護し、主席の活動を積極的に補佐し、チュチェの革命偉業継承の起源を開いた。

祖父の金亨稷（キムヒョンジク）は、「志遠」の高志を抱き、国の独立のために一生をささげた朝鮮の反日民族解放運動の指導者であり、民族主義運動から無産革命への方向転換の先駆者であった。

祖母の康盤石（カンバンソク）は、金日成主席を偉大な革命家に育て上げ、主席の革命活

動を後押しし、夫の革命活動を積極的に助けた朝鮮における女性運動の指導者であった。

従祖父の金亨権（キムヒョングォン）、叔父の金哲柱（キムチョルチュ）と外伯父の金基俊（キムギジュン）、外叔父の金基松（キムギソン）も抗日革命闘争に身を投じ、祖国解放の偉業に一命をささげた不屈の革命闘士であった。

代を継いで家系のすべての人が国の独立と人民の自由と解放のために熱烈に戦った愛国的で革命的な家庭は、金正日総書記が人民の指導者としての風格を備えて成長するうえで貴重な土壌となった。

金正日総書記は幼少のときから人並みすぐれた天稟を備えていた。

総書記は鋭い観察力と非凡な記憶力、太い胆力と剛毅な意志、大胆な気性、熱い人間愛と大きな度量、気さくな品性を備えていた。

総書記のこのような天稟は、偉大な革命家、傑出した指導者としての品格を完璧に備えるうえで貴重な素地となった。

総書記は両親の革命的な教育と影響を受けて育った。

父から祖父が座右の銘としていた「志遠」の思想と代々国の独立のために革命に身を投じてきた一家の人たちの闘争、朝鮮の愛国烈士、抗日革命闘士、抗日児童団員の話を聞いて熱烈な愛国心と不屈の革命精神を培い、国と人民のために精力的な革命活動を続ける父の姿から大衆を巧みに導く卓越した指導力と人民に対する献身的奉仕精神、高邁な徳性をそのまま学びとった。

そして、母の革命的な教育と影響を受けて父の革命偉業を代を継いで継承する決意を固め、人民に対する熱烈な愛情と労働に対する勤勉さを培った。

両親から受けた革命的な教育と影響は総書記の成長に大きな作用を及ぼした。

総書記は現実に対する体験と実際の活動を通じて人並みすぐれた資質と品性を一層立派に備えていった。

総書記は幼時に軍服を着て軍隊の飯を食べ、正義感に燃え強い信念を持つ抗日革命闘士たちと一緒に生活しながら闘争と生活の真理を体得し、この過程で軍隊を慕い、軍人の世界を憧憬するようになった。

解放後総書記は、新しい祖国建設のために不眠不休の労苦を費やす父の精力的な革命活動を目の当たりにして、父がいてこそ祖国の富強・発展と輝かしい未来があるということを痛感し、新しい祖国の建設に立ち上がった人民の建国への熱意と底知れない力に大いに励まされた。特に平壌（ピョンヤン）学院の開院式や中央保安幹部学校の学生たちの実弾による砲射撃を通じてつとに銃剣の貴重さを体得した。

総書記は厳しい祖国解放戦争の時期、多くのことを目撃し体験して、金日成将軍がいてこそ祖国があり、戦争に勝つことができるという信念と敵に対する激しい憎悪の念、敵を撃退して勝利を得るためには軍事を学ばなければならないという考えを強めた。

偉大な指導者金正日総書記は次のように述べている。

「あの時私は戦火の中で、人々が数十年かかっても体得できなかった最も貴重なものを体得しました。祖国解放戦争は私の生活で忘れがたい歴史的時期でした」

総書記は、1952 年 6 月下旬から 8 月中旬まで最高司令部で過ごし、すべての人民と人民軍将兵を戦争の勝利へと導く金日成将軍の非凡な軍事的英知と洗練された指導力、卓越した軍事戦法と用兵術、革命的楽観主義と真っ向から立ち向かう意志と戦術を学びとった。

1952 年 7 月 10 日、最高司令部の作戦室で総書記は父から拳銃を革命のバトンとして譲り受け、革命家は生涯銃を手放してはならず、銃剣によって革命の勝利をもたらさなければならないという銃剣重視の深遠な哲理を感得した。

戦火の日々、総書記は、金日成将軍を決死擁護するためにためらうことなく身命をなげうつ抗日革命闘士と人民軍軍人の姿を見て、金日成将軍を断固擁護し、より忠実に仕えるという信念と意志を固めた。

総書記は自分のこうした確固たる信念と意志をこめて1952年8月につくった歌謡**『祖国の懐』**で、お日さまのように明るい祖国の懐は将軍さまの懐だとうたい、1953年6月1日には、お父さんは個人の身ではなく全朝鮮人民の領袖であり、お父さんの健康は全朝鮮人民の幸福であるという切々たる願いをこめた手紙を送った。こうした信念と意志は、その後の総書記のすべての活動の礎となった。

祖国解放戦争の時期、総書記は、学習も生活も戦闘的にせよと言った金日成将軍の教えを体して、1年の間に2学年の課程を終え、1952年11月22日に万景台（マンギョンデ）革命学院の4学年に編入された。

総書記は、1953年1月22日の万景台革命学院第3分団総会で**「朝鮮のために学ぼう！」**というスローガンを提示し、1月25日の万景台革命学院少年団の熱誠者たちとの談話では、このスローガンは学院の生徒だけでなく、全国のすべての生徒が掲げていくべきスローガンであると強調した。

(2)

金正日総書記は学友の間で金日成将軍を見習うための活動を積極的に展開した。

1953年2月10日、総書記は金日成将軍の略伝研究サークルを結成した。

結成の会で総書記は、略伝研究サークルの目的は、略伝の学習を強化してすべての生徒を金日成将軍に忠実な朝鮮革命の柱として、将軍の真の息子・娘としてしっかりと準備させることにあるとして、**「金日成元帥の革命**

思想でしっかり武装しよう！」をサークルが掲げていくべき基本スローガンとして提示した。

金日成将軍の略伝研究サークルは、金日成将軍の革命思想と革命業績、高邁な徳性を学ぶための最初の革命歴史研究サークルであった。

総書記はサークル員が『金日成将軍略伝』の学習を基本とし、会読や研究発表会など、さまざまな形式と方法で将軍の革命活動史を深く学習するようにした。

総書記の精力的な活動により略伝研究サークルは漸次学院のすべての学級に組織され、金日成将軍を見習うための活動は日ごとに広範囲に拡大された。

金日成将軍の略伝研究サークルの活動は、祖国解放戦争の厳しい試練の時期、新しい世代を金日成将軍の真の息子・娘に育て上げるうえで大きな役割を果たした力強い政治活動であり、サークル活動の経験はその後、金日成将軍を見習う活動を深化させるうえで貴重な元手となった。

総書記は 1953 年 9 月から 1954 年 8 月まで三石（サムソク）人民学校と平壌第 4 人民学校で、1954 年 9 月から平壌第 1 中学校で学んだ。

総書記は、戦後初めて迎える金日成将軍の誕生日に平壌第 4 人民学校の少年団員の名で将軍の安泰と健康を祈る文字をしるした祝旗を贈ることを発案し、1954 年 4 月 15 日、生徒の代表たちと共に準備した祝旗を金日成将軍に贈った。

1955 年 4 月、総書記は万景台と七谷（チルゴル）革命史跡地の参観を組織して、学友が金日成将軍の革命的家庭と幼年時代を見習うようにした。

総書記は金日成将軍を断固擁護するための活動を積極的に展開した。

1956 年 5 月、第 1 次 5 カ年計画の展望について講演した平壌第 1 中学校の校長が党の政策を歪曲・中傷した時、総書記は即座にそれを断固排撃し、

朝鮮労働党の経済建設の基本路線を擁護した。

総書記は、なんとしても革命戦跡踏査を阻止しようとする反党反革命分派分子らの策動の中でも、1956 年 6 月 5 日から 14 日にかけて、平壌第 1 中学校の生徒で組まれた革命戦跡踏査団を率いて白頭山地区の普天堡（ポチョンボ）、三池淵（サムジヨン）、鯉明水（リミョンス）一帯の革命戦跡への踏査行軍路を切り開いた。

総書記が白頭山地区の革命戦跡踏査行軍路を切り開いたことによって、革命戦跡踏査による革命伝統教育の起源が開かれ、金日成将軍を見習うための活動がより活発に行われるようになった。

朝鮮労働党中央委員会 1956 年 8 月総会の直後、総書記は**「金日成元帥を死守しよう！」**というスローガンを提示するとともに、人民軍で『金日成元帥にささげる歌』を創作・普及するようにした。

この時期、総書記は領袖擁護の悲壮な決意をこめて、自分が愛用していた手帳に**「生きるも死ぬも金日成元帥のために！　1956 年 9 月 10 日　金正日」**としたためた。

総書記は校友の間に党の思想体系を確立するための活動を力強く展開した。

1950 年代の中頃、党の思想体系を確立することは、外部勢力を後ろ盾にして党と革命に挑戦してきた反党反革命分派分子らの策動と、彼らがまきちらした思想的毒素が各分野に残っていた事情と関連して、非常に重要かつ切実な問題として提起されていた。

1958 年 4 月 18 日、総書記は平壌第 1 中学校高級班の民青初級幹部たちへの談話で、分派の反動的本質と朝鮮で分派が発生した歴史的根源、分派分子の反党反革命的罪業とその弊害、分派分子を組織的に一掃した朝鮮労働党の措置の正当性について解説した。そして 1958 年 6 月 27 日、朝鮮労働党第 1 回代表者会の文献について討議する学校民青総会を招集し、この会議が反党反革命分派分子の思想的毒素を根絶する会議となるように導いた。

1958年9月16日に開かれた学校民青総会で総書記は『**民青員の間に党の思想体系を確立するための課題について**』と題する結語を述べた。

結語で総書記は、『**青年の間に党の思想体系を確立しよう！**』というスローガンを提示し、党の思想体系の本質とそれを確立するための闘争課題について述べた。

総書記は、党の思想体系は本質的に金日成将軍の思想体系であるとし、党の思想体系を確立することは民青組織に提起されている第一の任務であると強調した。

そして、民青員の間に党の思想体系を確立するためには、党政策教育を強化して彼らを金日成将軍の革命思想でしっかり武装させ、金日成将軍に限りなく忠実であった抗日革命烈士の革命精神を学ぶようにするとともに、党の思想に反するあらゆる傾向と闘う気風を打ち立て、組織生活を強化しなければならないと述べた。

1958年9月11日、革命伝統教育の基本は金日成将軍の革命活動を学ぶことであると述べた総書記は、新築される校舎に朝鮮労働党歴史研究室を設けることを発案し、模範的実践によってこの活動を導いた。

こうして1959年4月、金日成主席の誕生47周年を迎えて平壌南山（ナムサン）高級中学校に朝鮮労働党歴史研究室が設けられ、革命伝統教育の拠点がもたらされた。

総書記は、校友の間で出版物による革命伝統教育を強化するとともに、革命歌謡の普及、革命伝統を主題とした文学・芸術作品の鑑賞会など、さまざまな形式と方法で革命伝統教育を活発に行うようにする一方、校友が**「抗日遊撃隊員のように働き、学び、生活しよう！」**というスローガンを高く掲げ、革命伝統を実際の活動に具現するための活動を力強く展開するようにした。

(3)

金正日総書記は、青年学生の間で事大主義と教条主義を克服し、主体性を確立するための活動を力強く推し進めた。

総書記は、1956 年 2 月、学友と共に祖国解放戦争勝利記念館を参観した時、李寿福（リ スボク）英雄を「朝鮮のマトローソフ」と呼ぶ講師の解説を正し、同年の夏、オープンした工業・農業展覧館を見て回った時には、軽工業館に展示されているビナロン織物を見て喜ぶ学友たちに、ビナロン織物がよいのは一つにはそれが丈夫だからだが、それよりもわが国の原料と技術でつくられたものだからだと諭した。

総書記は、1956 年 9 月の民青中央委員会の幹部との談話をはじめ折あるごとに、生徒の間に事大主義と教条主義が残っている原因を指摘し、生徒にわれわれのものを多く教えるべきであり、彼らの間で事大主義、教条主義との闘争を力強く展開しなければならないと述べた。

総書記は生徒が学習と課外活動において主体性を確立するようにした。

1957 年 9 月 13 日、平壌第 1 中学校の民青初級団体総会での結語**『青年学生の間に革命的世界観を確立しよう』**において総書記は、学習において主体性を確立するための闘争を強力に展開することについて強調し、**「われわれのものをもっとよく学び、輝かせよう！」**というスローガンを提示した。

そして、学習において主体性を確立するため、生徒が正しい学習観点と態度を持して、党の政策と革命伝統を深く研究・学習し、朝鮮の歴史と文化、自然と地理、良風美俗など自国のものを熱心に学び、革命と建設に役立つ生きた知識を身につけるよう導いた。

また、学校の芸術サークル活動や美術サークル活動など、生徒の課外活

動を指導するに当たって、彼らが事大主義的観点と態度を捨てて朝鮮人の感情に合う歌を歌い、踊りを踊り、朝鮮画の技法に習熟するよう諭し、植物サークルでも朝鮮のものを基本として学ぶようにした。そして、学校に実験室と実習室を設け、すべての生徒が一つ以上の技術を習得し、自分の力ですべてのことを解決する習慣をつけるようにした。

総書記は学校民青の活動を新たに発展させるために精力的に活動した。

1956 年 12 月 12 日に朝鮮民主青年同盟に加盟した後、1957 年 2 月から民青初級団体の委員長を務め、1957 年 9 月に平壌第 1 中学校高級班に進学してからは学校民青の副委員長(委員長は教員)として活動した。

この時期、朝鮮では生産関係の社会主義的改造が完成段階に至り、チョンリマ（千里馬）の大進軍が始まり、人々の思想意識と活動には新たな転換がもたらされていた。しかし、民青組織は、変化した新しい環境と思想教育団体としてのその性格に即して活動を進めていなかった。

総書記はこのような青少年活動の実態を深く洞察し、民青活動を新たに発展させるために 1957 年 2 月 6 日、平壌第 1 中学校民青委員会で学校民青組織の任務を示した。

総書記は、すべての民青員を党と領袖に限りなく忠実な革命家、知識と能力のある頼もしい社会主義建設者に育て上げることが学校民青委員会の任務であるとし、民青員を党と領袖のまわりに固く結束させるための思想教育、学力を高めるための活動、同盟生活と少年団の活動を正しく指導することを課題として提起した。

そして、学校民青委員会が第一に思想教育に関心を払い、民青員を党と領袖のまわりに固く結束させることを思想教育の基本として捉えていくようにした。

民青員を金日成主席の革命思想で武装させるために総書記は、主席が朝

鮮労働党第3回大会で行った報告と朝鮮労働党中央委員会1956年12月総会で述べた結語の学習を行うようにした。また、主席が1958年11月、全国の市・郡党委員会扇動員のための講習会で述べた結語**『共産主義教育について』**を録音で聴取するようにし、数日間にわたってこの著作の講習を行い、学校民青総会で共産主義教育を強化する問題について討議するようにした。

1958年4月に総書記は、民青員が李寿福英雄の母校と故郷の村を見学し、金日成主席に対する李寿福英雄の忠誠心と祖国と人民に対する熱愛の精神を学びとるようにした。

また、新しいものに敏感で進取の気性に富む青年学生の心理的特性に応じて、ありきたりの枠を破り、思想教育をさまざまな形式と方法で行うようにした。そうして、民青組織では青年学生の間で金日成主席の教示の録音聴取、新聞の会読、紙上討論、壁新聞と速報の発刊、校内放送による宣伝活動、回想記の研究発表会、革命戦跡・革命史跡の踏査および参観、抗日革命闘士や共和国英雄との交歓会、英雄の母校と生家訪問、弁論の集い、新春の集いなど、多様な形式と方法で思想教育を斬新に行った。

1959年1月に総書記は、社会主義社会本来の要求と新しいものを志向する青年の特性に応じて、青年学生に対する思想教育を、模範的行為を積極的に探し出して広く紹介・宣伝し、一般化させる方法で行うべきだと述べた。

総書記は、自然と社会についての幅広く深い知識を身につけるために勉学に励む一方、民青員の学力を高めることにも深い関心を払った。

そして、民青員の学習に対する熱意を高めるためにさまざまな活動を行った。

総書記は、勉強も情熱がなければできないとした金日成主席の教えを体して、まず自分が自然と社会に関する多方面にわたる知識を身につけるために、各科目の教材だけでなく主席の著作とマルクス・レーニン主義の書

籍を耽読し、機械工学や農学、畜産学などの専門技術分野、社会科学や文学・芸術など各分野の万巻の書を読破して幅広い知識を得た。

1957 年 2 月、生徒の間に読書の気風を打ち立てるために、大衆的な「読書行軍」を行うようにし、1957 年 3 月には、雑誌『新しい世代』の紙上討論欄に掲載された文章の中の模範に学ぶ集いを催し、生徒が学習の目的と意義をはっきり知り、学習に新たな改善をもたらすようにした。また、民青員の学習に対する熱意を高めるために学科コンテストや教科別討論会、読書発表会などを活発に行うようにした。

一方、すべての生徒が参加できるようにさまざまな課外サークルを組織するようにし、学校民青委員会が生徒の課外サークル活動を指導する新しいシステムを打ち立て、彼らが実践を通じて実用的な生きた知識を身につけるようにした。

総書記は、学校民青委員会が民青員の組織生活の指導に力を注ぎ、革命的な組織生活の気風を打ち立てるようにした。

まず、民青員が高い組織観念を持って同盟生活に自発的に参加するようにするため、新しく加盟した民青員を対象とした集中講習を催すようにした。また、民青組織がすべての同盟員に任務を与えるようにし、民青員が同盟生活手帳をつくって利用し、組織の決定と分担された任務をきちんと遂行するように導いた。

民青会議に参加しては、革命同志を真に愛し大事にするのなら、そのつど欠点を批判して是正させるべきだ、友だちの批判を有り難く思って素直に受け止め、自分の欠点を直していくべきだと諭した。

総書記は、民青の活動の一部分である少年団の活動に深い関心を払い、民青が少年団の活動を責任を持って指導する新しいシステムを打ち立てた。

そして、冬休みの間に上級学年の民青員を少年団の各分団に派遣して少

年団員の学習と課外生活を指導するようにし、この貴重な経験を生かして1957年2月、補助分団指導員制を設けるようにした。

補助分団指導員制は、民青員が少年団の活動に対する指導をさらに強化できるようにする新しい活動体系であり、少年団員だけでなく、民青員を政治的、思想的に一層鍛えられた有能な社会主義建設者に育て上げるうえでも重要な役割を果たした。

総書記は青年学生を社会主義建設に積極的に参加させるために精力的に活動した。

まず、1958年5月5日、内閣決定第17号を支持する平壌第1中学校教職員・生徒決起大会で行った演説**『青年は社会主義建設闘争にすべての力をささげよう』**をはじめその他の発言で、青年学生が社会主義建設に直接参加し、物質的にも積極的に支援するよう強調した。

そして、1958年5月初旬から6月中旬までほぼ40日の間、平壌市の2万世帯の住宅建設のための部材生産に参加して、骨の折れる仕事を受け持ち、生徒の革命的熱意を呼び起こして首都建設において集団的革新を起こすようにするとともに、彼らが実践を通じて心身を鍛え、学んだ知識を確かなものにし、技術を絶えず革新していくように導いた。

また、1958年の夏と翌年の4月には大同江（テドン）の護岸工事に、1959年の2月と3月には平壌学生少年宮殿の建設工事に参加し、巧みな組織・政治活動と自らの模範的実践によって生徒を勤労の偉勲へと奮い立たせた。

この時期総書記は、青年学生が社会主義建設に青春の情熱と創造的知恵をささげ、祖国の富強・発展のための献身的奉仕精神と困難を乗り越える強靭な意志を身につけるように導いた。

総書記は、青少年学生が「少年」号起重機献納運動、植樹運動など、よいことをする運動によっても社会主義建設を積極的に支援するようにした。

また、青年が社会主義建設場に進出して勤労の偉勲を立てることにも深い関心を払った。

総書記は、青年は社会主義建設で突撃隊の役割を果たすべきであり、誰も考え出せない新しい問題を提起して、世人を驚嘆させる奇跡と革新を起こしてこそ生きがいがあると述べた。

そうして、数多くの青年が江界（カンゲ）青年発電所や海州（ヘジュ）―下聖（ハソン）の間の広軌鉄道工事現場に進出して英雄的偉勲を立て、世人を驚嘆させる建設速度を生み出した。

総書記は青年学生を軍事的にしっかりと準備させることにも深い関心を払った。

戦後、人民軍の各部隊を現地指導する金日成主席に随行して銃剣重視、軍事重視の重要性を痛感した総書記は、軍事問題研究のために用意したノートに**「朝鮮人民の不倶戴天の敵アメリカ帝国主義侵略者を徹底的に掃滅し、祖国を統一しよう！」**というスローガンを書き入れ、主席のチュチェの軍事思想を深く研究、体得した。

そして、軍事学の講義に誠実に参加して豊かな軍事知識を習得し、多くの軍書を読破する過程で正規軍の軍種、兵種、専門兵の使命と任務など、軍事知識の幅を広げていった。

また、1959 年 9 月 23 日をはじめ機会あるごとに、平壌南山高級中学校の生徒たちに、戦争と平和に対する朝鮮労働党の原則的立場を正しく認識し、戦争恐怖症と厭戦思想を徹底的に排撃しなければならないと強調し、1959 年 4 月の長（チャン）山での戦術訓練と同年 5 月の野外軍事訓練、1960 年 6 月 9 日の実弾射撃に参加して、生徒たちが訓練に誠実に参加するように導いた。

1960 年 7 月 15 日、金正日総書記は平壌南山高級中学校を卒業した。

2

1960年8月～1964年3月

(1)

金正日総書記は、金日成主席の軍事重視の思想と指導を体して革命武力に対する指導を開始した。

1960年代に入って、共和国北半部では金日成主席の賢明な指導の下に社会主義の基礎建設が成功裏に遂行され、社会主義の全面的建設を推し進めるべき課題が提起されていた。

一方、南朝鮮に駐屯しているアメリカ帝国主義は、米本土から地対空ミサイルをはじめとする各種の新型兵器と膨大な米軍兵力を引き入れ、大規模な戦争演習とミサイルの試験発射を強行して情勢を極度に緊張させた。

こうした情勢の下、1960年8月25日、総書記は主席に随行して朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守（リュギョンス）第105戦車師団を訪ねた。

この日総書記は、祖国解放戦争の時期にこの部隊が立てた輝かしい偉勲を高く評価し、部隊の指揮官たちに、金日成主席から与えられた戦闘任務を立派に遂行するためには、すべての戦車兵を政治的・思想的に、軍事技術的にしっかり準備させなければならないと述べた。

特に、人民軍が「敬愛する金日成同志を首班とする党中央委員会を生命を賭して守ろう！」というスローガンを高く掲げて、朝鮮革命の最終的勝利を早めていくべきだと強調した。

そして、近代戦の要求に即して戦闘訓練を強化してわが国の地形条件に合う戦車戦法を体得し、戦車兵は敵との戦いは言うまでもなく、社会主義

建設でも大きな役割を果たせるように準備するとともに、人民の血と汗がしみた戦車を愛護・管理すべきであり、わが国でも戦車を自力でつくるべきであると述べ、金日成主席が提唱した赤旗中隊運動を力強く展開するための課題と方途を示した。

近衛ソウル柳京守第 105 戦車師団に対する総書記の現地指導は、革命武力に対する指導の第一歩を踏み出した歴史的な出来事であった。

金正日総書記は 1960 年 9 月 1 日、チュチェの革命偉業を継承する遠大な志を抱いて金日成総合大学に入学した。

その日総書記は、金日成主席の高志を体して、主席が切り開いたチュチェの革命偉業を代を継いで立派に継承し完成する遠大な構想を示し、それを詩『**朝鮮を輝かさん**』にこめて歌い上げた。

詩『**朝鮮を輝かさん**』は、チュチェ思想の旗の下に切り開かれ、勝利してきた金日成主席の革命偉業を変わることなくチュチェの道へと導いていこうとする鉄石の信念と意志が脈打つ歴史の宣言であり、朝鮮革命を代を継いで担って立つという崇高な使命感に基づく厳かな誓いであった。

1962 年 8 月 29 日総書記は、銃剣を一層強く握りしめて主席の革命偉業をあくまで受け継いでいくという確たる決意を詩『**白頭の行軍路を継いでいかん**』にこめて歌い上げた。

この詩には、白頭の密林で築かれた抗日の革命伝統を受け継いで朝鮮の革命武力を無敵必勝の革命強兵に育て上げ、朝鮮をいかなる敵もあえて手出しできない統一された強国として輝かせていこうとする総書記の鉄石の信念と意志が凝縮されている。

(2)

金正日総書記は、金日成主席の革命思想を完璧に体得し、自然と社会に関する幅広く深い知識を身につけるために勉学につとめた。

まず、初・高級中学の時期にすでに学習した主席の著作と教示を再度歴史的に、全面的に深く研究・体得するとともに、人類が残した進歩的な思想・理論と文化遺産、従来の労働者階級の革命思想と理論を主体的立場に立って幅広く、深く研究した。

そして、大学時代には『共産党宣言』、『資本論』、『資本主義の最高段階としての帝国主義』、『国家と革命』などマルクス・レーニン主義の創始者の数多くの著書を読破し、読了した本の行間や余白には**「われわれの時代にはもはや合わない理論」、「輪郭を描くにとどまり、それ以上展開されていない」**などと、それらの限界性や当該の問題に対する見解を書き入れた。

また、専攻分野の政治経済学のみでなく、哲学、歴史学をはじめとする社会科学と自然科学、文学・芸術、軍事学など各分野の多方面にわたる知識を蓄積していった。

総書記は、多くの学科討論や学生への談話で金日成主席の革命思想の偉大さと独創性、真理性を明らかにし、労働者階級の領袖の思想と業績を抹殺しようとする現代修正主義の反動的本質とその危険性を深く分析する過程を通じて主席の革命思想を断固擁護した。

1960 年 12 月の金日成総合大学経済学部の教員への談話や 1963 年 6 月の金日成総合大学の学生への談話**『労働者階級の領袖は革命闘争において決定的役割を果たす』**などで、労働者階級の革命闘争における領袖の地位と役割を新たに解明した。

また、社会革命の本質と革命の類型に関する従来の理論の限界性を克服し、新たに解明することによって、チュチェの革命理論の根本原理をさらに深化・発展させた。

そして、1962 年 8 月に発表した**『金日成同志の軍事思想を学習するうえで提起されるいくつかの問題について』**と**『戦争勝利の要因について』**をはじめとする多くの著作では、主席の軍事思想と理論の本質的特性、戦争の本質と戦争勝利の決定的要因、チュチェの戦法の基本的特徴と優越性、革命軍隊の性格と使命など数多くの問題を科学的に解明し、主席のチュチェの軍事思想と理論をさらに発展させ豊富にした。

1962 年 9 月 11 日には御恩洞軍事野営地で、現代の政治家は文武を兼備しなければならないという思想と軍事第一主義、銃剣重視の思想を示して、チュチェの革命偉業を立派に継承していくうえで堅持すべき思想的・理論的指針をもたらした。

総書記は 1960 年 11 月 24 日と 12 月 9 日の教示などで、抗日革命文学・芸術をチュチェの革命的文学・芸術の伝統と規定し、それを全面的に継承し発展させるという思想を示した。

また、文学・芸術の各ジャンルに労働者階級の領袖を形象化し、われわれの時代の真の人間の典型を創造するという革命的文学・芸術建設の原則的問題を解明し、1963 年 4 月には、時代の要求と人民大衆の志向に合う革命的な内容で貫かれ、形式においてレチタティーボとアリアを排撃した新しい歌劇を創造することについて述べた。

これは、1960 年代末から 1970 年代初にかけて進められた文学・芸術革命の強固な思想的・理論的基礎となった。

総書記は 1962 年 1 月に発表した論文**『現代帝国主義の特徴と侵略的本性について』**において、現代帝国主義の特徴と侵略的本性を全面的に分析した。

金正日総書記は次のように述べている。

「…現代帝国主義は、単に独占の支配に基づいているのではなく、国家独占資本主義を政治的・経済的基礎としており、旧植民地主義ではなく新植民地主義に依拠しており、互いに並列的に存在しているのではなく、アメリカ帝国主義を頭目として従属的に再編され、成長しているのでなく、急速に衰退・没落しつつ最後のあがきをしている帝国主義である」

このように現代帝国主義の特徴を科学的に定式化したうえで、総書記は、帝国主義の侵略的・略奪的本性はいささかも変わっていないばかりか、一層悪辣さと狡猾さを増しているとして、アメリカ帝国主義の二面戦術、特に「平和戦略」の侵略的本質を鋭く暴露した。

1964年3月18日、総書記は卒業論文『**社会主義建設における郡の位置と役割**』を発表した。

総書記は、地方の党および経済活動家昌城（チャンソン）連席会議の準備を進める金日成主席を補佐しながら昌城と朔州（サクチュ）地方で調査・分析した実態資料と、その後中央の経済機関で収集した資料に基づき、わずか1カ月余りの間に論文を書き上げた。

論文では、社会主義建設における地域的拠点に関する主席の独創的な思想・理論の正当性を論証し、それをより一層深化・発展させた。

(3)

金正日総書記は革命と建設を指導する金日成主席を積極的に補佐した。

金正日総書記は次のように述べている。

「私はもともと総合大学の2学年の時から、現地指導する金日成同志にしばしば随行して補佐し、護衛活動を指導しました」

総書記は党活動と重要な政治行事を指導する主席を補佐した。

1962 年 7 月から 1963 年 8 月にかけて総書記は、各地方を現地指導する主席に随行するに当たって、各級党組織が主席の指示を実行することを党活動の中心として捉え、チョンサンリ（青山里）精神、チョンサンリ方法を確実に具現して、すべての活動を対人活動、政治活動に確固と転換させるようにした。

朝鮮労働党第 4 回大会の報告を作成する主席に必要な基礎資料を提供し、報告文を清書した。そして 1963 年 8 月には、主席の臨席の下に恵山市で催される祖国解放 18 周年記念行事が成功裏に行われるように指導した。

総書記は、1962 年 12 月の党中央委員会第 4 期第 5 回総会で主席が打ち出した、経済建設と国防建設を並進させるという方針を体して、国防力の強化をはかる主席を積極的に補佐した。

1963 年 2 月 6 日、総書記は主席に同行して最前線に位置する大徳山の軍営を訪れ、「一当百」のスローガンの本質とその遂行方途を示し、軍人の生活と戦闘準備で提起される問題を主席に報告し、解決をはかるようにした。

1963 年 7 月と 8 月にも朝鮮人民軍航空区分隊と海軍部隊に対する主席の現地指導に同行して、人民軍を政治的・思想的にしっかり準備させ、戦闘準備を完了するための方途を示し、人民軍の強化・発展に大いに寄与した。

1963 年 8 月には黄海南道信川郡をはじめ各道・市・郡に対する主席の現地指導に同行して、全人民武装化の徹底した実現をはかり、同年 12 月には黄海北道麟山郡コムヒョン里を訪れ、全土を難攻不落の要塞にするための事業を強力に推し進めることについて強調した。

総書記は、社会主義経済建設を推し進め、人民生活を向上させるための主席の指導を補佐した。

1961 年 9 月と 1963 年 2 月に黄海製鉄所と南浦製錬所に対する主席の現地

指導に同行し、人民経済の技術改造の課題を立派に実現して勤労者を骨のおれる労働から解放するように幹部たちを導いた。

また、信川郡セナル農業協同組合や寺洞(サドン)区域梨峴(リヒョン)協同農場、豊山(プンサン)郡(現在の金亨権(キムヒョングォン)郡)地境(チギョン)協同農場を現地指導する主席に随行し、農業の機械化を実現して農民を骨のおれる農作業から解放するという主席の構想と意図を貫徹するよう幹部たちを啓発した。

1962 年 7 月の末から 8 月の初めにかけては、地方の経済を発展させ、人民生活を向上させるために主席が進めた地方の党および経済活動家昌城連席会議の議準備活動を現地で補佐し、翌年の 8 月には両江(リャンガン)道を現地指導する主席に随行して、食品の質と人民の食生活の状況を主席に報告して対策を講じるようにした。

1964 年 1 月には、平安(ピョンアン)南道温泉(オンチョン)郡邑協同農場に対する主席の現地指導に同行して、農業現物税廃止の問題や農村の住宅と基本建設を国が受け持つ問題など、社会主義農村建設において現実に提起される諸問題を主席に報告して農民の生活を改善するようにした。

総書記は社会主義文化建設を指導する主席を積極的に補佐した。

1963 年 3 月、朝鮮人民軍 2・8 劇映画撮影所で制作した記録映画を見て述べた主席の教えを当該部門の幹部に伝え、主席の指示通りに映画を修正して放映するようにした。同年 6 月 5 日には、主席の教示を貫徹するために朝鮮劇映画撮影所へ出向き、映画の制作に根本的転換をもたらすための具体的な方途を示した。

1963 年 10 月 9 日、主席が朝鮮人民軍 2・8 劇映画撮影所で制作した記録映画『軍民一致』は教育的価値があるとして広く普及するようにと指示した時にも、映画を普及するための対策を講じた。

1963 年 5 月には、朝鮮人民軍協奏団の作曲家に、歌劇をヨーロッパ式に

ではなく、朝鮮人の生活感情に合うようにつくるべきであるとした主席の教示を指針とするようにと述べた。

　また、テレビ放送を創設するという主席の構想を実現するために、テレビ放送の設備の製作や送受信テストなど、その準備活動を指導して、テレビ放送の開始を宣言するようにした。

　総書記の精力的な補佐活動は、革命と建設に対する主席の指導をより徹底的に実現するうえで大きな貢献となり、この過程で総書記は主席の卓越した指導風格と指導芸術を全面的に体得した。

(4)

　金正日総書記は学生をチュチェの革命偉業の継承者としてしっかり準備させるために精力的に活動した。

　総書記は、学生を政治的、思想的にしっかり準備させることに力を注いだ。

　総書記は学生に、労働者階級の革命闘争における領袖の絶対的地位と決定的役割、朝鮮革命と世界の自主化偉業の遂行に多大な貢献をした主席の偉大さを深く認識させ、彼らが主席に対する忠誠心を革命的信念とするようにした。

　1961 年 5 月 25 日、臥山（ワサン）洞— 竜城（リョンソン）間の道路拡張工事の休憩時間に学生たちと共に平南（ピョンナム）日用品総合工場の幼稚園を訪ねた時、**『祝福の歌』**を歌って主席に対する忠誠心を信念とするようにした。1962 年 4 月には、朝鮮人民革命軍創建 30 周年慶祝閲兵行進の訓練と当日の行事で主席を戴く姿勢と立場はどのようなものでなければならないかを自らの行動によって示した。そして日常生活で、主席の肖像画を丁重に掲げるよう崇高な実践的模範を示した。

総書記は学生を主席の革命思想と党の政策で武装させるために力を傾けた。

まず、学生の間に現れていたマルクス・レーニン主義古典に対する崇拝心と教条主義的で形式主義的な学習態度を克服し、主席の著作学習に新たな転換をもたらすとともに、党機関紙の学習を日常的に行って学生が党の思想と路線で武装するようにした。

また、革命伝統教育を強化して党と革命の歴史的根源を体得させるとともに、階級的教育と反修正主義教育を通じて労働者階級の革命的原則と階級的立場を固守するように導いた。

総書記は学生が高い科学知識を身につけるために奮励努力するように導いた。

まず、学生に学習に対する正しい観点を持たせるために、彼らが党と祖国に対する重い責任感を深く自覚するようにし、1961 年 3 月 25 日には 1 万ページ読書運動を提唱して、大学内に革命的学習気風を打ち立てるようにした。

金正日総書記は次のように述べている。

「私は最近、どうすれば学生の学習熱意をさらに高め、在学中にすべての学生により豊富で多方面にわたる知識を身につけさせることができるかをいろいろと考えてみました。その過程で、1 万ページ読書運動を展開すべきだという結論を得ました」

1 万ページ読書運動は、学生が主席の著作を体系的に、全面的に深く学習し、専攻分野をはじめとする各分野の書物をより多く、より速く、より深く読むようにするための大衆的読書運動であった。

総書記は 1 万ページ読書運動を強力に推し進めるために、党と民青組織が学生の間で政治活動を強化する一方、学習互助を組織して立ち後れた学生の学習を助けるようにするとともに、1 万ページ読書運動の歌をつくって普及するようにした。

こうして、1 万ページ読書運動は日ごとに大きな生命力を発揮し、この過程で学生は古典に対する崇拝から抜け出し、主席の著作を深く研究し体得して幅広い知識を習得した。

総書記は、学生を理論と実践を兼備した革命的人材として準備させることにも深い関心を払った。1961 年 4 月 21 日から 5 月 8 日まで当時の平壌紡織機械製作所で生産実習を行い、同年 5 月 15 日から 6 月 4 日まで臥山洞―竜城間道路拡張工事に参加した。

実習期間、総書記は 26 号旋盤を取り扱って、工場の労働者を模範機械創造運動へと立ち上がらせた。この運動は、機械と設備の管理における労働者の主人としての自覚を高め、活動態度に大きな変化をもたらし、後日、26 号模範機械創造運動へと深化・発展した。

金日成主席の首都建設構想と意図に基づいて行われる臥山洞―竜城間道路拡張工事に参加した総書記は、自らの模範的実践によって軍人建設者と学生を勤労の偉勲へと奮い立たせ、工事を期限前に完了して主席に報告できるようにした。

総書記は学生を軍事的にしっかり準備させた。

1962 年 3 月と 8 月、学生たちに、われわれは戦争を望まないが、戦争を決して恐れない、もし敵が戦争を起こしたら敢然と立ち向かって一撃の下に粉砕し、祖国統一の偉業を実現しなければならないと強調し、彼らが正しい戦争観で武装するようにした。

総書記は、1962 年 8 月中旬から 10 月の初めまで平壌市竜城区域御恩洞での軍事訓練に参加した。

訓練に先立ち、指揮官と学生は総書記に大隊政治部で大隊の活動全般を指導してほしいと願い出たが、総書記はそれを固辞し、一兵士として訓練に参加することにした。

そして、他の学生と同様に軍事規定と教範の要求通りに訓練し生活するとともに、戦術や射撃などの軍事訓練でいつも先頭に立った。

また、主席が創始したチュチェの軍事思想と戦法を深く研究・体得し、朝鮮の愛国名将の伝記と闘争経験、世界の名将の伝記と兵書を研究・分析し、その過程で朝鮮の実情と近代戦の特性に応じた戦闘指揮能力と用兵術を体得した。

そして、学生に主席が創始した独創的な戦法とそれを適用する方法を一つ一つ教え、戦術訓練に励んで実戦に役立つ豊富な軍事知識と指揮能力を身につけるようにした。また、すべての学生が各種の武器を巧みに扱い、百発百中の射撃術を身につけるようにすることに大きな力を入れ、訓練期間に彼らが軍隊のような強い規律の中で生活するよう導いた。

金正日総書記は学生を組織生活を通じて革命的に鍛えるようにした。

1961 年 7 月 22 日、総書記は栄えある朝鮮労働党に入党した。

1962 年 9 月、御恩洞軍事野営地で集団の思想・意志の団結を成し遂げるための党細胞総会を開くようにした総書記は、会議で**『金日成同志の革命思想に基づく党員の思想・意志の統一と団結を強化しよう』**と題する結語を述べた。

結語で総書記は、党員の思想・意志の団結の重要性を強調し、党の統一団結はほかならぬ領袖の革命思想に基づく統一団結であるという古典的定式化を行った。

総書記は、党組織に対する正しい観念を持って組織生活に誠実に参加するよう、自らの模範的実践によって学生党員を導く一方、新しい党生活総括制度を確立した。

1 カ月に 1 回行われていた党生活総括制度の不合理性を察した総書記は、周期がそれぞれ異なる党生活総括を行うようにした後、1963 年 4 月の末、

経済学部のある党分組が週党生活総括の手本を示すようにし、同年 9 月には、経済学部政治経済学科党細胞内のすべての分組に一般化させるようにした。

総書記が金日成総合大学在学中に確立した党生活総括制度は、党員の党生活に画期的な転換をもたらし、全党に新しい党生活総括制度を確立するうえで貴重な経験となった。

総書記は主体的立場に立って大学教育を改善することに深い関心を払った。

1960 年 10 月 29 日に発表した学科論文**『三国統一問題を再検討することについて』**において、総書記は三国時代の史料を深く分析したうえで、「新羅による三国統一論」の不当性を論証し、朝鮮の歴史を主体的立場に立って新たに体系化することについて強調した。総書記が「新羅による三国統一論」を主体的立場に立って再評価したことは卓越した科学的発見であり、朝鮮史教育の内容を主体的に改善するうえで画期的な転機となった。

総書記は、民族を特徴づける表徴は言語、地域、経済生活と文化生活の共通性から現れる心理的性格の共通性であり、資本主義段階に至ってはじめて民族が形成されたとするマルクス・レーニン主義の創始者の理論を鵜呑みにする一部の学生の誤った主張の不当性を論証し、民族の基本的表徴は血筋、言語、地域の共通性であり、その中でも血筋と言語の共通性は民族を特徴づける最も重要な表徴であると強調した。そして、朝鮮民族は一部の学者が主張しているように日本帝国主義の植民地支配時代や解放後に形成されたのではなく、5000 年の悠久の歴史を持つ英知に富む民族であり、地域的に離れて暮らしている海外同胞もみな同じ朝鮮民族であると述べた。

1960 年 12 月、総書記は朝鮮の実情に応じた政治経済学の教科書を新たにつくることを提唱した。1961 年 9 月には、マルクス・レーニン主義の創始者の思想と理論に基づいて叙述された他国の教科書の内容をそのまま写し

取った政治経済学の教材を、主席の思想と理論、特に第 4 回党大会の報告に基づいて体系と内容を新たに構成し、主席が社会主義経済建設において独創的に具現した問題を全面的に反映するという原則的問題を明示した。

その後、政治経済学の教科書を立派につくるために大安（テアン）電機工場党委員会拡大会議で行った主席の演説の録音テープをはじめ現地教示に関する資料を提供し、自ら執筆した論文**『地方経済の発展に関するわが党の方針の正当性』**を送り、教材の草稿を見ては助言を与えた。

このほかにも、哲学、法学、文学など社会科学科目の講義を主体的立場に立って改善するための方途を示し、現代科学技術の発展趨勢に即して自然科学の講義もあくまで主体的立場に立って改善するようにした。

教育方法を改善することにも大きな関心を払った総書記は、講義で古い注入式・書き取り式方法をなくして開発授業法を取り入れるとともに、教育行政を発展する現実の要求に即して改善し、教育条件と環境をより立派に整えるようにした。

こうして金正日総書記は大学時代に、広範な青年と人民の間で卓越した政治活動家、英明な指導者として限りない尊敬と信頼を受けた。

3

1964年4月～1974年2月

(1)

金正日総書記は1964年4月1日に党中央委員会に配置され､6月19日から活動を開始した。

総書記が党中央委員会で活動するのは金日成主席の意であり、党と人民の切なる願いであった。

総書記が党中央委員会で活動を開始したのは、総書記の栄えある革命活動と朝鮮労働党の強化・発展において画期的意義を持つ歴史的な出来事であった。

総書記が党中央委員会で活動を開始することによって、革命と建設に対する主席の指導がより確実に実現するようになり、党建設と党活動には新たな転換がもたらされるようになった。

総書記は党中央委員会で活動を開始した後、指導員、課長を経て1970年9月から副部長、1973年7月から部長を務め、同年9月からは党中央委員会書記の重責を担い、1972年10月に党中央委員会委員に選出された。

総書記は党事業と党活動の基本を正しく捉えるように賢明に導いた。

党事業と党活動の実態を把握した総書記は、1964年6月20日の党中央委員会組織指導部の活動家への談話『**わが党を永遠に金日成同志の党に強化し発展させよう**』で党事業と党活動の基本を明確に規定した。

金正日総書記は次のように述べている。

「わが党の事業と活動において基本となるのは、全党に金日成同志の思想体系を確立することです。全党に金日成同志の思想体系を確立することはわが党

の建設と党活動の根本的原則であり、これはわが党が存在し活動する全期間にわたって恒久的に堅持していくべき最も重要な事業です。したがって、すべての党事業と党活動は、金日成同志の思想体系を確立し、金日成同志に一層忠誠を尽くし、金日成同志の教示を貫徹することに集中されなければなりません」

総書記は、まず党中央委員会の各部署と活動家が党活動の基本をしっかり捉えていくようにし、党中央委員会の活動家が金日成主席の教示を貫徹することに重点を置いて党活動を展開するようにした。そして1965年からは、下部単位を指導する際、主席の教示に基づいて作成した指導要綱に従って活動するようにした。

また、中央と地方の各級党組織とすべての党活動家が基本を正しく捉えて活動するようにした。

1964年と1965年には、各地方の党活動と文学・芸術部門、出版・報道部門の党活動の実態を現地で把握し、全党に主席の教示の伝達・浸透体系を整然と打ち立てる一方、それを無条件に貫徹する革命的気風を確立することに力を集中するようにした。同時に、金日成主席の教示実行対策を立て、教示実行総括を着実に行うようにし、江西(カンソ)郡党総会と青山(チョンサン)里党総会での主席の教示の実行状況総括を各郡党や里党で毎年行うことを制度化するようにした。

総書記は精力的な思想・理論活動により、従来の労働者階級の革命思想史を全面的に分析・総括した。

1966年5月20日と6月17日、9月30日の社会科学者への談話『**従来の労働者階級の革命思想史を正確に分析・総括するために**』において、マルクス・レーニン主義の古典を研究するうえで提起される原則的問題を解明した。

総書記は、従来の労働者階級の革命思想史を総括する作業の目的を、主席の革命思想の偉大さと独創性、それが労働者階級の革命思想と人類の思想発展に占める歴史的地位を科学的に解明することに置き、この作業を主体

的立場に立って進めた。

まず、マルクス、エンゲルス、レーニンの主要著書を全面的に研究・分析し、再評価する過程で、従来の労働者階級の革命思想と理論は今日の実情に合わず、主席の革命偉業を継承していくための思想的・理論的下地にはなりえないことを実証した。

1969 年 7 月 1 日、従来の労働者階級の革命思想史を総括する作業の締めくくりに当たって総書記は、マルクス・レーニン主義はその制約性のため労働者階級の革命闘争と社会主義建設で提起される理論的・実践的問題に正しい解答を与えることができないことを明確にし、われわれの時代の革命と建設を導く思想は金日成主席の革命思想であると確言した。そして、主席の革命思想を朝鮮の現実に創造的に適用されたマルクス・レーニン主義、またはわれわれの時代のマルクス・レーニン主義とのみ呼ぶわけにはいかないと指摘し、主席が示した思想はただ主席の尊名と結び付けてのみ呼ぶことができる新しく独創的な思想であると強調した。

金正日総書記は、従来の労働者階級の革命思想史を総括する作業を通じて、金日成主席の革命思想を科学的に定式化するための思想的・理論的準備を整えた。

(2)

金正日総書記は、党の自衛的軍事路線を貫徹するための活動を賢明に指導した。

新たな情勢に対処して、金日成主席は 1966 年 10 月、朝鮮労働党第 2 回代表者会を招集し、すでに提示していた経済建設と国防建設を並進させるという方針を党の戦略的路線とし、それを貫徹するよう強調した。

1968年2月2日の著作『**アメリカ帝国主義の戦争挑発策動に対処して万全の戦闘動員準備を整えよう**』をはじめとする多くの著作で、総書記は党の自衛的軍事路線を貫徹して国防力を強化するという課題を提示し、それを実現するための活動を指導した。

総書記は、全軍幹部化と全軍近代化の方針を一層徹底的に貫徹して、人民軍を不敗の革命武力として強化することに力を傾けた。

全軍幹部化の方針を貫徹するために、総書記は1964年6月、朝鮮人民軍総参謀部の幹部との談話『**人民軍は金日成同志と朝鮮労働党に限りなく忠実な革命の前衛部隊になるべきである**』において、人民軍を金日成主席と朝鮮労働党に限りなく忠実な革命の前衛部隊にするのは自分の揺るぎない決心であるとし、そのためにはまず人民軍の幹部が党と領袖に限りなく忠実でなければならないと強調した。

1966年4月と5月には姜健(カンゴン)総合軍官学校を訪ねて、党と領袖に限りなく忠実な軍事指揮官をより多く育てるべきだと述べ、1973年2月、金日成軍事大学を訪ねては軍事教育活動を改善するための課題を示した。

1965年から1967年にかけて、総書記は最前線の戦車区分隊や航空区分隊、東・西海岸の海軍部隊や海岸砲兵中隊を訪ね、軍人たちの戦闘訓練を点検し、指導した。

全軍近代化の方針を貫徹するために、総書記は人民軍の武力装備の改善に深い関心を払い、多くの軍需工場を現地指導した。

総書記は、全人民武装化と全国土要塞化を強力に推進して全人民的防衛体系を確立することに深い関心を払った。

1967年1月、全国を小汪清遊撃区のように築く構想を示した総書記は、党の全人民武装化方針の要求に即して労農赤衛軍の隊伍を固め、戦闘訓練を強化するとともに、1970年9月に組織された赤の青年近衛隊の軍事訓練

を正しく行うようにした。

総書記は、全国土要塞化の方針を貫徹するために東・西海岸の地理的特性に即して防御陣地を堅固に築き、火力システムを緻密に構築し、巡察を強化して、いかなる敵も侵入できないようにしなければならないと強調した。

総書記の指導の下に、国防力はいかなる敵の侵略策動も断固粉砕して祖国の安全を確保することができるように強化された。

金日成主席は、特出した政治力と非凡な軍事的資質をそなえ、人民軍の指揮メンバーの間で限りない信頼を受けている総書記に人民軍の活動を直接指導するよう命じた。

総書記は人民軍を政治的、軍事的にさらに強化し、国防力を不敗のものにするための活動を賢明に指導した。

総書記は、人民軍に対する党の指導体系を確立するための活動を指導した。

まず、1967 年 5 月に行った人民軍内での党中央委員会第 4 期第 15 回総会の文献討議状況の点検、同年 7 月の人民軍の幹部との談話、その後の数回にわたる人民軍各部隊に対する現地指導などで、全軍に党の指導体系を一層強化させるようにした。

そして、軍隊内の党組織と政治機関の機能と役割を一段と強めるために、連隊以上の各級部隊に政治委員制を設け、区分隊の政治担当副大隊長と政治担当副中隊長の職制を政治指導員の職制にかえ、軍隊内の政治幹部養成の総合的拠点である政治軍官学校を政治大学に格上げし、大学の名称に金日成主席の尊名を冠する措置を講じた。

総書記は、人民軍内で金日成同志を首班とする党中央委員会を生命を賭して守ろうというスローガンを高く掲げて全軍を党と領袖の周りに固く結束させ、金日成主席の唯一的指導の下に全軍が一体となって動く指揮体系を確立するようにした。

そして、軍人の間で忠実性教育、党政策教育、革命伝統教育、階級的教育、社会主義的愛国主義教育を強化するようにした。

総書記は、アメリカ帝国主義の軍事挑発策動を粉砕し、反米対決で輝かしい勝利を収めるようにした。

1968 年 1 月、民族保衛省の幹部からアメリカ帝国主義の武装情報収集艦プエブロ号が共和国の領海に侵入したという報告を受けた総書記は、海軍が警備艦と魚雷艇の協同作戦によって拿捕するようにし、海軍はプエブロ号を拿捕した。その翌年、大型偵察機 EC-121 が朝鮮の領空に侵入してスパイ行為を働いた時には、それを撃墜するための作戦を展開して海中に葬り、アメリカ帝国主義の軍事挑発策動を粉砕するようにした。

(3)

金正日総書記は、文学・芸術革命を起こす方針を示し、それを実現するための活動を指導した。

1965 年 3 月 3 日の党中央委員会の活動家への談話**『文学・芸術部門で革命を起こすために』**、同年 12 月 11 日の党中央委員会の活動家への教示などで文学・芸術革命を起こす方針を示し、文学・芸術の内容と形式、創作体系と創作方法のすべての領域で新しいチュチェの文学・芸術を建設することを文学・芸術革命の本質と規定した。

総書記は、映画革命を先行させて文学・芸術革命の突破口を開くようにした。

まず、映画革命の担い手である映画人の隊伍をしっかり固め、彼らの政治的・実務的水準を高めることに力を注いだ。

総書記は、映画部門に金日成主席の教示伝達・浸透体系と学習体系を整

然と確立するようにし、1970 年 1 月には、従来の古い芸術総括会議制度をなくし、金日成主席のチュチェの文芸思想研究会を定期的に行うようにした。そして、しばしば映画芸術部門の会議を指導して、映画人は組織生活を通じて革命的に鍛え、創作過程を通じて革命化、労働者階級化を促進すべきであると強調した。

また、映画人の芸術的技量を高めるために、美学理論を深く体得するための芸術学習を強化し、演技訓練と話術訓練、技量発表会と舞台公演を日常的に行うようにした。

総書記は、映画制作活動に革命的転換をもたらすために、主席が抗日革命闘争の時期に創作した不朽の名作を映画化することに大きな力を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「不朽の名作を映画化するのは、わが党の栄えある革命文学・芸術の伝統を子々孫々に伝える責任重大な仕事であり、また不朽の名作をモデルにして映画芸術全般を高いレベルに引き上げる栄誉ある仕事です」

1967 年 2 月、総書記は白頭山創作団を組織し、革命伝統を主題とした作品を創作することによって経験を積むようにした。

こうした準備に基づいて 1968 年 4 月、映画芸術部門の創作家に不朽の名作『**血の海**』を映画化する課題を与え、精力的な指導によってそれを最高の水準で完成するように導き、次いで不朽の名作『**ある自衛団員の運命**』の映画化をわずか 40 日間で立派に完成するようにした。また、不朽の名作『**花を売る乙女**』の映画化を指導して、それがチェコスロバキア(当時)のカルロビ・バリで開催された第 18 回国際映画祭で特別賞と特別メダルを受賞する大傑作となるようにした。

総書記は、金日成主席が抗日革命闘争の時期に創作した不朽の名作を映画化する過程で朝鮮式の新しい創作指導体系と創作体系を確立し、革命的

映画芸術の輝かしい伝統を築いた。

1970 年 6 月 18 日の作家、演出家への談話**『社会主義的現実を反映した革命的映画をより多く創作しよう』**において、社会主義的現実を主題にした映画をより多く創作する課題を示し、それを遂行するうえで提起される理論的・実践的問題を明示した。そして、現実を主題にした数多くの作品の種子を選定し、それぞれの映画の制作を指導した。そうして、1970 年の 1 年間にも現実を主題にした数十本の映画が制作された。

総書記は映画革命の貴重な成果と経験に基づき、1969 年 9 月に歌劇革命を起こす方針を提示し、それを実現するための活動を精力的に指導した。

総書記は、革命的な内容と民族的な形式に基づいて歌劇芸術を近代化、通俗化することを歌劇革命の基本課題と規定し、歌劇を革命的な内容で一貫させたうえで歌劇の形式を変革し、基本表現手段である歌を有節化し、パンチャン（傍唱）を広く取り入れ、舞踊をドラマと密着させ、ドラマの進展に伴って絶えず変わる流動式の立体舞台を作り出すという朝鮮式の新しい歌劇創作原則を示した。

歌劇革命の方針を提示した総書記は 1971 年 3 月、不朽の名作**『血の海』**を歌劇化することによって歌劇革命を起こす課題を示した。

そして、原作の深奥な思想的内容を忠実に再現して、従来のすべての歌劇と根本的に異なる朝鮮式の歌劇の台本を作らせた後、優秀な創作家、芸術家で創作集団を組織し、作品の種子とそれを形象化する方途を示すとともに、歌の歌詞と旋律、舞踊、舞台美術の全般にわたって朝鮮式の歌劇創作の原則を立派に具現するよう指導した。

こうして、不朽の名作**『血の海』**の歌劇化は 4 カ月の間に立派に完成し、1971 年 7 月に革命歌劇『血の海』が誕生した。

総書記は、『血の海』式革命歌劇の創造によって歌劇革命の最初の砲声を

あげ、それに基づいて革命歌劇『党の真の娘』、『密林よ語れ』、『花を売る乙女』、『金剛山の歌』の創作活動を指導し、5 大革命歌劇を記念碑的名作として完成するようにした。

その後も、革命歌劇『ある自衛団員の運命』と『明るい太陽の下で』など多くの歌劇を時代の傑作として創作するよう精力的に指導して、歌劇革命の成果を固め、拡大した。

総書記は文学作品の創作に新たな転換をもたらすようにした。

1966 年 2 月 7 日、作家同盟中央委員会委員長との談話『**新しい革命文学の建設について**』において、自主時代と朝鮮革命の要求に即した新しい革命文学を建設する方針を提示し、新しい革命文学は名実ともに領袖を形象化した文学を意味すると述べた。

その後、領袖の形象化を基本とする 4・15 文学創作団を組織し、1970 年 12 月には、金日成主席の革命活動史を形象化した叢書『不滅の歴史』の創作で提起される理論的・実践的問題を明示し、作品の思想的・芸術的水準を最高の水準で保障するようきめ細かく指導した。そうして『革命の黎明』、『1932 年』をはじめとする叢書『不滅の歴史』に属する長編小説が創作されるようになった。

総書記は、主席が抗日革命闘争の時期に創作した不朽の名作を小説化し、主席に限りなく忠実なわれわれの時代の人間の気高い思想的・精神的品格を深く描き出す革命伝統や祖国解放戦争、社会主義の現実、祖国の統一などを主題とした作品をより多く創作するようにした。

一方、音楽、舞踊、美術、サーカスなど文学・芸術のすべての分野で革新を起こすように導いた。そうして、1970 年代にチュチェの文学・芸術の全盛期が開かれた。

総書記は、映画革命をはじめとする文学・芸術革命を指導する過程で得

た成果と経験を理論的に一般化し集大成して、1973 年 4 月、古典的著作**『映画芸術論』**を発表した。

この著作で総書記は、チュチェの人間学に関する理論、文学・芸術作品の種子に関する理論、文学・芸術創作における速度戦に関する理論、革命的な創作体系と創作指導体系に関する理論、チュチェの映画演出理論と俳優演技理論をはじめ、撮影、音楽、美術などチュチェの文学・芸術建設において提起されるすべての理論的・実践的問題に全面的な解答を与えた。

(4)

金正日総書記は、社会主義経済建設で新たな革命的大高揚を起こすために力を注いだ。

金日成主席は、1967 年 6 月の末から 7 月の初めにかけて行われた党中央委員会第 4 期第 16 回総会で、新たな革命的大高揚を起こす方針を提示した。

総書記は、社会主義経済建設において提起される理論的・実践的問題を科学的に解明した。

当時、一部の幹部の間に、経済が発展し、その規模が拡大するにつれて生産成長速度が落ちるという「理論」と物質的刺激を基本とする経済管理理論に一理があるかのように考え、経済建設で消極的で保守的な立場を取る傾向が現れ、国の経済発展を阻害していた。

1967 年 6 月 13 日の著作**『政治的・道徳的刺激と物質的刺激に対する正しい理解のために』**において総書記は、物質的刺激を絶対視する修正主義的傾向と政治的・道徳的刺激を絶対視する左傾的傾向を批判し、政治的・道徳的刺激を基本とし、これに物質的刺激を正しく結合させる問題、社会主義経済建設で速度を基本とし、それに積極的な均衡を合わせる問題をはじめ、社会

主義経済建設で提起される理論的・実践的問題に科学的な解答を与えた。

総書記は、全人民を新たな革命的大高揚へと奮い立たせるための思想宣伝を強化するようにした。

1967 年 7 月 3 日の党中央委員会宣伝扇動部の活動家への談話**『経済建設と国防建設で革命的高揚を起こすための思想宣伝の強化について』**において総書記は、全人民を新たな革命的大高揚へと奮い立たせるための思想活動の方向を示した。

1967 年 10 月には党中央委員会の活動家に、修正主義的経済理論を克服するための思想闘争を展開するよう強調し、修正主義分子の思想的毒素が強く及んでいる単位に対する指導・点検を手配して思想闘争を深化させるようにした。

総書記は大衆の中に入って、党員と勤労者を新たな革命的大高揚へと奮い立たせた。

1967 年 7 月 15 日、主席に同行して降仙(カンソン)製鋼所を訪ねた総書記は、鋼鉄の生産を大幅に増やして革命的大高揚の炎が燃え上がるようにするためには保守主義、消極分子との闘争を強く繰り広げなければならないとし、この製鋼所の労働者たちが主席の大いなる信頼と愛にこたえて、新たな革命的大高揚の先頭に立ってチョンリマ作業班運動先駆者の栄誉を引き続き輝かせていくべきだと励ました。また、同年 8 月には竜城機械工場を訪ねて、主席が新たな革命的大高揚の先頭に立たせた企業所の栄誉を胸に刻み、経済建設と国防建設において重要な意義を持つ 6000 トンプレスをつくって主席を喜ばせるべきだと労働者たちを鼓舞激励した。

総書記は、社会主義的工業化の歴史的課題を実現するための活動を指導した。

そのために、1967 年 8 月と 9 月には長津江(チャンジンガン)発電所と平壌火力発電所、翌年の 9 月には北倉(プクチャン)火力発電所の建設現場に出向いて、発電所の建設を早め、

発電能力を高めるようにした。そして、黄海製鉄所などの金属工場や機械工場、化学工場、軽工業工場を現地指導し、工業の自立性を高め、近代化を推し進めるための問題を解決するようにした。

また、工業部門の技術改造を積極的に推進するために、基幹工業の多くの工場、企業と各市・郡の地方産業工場を現地指導し、生産工程の機械化、半オートメ化、オートメ化を実現していくようにした。

総書記は、農業を発展させるために主席の指導業績が秘められている粛川(スクチョン)郡、淮陽(ヘヤン)郡浦泉(ポチョン)協同農場、黄州(ファンジュ)郡黒橋(フッキョ)協同農場をはじめとする多くの郡や協同農場を訪れ、新しい農業指導体系の優越性と分組管理制の生命力が余すところなく発揮されるようにした。そして、重要な穀物生産地帯である西海岸の平野部や山間部の農村を現地指導して、穀物の生産を増やし、農業を多角的に発展させ、農村の技術革命を促進するための課題と方途を示した。

総書記は、朝鮮労働党第 5 回大会を勝利者の大会にし、党大会が示した 3 大技術革命の課題を遂行するための活動を賢明に指導した。

第 5 回党大会を契機に党大会の代表たちに金日成主席の肖像バッジを授与するようにし、肖像バッジの図案と制作を指導した。

そして、主席の党大会報告の作成を補佐し、党大会で審議・採択する党規約の草案を修正・補足する活動も指導した。

1970 年 9 月党中央委員会の責任幹部に、朝鮮労働党の規約に党の指導思想を新たに明記する問題をずっと前から考えてきた、今回の第 5 回党大会で党規約を修正・補足する際に、党の指導思想を金日成主席が創始した不滅のチュチェ思想とすべきだと述べた。そうして、党規約の草案にはチュチェ思想が党の指導思想として新たに補足され、大会で党の規約として採択された。これによって、党のチュチェの性格と党の統一団結の思想的基礎が一層明確になった。

総書記は、党大会の文献の準備から大会の次第、記念撮影、代表の参観

対象や宿所の問題に至るまで具体的に指導した。

こうして、第 5 回党大会は党の歴史に、社会主義的工業化の輝かしい勝利を総括した誇り高い勝利者の大会、金日成主席を中心とする全党と全人民の統一団結を示した団結の大会として記された。

総書記は、朝鮮労働党第 5 回大会が提示した 3 大技術革命の課題を遂行するための活動を賢明に指導した。

朝鮮労働党第 5 回大会で金日成主席は、重労働と軽労働の差、農業労働と工業労働の差を著しく縮め、女性を家事の重い負担から解放することを基本内容とする 3 大技術革命の課題を提示した。

総書記は、高熱労働と有害労働をなくし、重労働と軽労働の差を縮めることに力を注いだ。

そのために、全面的オートメ化を実現する方針を提示し、それを実現するための活動を精力的に指導した。

1972 年 10 月 23 日の教示をはじめとする多くの教示で、全面的オートメ化の本質と原則、基本要求を明示し、黄海製鉄所をそのモデル単位として設定した。

そして 1973 年 1 月、有能な技術者からなる技術チームを黄海製鉄所に派遣し、彼らがそこの労働者と力を合わせて、生産工程のオートメ化を実現するうえで提起される科学技術上の問題を解決するようにした。

総書記は、金より人を優先視し、勤労者を骨の折れる労働から解放し、仕事が楽にできるようにする方向でオートメ化を実現することをオートメ化実現の根本原則とし、オートメ化が到達できる最高の水準のモデルにすることを黄海製鉄所オートメ化の目標として示した。そして、鋼鉄職場の産業テレビ化と無線化を実現して勤労者にオートメ化の冥利を味わわせ、比較的単純な工程からオートメ化して経験を積ませ、自信を持たせた後、次第に複雑な

工程をオートメ化するといったやり方で工事を進めるようにした。

また、黄海製鉄所のオートメ化を自力更生の原則に基づいて進めるようにする一方、党の指導と国の保障対策を講じ、1 年余りの間に数十回もの指示を与え、数回にわたってオートメ化の機具や要素、設備を送った。

総書記は、黄海製鉄所のオートメ化のモデルを全国に一般化させるために、1973 年 12 月、主要な工場、企業の責任幹部と 3 大革命グループの責任者の方式講習を行って黄海製鉄所のオートメ化の経験を見習うようにするとともに、オートメ化の経験を積んだ技術者を主要な工場、企業に派遣するようにした。

黄海製鉄所におけるオートメ化の成果が金属、化学、建材などの工業部門に一般化されることによって、朝鮮で全面的オートメ化の歴史が始まり、技術革命は新たな高い段階に入ることになった。

総書記は、生産工程のオートメ化とともに、骨が折れ、手間がかかる作業の機械化、総合的機械化にも深い関心を払って、炭鉱、鉱山の採掘設備と運搬設備を大型化、高速化し、林業、建設などすべての部門で機械化の水準をさらに高めるようにした。

総書記は、工業労働と農業労働の差を縮めるための技術革命の遂行にも深い関心を払った。

まず、農業の物質的・技術的手段を強化するために、トラクターの生産能力を高め、トラック生産拠点をより立派に整え、各道に農業機械工場を建設し、各郡に部品生産拠点と修理拠点を築くようにした。

そして、青山里を農村技術革命のモデル単位にするために総合的機械化、化学化を実現し、その成果を全国に一般化させるようにした。

また、女性を家事の重い負担から解放するために、食品の生産を工業化し、全国的に農村の村落の水道化を促進する一方、託児所、幼稚園をさらに整備し、その収容能力を高めるようにした。

(5)

金正日総書記は、金日成主席の生誕60周年を契機に、全人民が、主席が切り開いたチュチェの革命偉業を代を継いで継承し完成していくという崇高な使命感を胸に深く刻み付けるようにした。

1971年8月に朝鮮革命の聖山白頭山に登った時の教示、1972年4月22日に万景台と七谷革命史跡地を見て回りながら行った談話、朝鮮人民軍総政治局の責任幹部との談話**『新しい世代の人民軍指揮メンバーを朝鮮革命の血統をしっかりと継いでいけるように準備させなければならない』**などで総書記は、主席が切り開いたチュチェの革命偉業を代を継いで継承し完成しなければならないと述べた。

そして、主席が切り開いたチュチェの革命偉業を代を継いで継承し完成していくのは、時代に対して担っている朝鮮人民の崇高な使命であり、その使命を全うするためには主席の革命思想を断固擁護し、あくまで貫徹し、主席が築いたチュチェの革命伝統と革命業績を永遠に固守し、立派に継承し発展させていかなければならないと強調した。

総書記は1971年10月29日、党中央委員会宣伝扇動部の活動家への談話**『金日成同志の生誕60周年を民族最大の祝日として迎えるために』**において、主席の生誕60周年を最も意義深い民族最大の祝日として迎えるための課題を示した。

まず、主席の偉大さと不滅の革命業績を代を継いで末長く伝え、輝かすための活動に力を注ぎ、主席の生誕60周年を迎えて万寿台(マンス)の丘に主席の銅像を建て、朝鮮革命博物館を新たに建てるようにするとともに、革命戦跡と革命史跡を整備し、「金日成同志革命活動史研究室」を立派に整え、着実

に運営するようにした。

また、世界各国の党及び国家の首班をはじめとする各界の人士が主席に贈った贈り物を貴重な国宝として大切に保存し、末長く伝えるための贈物陳列室を立派に整えるようにした。

総書記は、主席の生誕60周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えるようにした。

金日成主席の生誕60周年を契機に金日成勲章、金日成賞、金日成青年栄誉賞、金日成少年栄誉賞が新たに制定され、主席の親筆尊名入りの時計表彰制が設けられて主席の生誕60周年慶祝行事に参加した代表たちに授与された。また、主席の肖像バッジがすべての党員と勤労者に授与され、頌歌『主席の万年長寿祈ります』が創作、普及された。

総書記は党員と勤労者の思想教育に深い関心を払い、『金日成著作選集』などの主席の古典的著作、『革命と建設に関する偉大な領袖金日成同志の教示』などの部門別教示集、『金日成同志略伝』、『人民の自由と解放のために』(年代順)などの革命歴史図書や革命伝統教育図書を大々的に出版・普及するようにした。

このほかにも、記録映画を制作・上映し、討論会や記念講演を行うようにした。

総書記は、主席の生誕60周年までに3万台の工作機械を生産し、6カ年計画の2年分の課題を繰り上げて遂行するための勤労者の生産闘争を輝かしい勝利へと導いた。

総書記は、主席の生誕60周年慶祝行事が高い政治的・思想的水準で、大政治祝典として行われるようにした。

主席の生誕60周年慶祝行事は、朝鮮人民に主席を戴いて革命を進める限りない民族的誇りと革命的自負心を抱かせ、チュチェの革命偉業を代を継

いであくまで継承し完成するという崇高な使命感を胸に深く刻ませる歴史的な契機となった。

その後、金正日総書記は毎年4月15日を民族最大の祝日として慶祝することを伝統化するようにした。

(6)

金正日総書記は、党の組織活動を根本的に改善・強化するための活動を賢明に指導した。

総書記は全党に新しい党生活総括制度を確立するようにした。

そのために、すでに金日成総合大学在学中に実施した週党生活総括の経験に基づき、1960年代の末から1970年代の初めにかけて、まず文学・芸術部門の党組織で新しい党生活総括制度を確立するようにした。1973年8月21日に党中央委員会組織指導部の責任幹部協議会で**『全党に新しい党生活総括制度を確立するために』**という演説を行い、1973年9月、全党に新しい党生活総括制度を確立するようにした。

総書記は、党の隊伍を拡大し、その質的構成を改善するために、革命と建設において重要な意義を持つ部門の党勢を強化する方向で党勢拡張を推し進めるようにする一方、新しい世代、特に労働青年の中から先進分子を多く入党させ、革命的世界観が確立し、党への忠誠心が強い人は、過去を問わず、現在の動向を基本にして党に受け入れるようにした。また、党の隊伍を質的に強化するために党員証の交付を高い政治的・思想的水準で行うようにした。

金正日総書記は、党の思想活動を革命的に改善・強化することに力を注いだ。

まず、党の思想活動の内容をチュチェ思想で一貫させるようにし、1973 年 3 月には、まちまちであった学習班の名称を「金日成同志革命思想学習班」と改め、すべての学習班が主席の著作を基本として学習するようにした。また 1974 年 3 月には、「金日成同志革命活動史研究室」と「金日成同志教示研究室」を統合して「金日成同志革命思想研究室」にし、それを通じてチュチェ思想の原理教育と忠誠心教育を幅広く、掘り下げて行うようにした。

総書記は、党の思想活動の方法を発展する現実の要求に即して改善するようにした。

そのために、1973 年春、文学・芸術部門に金日成主席が抗日革命闘争の時期に創造した問答式学習方法を取り入れて、その模範を創造するよう課題を与え、同年 6 月には中央芸術団体の問答式学習コンテストを行うようにした。その経験に基づき、1973 年 10 月 29 日から 11 月 5 日まで第 1 回全国芸能人学習コンテストを催し、コンテストの最終日には会場に出向いて問答式学習方法の優越性とそれを具現する方途を明示した。その後、問答式学習方法は全党に一般化され、学習には新たな転換がもたらされた。

総書記は、講演宣伝活動の質的水準を高めるために、全党の講演網を再整備し、講演の参加規律を確立するとともに、講師の陣容を有能な人で固め、彼らの水準を高めるための対策を講じた。

また、抗日遊撃隊式生産激励活動を力強く繰り広げるために 1973 年 6 月、党、経済、出版・報道部門の活動家と芸能人で生産激励隊を組んで載寧(チェリョン)鉱山、殷栗(ウンリュル)鉱山、苔灘(テタン)鉱山に派遣して生産激励活動の経験を積ませ、同年 11 月には金星(クムソン)トラクター工場と勝利(スンリ)自動車総合工場に生産激励隊を派遣して生産激励活動の手本を生み出すようにした。

そして、その生命力が実証された新しい生産激励方法を全国に一般化させるために、平壌市と各道、職業総同盟や青年同盟などの勤労者団体に生産激

励活動を専門とする芸能宣伝隊を組織し、主要な工場、企業、協同農場には働きながら活動する機動芸能宣伝隊を組織するようにした。同時に新聞、放送、テレビ、映画による生産激励活動を強化する一方、党、行政・経済活動家が社会主義建設の現場に出向いて生産激励活動を行うようにした。

総書記は、党の活動体系と方法を改善することにも深い関心を払った。

そのために、1973 年 9 月、党中央委員会をはじめ各級党委員会の部署で革命的な職能を作り、それに従って活動する新しい秩序を確立するようにした。

総書記は、党活動で行政化の傾向を一掃し、党活動を徹底した対人活動、政治活動に切り替えるようにした。

(7)

金正日総書記は、祖国統一偉業の実現を朝鮮労働党と人民の確固たる革命的意志とし、1965 年春と 1970 年 5 月をはじめ数回にわたって祖国統一に関する戦略思想を闡明した。

総書記は、祖国統一に関する戦略思想に基づき、祖国統一勢力を強化するための活動を精力的に指導した。

まず、祖国統一の主な勢力である共和国北半部の革命勢力を不敗のものにすることに大きな力を注ぎ、共和国北半部の政治的・軍事的・経済的力量を一層強化した。

また、南朝鮮の愛国勢力を強化するための活動を強力に推し進めた。

総書記は、祖国統一の 3 大原則と 5 大方針を実現するための闘争を力強く展開するようにした。

1970 年代に入って、祖国統一勢力が強化された反面、アメリカ帝国主義と南朝鮮当局は内外で一層孤立し、窮地に陥った。こうした時期に、金日成

主席は1971年8月6日、北南間の幅広い協商を提案して北南対話の道を開き、1972年5月3日には、北南高位級政治会談に参加するために平壌に来た南側代表との談話で祖国統一の3大原則を提示した。

総書記は、祖国統一の3大原則を民族共通の唯一の統一綱領として内外に宣布するようにした。

1972年5月、共同声明の草案を見た総書記は、声明の第1条項に祖国統一の3大原則をそのまま反映し、それに基づいて共同声明全般の内容を構成するようにした。そして、南朝鮮当局が祖国統一の3大原則が合意を見たという事実を共同声明で発表することを恐れ、高位級秘密接触で時間を延ばそうとしているのに対処して、板門店（パンムンジョム）会談で主動的攻勢をかける一方、北と南が共同で確認した公明正大な統一原則の内容が世界に広く知られるようにした。そうして1972年7月4日、自主、平和統一、民族大団結の原則を基本内容とする北南共同声明が発表された。

総書記は、祖国統一の3大原則を貫徹するための闘争を精力的に指導した。

1972年7月、北南赤十字予備会談に参加する活動家たちに北南間の対話と協商で堅持すべき戦術的原則を明示し、7月19日には、会談が行われる板門店にまで出向いて第23回赤十字予備会談の実態をつぶさに確かめ、会談が順調に行われるようにした。そうして、1年近くも長引いていた北南赤十字予備会談が成功裏に終了し、1972年8月から本会談が平壌とソウルで交互に行われることになった。

総書記は、北南間の対話と協商の幅をさらに広げることに大きな力を注いだ。

そうして、1972年10月から3回にわたって北南調整委員会共同委員長の会議が行われて民族の常設的な共同機構である北南調整委員会が正式に構成され、11月の末からは平壌とソウルで交互に会議が開かれ、北と南、海外の各階層の人民の間で祖国統一の気運が急激に高まるようになった。

総書記は、主席が提示した祖国統一の 5 大方針を貫徹するための闘争に全人民を立ち上がらせた。

1973 年 6 月 23 日、金日成主席は祖国統一の 5 大方針を提示した。

総書記は、通信と新聞、放送を通じて祖国統一の 5 大方針を内外に広く宣伝し、全国各地で祖国統一の 3 大原則と 5 大方針を支持し、7・4 北南共同声明を反故にした南朝鮮当局を暴露・糾弾する大衆集会を広範に催すようにした。

総書記は、祖国統一の 5 大方針に明示されている大民族会議の開催を統一問題解決の重要な鍵とみなし、これを実現するための主動的な対策を立てる一方、祖国統一に有利な国際的環境をつくり出すために国連の舞台を通じて積極的な外交攻勢を展開するようにした。

こうして、1973 年 9 月にニューヨークに共和国の国連常駐代表部が開設され、1973 年 10 月に開かれた第 28 回国連総会では金日成主席が提示した祖国統一の 3 大原則を歓迎し、朝鮮に対するアメリカの内政干渉の道具である「国連韓国統一復興委員団」を即時解体するという決議案が採択された。これは、反統一勢力の民族分裂策動を粉砕し、朝鮮の統一問題解決に有利な情勢をつくり出す画期的な出来事であり、祖国の自主的平和統一方針の輝かしい勝利であった。

(8)

金正日総書記は、朝鮮労働党の対外活動の基本使命とそれを実現するための方途を示した。

総書記は、1964 年 10 月 23 日と 1965 年 4 月の対外活動部門の活動家への教示をはじめとする多くの教示で、対外活動の基本使命は金日成主席の革

命思想の世界史的勝利に寄与することであると示した。

そして、対外活動の基本使命を全うするためには、国際舞台で主席の絶対的な権威と威信をしっかりと保障し、主席の対外活動を最高の水準で補佐しなければならないと強調した。

総書記は、対外活動の基本使命に即して対外活動に新たな転換をもたらすための課題と方途を示した。

まず、主席の偉大さとチュチェ思想の宣伝を対外宣伝の基本とし、対外関係の幅を広げて新興諸国との関係を強化することを対外活動の重要な課題として提示した。そして、対外活動部門の活動家が主席の対外活動をよりよく補佐するためには、いつも変わることなく清らかな心を持ち、高い政治的資質と多方面にわたる、豊かな知識、気高い品格を備えなければならないと述べた。

総書記は、1965 年 4 月 9 日から 21 日まで金日成主席のインドネシア訪問を最高の水準で補佐した。

総書記は、対外活動部門の活動家が金日成主席の偉大さとチュチェ思想についての対外宣伝を強化することに大きな力を注ぐようにした。

まず、対外活動で提起されるすべての問題を主席に集中させ、主席の教示に従って処理する活動体系と、対外宣伝活動を統一的に、集中的に行う活動体系を確立した。そして、対外宣伝部門の活動家の陣容を政治的・思想的に鍛えられた人で固めるようにし、強力な外国文出版拠点を築くための対策を立てた。

そうして、1969 年にマリで最初の「金日成同志著作研究グループ」が組織され、同年末までに 20 余カ国にさまざまな名称の数十のチュチェ思想研究グループが組織されて主席の革命思想を活発に研究・普及した。そして日本をはじめ各国で主席の革命思想、チュチェ思想に関する研究討論会が開催され、それは次第に国や地域の範囲から世界的範囲に広がった。

総書記は、非同盟諸国との友好・団結を強化することを対外活動の基本

的方向として捉えていくようにした。

1965 年 5 月 9 日の対外活動部門の活動家への談話**『新興諸国との友好・団結を強化しよう』**において、非同盟運動は帝国主義の支配と従属に反対し、民族の独立を守ろうとする国の人民の共通の志向と要求を反映している進歩的運動であり、この運動は遠からず歴史発展の偉大な推進力となるだろうと確言した。

そして、非同盟諸国の政界をはじめ各界の人士との積極的な対外活動を通じて、これらの国との友好・団結を図り、非同盟運動を一層強化するとともに、反帝・自主勢力を固めるうえで多大な貢献をした。

総書記は、資本主義諸国を含む世界の多くの国との連係を強化し、国際機構に積極的に進出することにも深い関心を払った。

共和国の代表団が北欧諸国及び中立を標榜する西欧の資本主義諸国に進出して貿易関係をはじめ経済実務関係を結んで発展させ、それらの国の進歩的な政党、団体との連係を強化するための積極的な対外活動を展開し、その関係を次第に国家関係へと発展させていくようにした。こうして、朝鮮は、1960 年代末には 37 カ国、1970 年代中期に至っては 60 以上の国と大使級の外交関係を結び、100 余の国と経済・文化交流を行い、百数十の国際機構に加入して活動するようになった。

4

1974年2月～1980年10月

(1)

1970 年代に至って、朝鮮で革命偉業継承の問題は革命発展の機の熟した要求となっていた。この時期朝鮮では、解放後に育った新しい世代が革命闘争と建設事業の主役として登場し、金日成主席の指導の下に革命の 1 世が切り開き、勝利に向けて前進させてきたチュチェの革命偉業を正しく継承していく問題が提起されていた。

朝鮮人民は、革命偉業継承の問題を解決することが切実な要求となっていた歴史的な時期に、金正日同志を金日成主席の後継者として推戴した。

金正日同志を金日成主席の後継者として推戴することは、朝鮮人民の一致した意思であり念願であった。

金正日総書記は、革命と建設に対する主席の指導を積極的に補佐してきた日々と、党中央委員会で活動する過程で上げた業績により、朝鮮人民に限りなく尊敬され敬慕されていた。

総書記の偉大さを実生活を通じて深く体得した朝鮮人民は、以前から総書記を「敬慕する指導者同志」、「英明な指導者同志」、「親愛なる指導者同志」と高くたたえ、「親愛なる指導者金正日同志に限りなく忠実な親衛隊、突撃隊になろう！」というスローガンを掲げた。

また、全国の党組織から総書記を主席の後継者として推戴することを願う数多くの請願書と手紙が党中央委員会に寄せられた。

1974 年 2 月 13 日、朝鮮労働党中央委員会第 5 期第 8 回総会では、全党員

と全人民の一致した意思と念願を反映して、金正日同志を党中央委員会政治委員会委員に選出するとともに、主席の唯一の後継者として推戴した。

全国の人民は、各地で集会を開いて総会の決定を熱烈に歓迎し、総書記の指導に忠実に従うという決意をこめた誓書を採択した。抗日の老闘士たちは、総書記を主席の後継者として戴いたことを朝鮮革命の洋々たる未来を保障する大幸運として歓迎し、主席に従って歩みはじめた革命の道を総書記を戴いて変わることなく歩み続ける決意を固めた。

総書記を主席の唯一の後継者として高く戴くことにより、朝鮮で革命偉業継承の問題が立派に解決され、チュチェの革命偉業を代を継いで継承し完成していくための確固たる保証がもたらされた。

(2)

金正日総書記は金日成主席の革命思想を科学的に定式化するための活動を行った。

総書記は、金日成総合大学在学中と1960年代の後半に党中央委員会で行った従来の労働者階級の 100 年思想史の総括過程を通じて、主席の革命思想を科学的に定式化するための思想的・理論的準備を整えた。

その後、執務室ではもちろん、現地指導の道でも主席の革命思想を科学的に定式化する構想を練り、精力的な著述活動によってその活動を完了した。

1974年2月19日、総書記は朝鮮労働党第3回思想活動家大会での結語『**全社会を金日成主義化するための党の思想活動の当面のいくつかの課題について**』において、主席の革命思想をその尊名と結び付けて定式化し、その深奥な内容と特徴、歴史的地位を科学的に説き明かした。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成主義は一言で言ってチュチェの思想・理論および方法の体系です。言いかえれば、チュチェ思想とそれによって明らかにされた革命と建設に関する理論と方法の全一的な体系です。人類の思想史で初めて発見された偉大なチュチェ思想を真髄とし、それに基づいて革命理論と指導方法が全一的に体系化されているところに、金日成主義が従来の労働者階級の革命理論と区別される特徴があります。金日成主義こそは、われわれの時代、チュチェ時代の革命の真の指導思想、指導理論、指導方法です」

総書記は 1974 年 2 月 18 日、人民武力部の責任幹部への談話『**人民軍はわが党の偉業を実現していくうえで先頭に立つべきである**』において、全社会の金日成主義化偉業を、人民軍を信頼しそれに依拠して実現する決心を表明し、1974 年 2 月 19 日の朝鮮労働党第 3 回思想活動家大会で、全社会の金日成主義化を党の最高綱領として宣布した。

総書記は全社会の金日成主義化の本質的内容を明らかにした。

全社会を金日成主義化するということは、金日成主席の偉大な革命思想、金日成主義を唯一の指導指針として朝鮮革命を前進させ、金日成主義に基づいて勤労人民大衆の自主性が完全に実現した社会を建設し完成していくことを意味する。言いかえれば、社会の全構成員を金日成主席に限りなく忠実な真の金日成主義者にし、金日成主義の要求通りに社会を徹底的に改造して共産主義の思想的要塞と物質的要塞を占領するということである。

総書記は、全社会の金日成主義化がわが党の最高綱領となるのは、このスローガンにわが党の最高目的とそれを実現するための基本的方途が明示されているからであると述べた。

(3)

金正日総書記は、1974年8月2日の朝鮮労働党第4回組織活動家大会での結論**『党活動を根本的に改善し、全社会の金日成主義化を力強く推し進めよう』**において、全党を金日成主義化する方針を打ち出した。

金正日総書記は次のように述べている。

「全党を金日成主義化するということは、すべての党員を金日成主義の精鋭分子にし、党建設と党活動をあくまで金日成同志の思想と理論、方法に基づいて行うことを意味します。

これは、わが党の創立とともに始まった党の金日成主義化を全面的に完成することであり、わが党を完全無欠な金日成主義党にすることです」

総書記は、党の指導体系を確立し、全党を幹部化し、党の活動体系と活動方法において新たな転換をもたらすことを全党の金日成主義化の根本原則、方途として示した。

総書記は全党を幹部化するための活動を力強く展開し、党の隊伍を質的にさらに強化するよう導いた。

全党を幹部化するというのは、党内ですべての幹部の水準を一等級上の幹部の水準に引き上げ、すべての党員の水準を幹部の水準に引き上げることを意味する。

全党を幹部化するために総書記は、幹部と党員の間で学習と党生活、革命実践を密接に結びつけ、集団教育と個別教育を正しく組み合わせて政治的・思想的水準と技術・文化水準、実務能力と組織能力を高めるようにするとともに、党勢拡張において党の原則を守り、党の隊伍を政治的、思想的に固めるようにした。

総書記は党の活動体系と活動方法に新たな転換をもたらすようにした。

まず、各級党委員会の責任幹部と部署が幹部との活動、党員との活動、大衆との活動、下部の党組織との活動を一層強化できるように党内活動体系を整然と確立し、下部を掌握・統制したうえで実質的に助ける下部指導体系、全党の活動状況と実態を党中央に集中できる掌握・報告体系、各部署間の提携作戦と共同作戦を強化して提起された課題を適時に遂行する活動体系を確立した。

そして、主席が長年革命闘争と建設事業を指導する過程で創造し、発展させてきた活動方法を金日成式活動方法として定式化し、幹部が金日成式活動方法を見習い、具現するようにした。

党の基礎構築の重要性を深く洞察した総書記は、党中央委員会で活動を開始した 1960 年代の中頃から 1970 年代の前半にかけて、チュチェ革命偉業の継承のための党の基礎を万代の礎として固めるための準備を進めた。

総書記は、1969 年 8 月 15 日の党中央委員会の活動家への談話**『党の組織的・思想的基礎を固めるために』**において党の基礎構築の重要性を明らかにし、文学・芸術部門と人民軍の活動を指導しながら、党の指導に限りなく忠実であるように導き、これらの部門で党の基礎構築のモデルを創造した。

そして、1974 年 2 月の党中央委員会組織指導部の副部長への教示をはじめとする多くの教示で、党の基礎を万代の礎として固める方針を提示した。

総書記は、党事業と党活動、革命と建設の全般に党の唯一的指導体系を確立し、領袖によって成し遂げられた党の政治的・思想的統一団結を新たな高い段階へと強化・発展させていくことを党の基礎構築の基本要求として提示した。

総書記は、党の基礎を万代の礎として固めるための活動を指導した。

まず、幹部陣容を金日成主義の精粋部隊として固めるようにした。

そのために、幹部の選抜と配置において忠誠心を基本的表徴とし、これに実務的表徴を結びつけ、幹部陣容を労働者階級の出身で絶えず改善し、老・壮・青を組み合わせる原則を守るようにした。また、幹部の教育を着実に行い、現職の幹部を再教育し、後続幹部の養成を将来を見通して行うようにした。

総書記は、主席の革命思想、チュチェ思想で全党を武装させるための唯一思想教育を一層力強く繰り広げるようにした。

1974 年 2 月 19 日の朝鮮労働党第 3 回思想活動家大会での結語で、唯一思想教育、チュチェ思想教育を強力に繰り広げていくことについて強調し、1978 年 12 月 6 日の党中央委員会宣伝扇動部責任幹部協議会での演説では、チュチェ思想の原理で武装させるための教育活動を強化すべきであると述べた。

総書記は、各級党組織の戦闘的機能と役割を強め、革命と建設のすべての分野で党の唯一的指導を一層強化するようにした。

そのために、1979 年 4 月 28 日の党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部責任幹部協議会で党の指導体系を確立する方針を提示し、全党に党の決定と指示を貫徹する革命的気風と鉄の規律を確立し、幹部と党員の間で党組織観念を高め、党生活を強化するための闘争の過程を通じて革命と建設全般に対する党の指導をしっかりと保障するようにした。

(4)

金正日総書記は、1975 年 1 月 1 日の朝鮮人民軍総政治局の責任幹部への談話『**全軍を金日成主義化しよう**』で全軍の金日成主義化方針を提示した。

全軍を金日成主義化するというのは、すべての軍人を党と領袖に限りなく忠実な真の金日成主義者にし、軍建設と軍事活動をあくまで金日成主義

に基づいて行うことを意味する。

全軍の金日成主義化を実現するために、総書記は人民軍に対する党の指導体系を確立するようにした。

総書記は1975年1月1日、朝鮮人民軍総政治局の責任幹部に軍建設と軍事活動で提起される重要な問題をもれなく報告し、党中央の結論に従って処理する規律を確立しなければならないと述べ、1977年8月には、朝鮮人民軍総政治局に対する党中央委員会の指導を強化できる新しい体系と秩序を確立した。そして、1978年からは人民軍の指揮メンバーの党性を鍛えるための党講習を催すようにした。

また、1979年12月の人民軍党委員会第6期第20回拡大総会が人民軍内に党の指導体系を確立するうえで画期的転換をもたらす歴史的な会議となるように導き、会議における主席の教示を貫徹するための受容・討議を全軍が着実に行うようにした。

総書記は、軍人に対する政治・思想教育を強化することに大きな力を入れた。

1976年1月1日に**「金日成同志のために命をささげてたたかおう！」**というスローガンを提示し、軍人の間で、党と領袖に対する忠誠心を確固たる信念、道義とするための思想教育を原理化、通俗化して行うようにした。

また、人民軍軍人の間で、抗日の女性英雄金正淑女史の領袖決死擁護の精神を学びとる活動を強化するようにし、1979年12月には、抗日革命闘士の呉仲洽(オ ジュンフプ)同志を見習う運動を展開するようにした。そして、人民軍のすべての部隊が**「訓練も学習も生活も抗日遊撃隊式に！」**というスローガンを高く掲げて革命伝統教育を強化し、それを実生活に具現するための活動を力強く展開するようにした。

そして1979年2月、朝鮮人民軍軍団(軍種、兵種)、師(旅)団政治部宣伝

扇動部長会議および講習の参加者に送った書簡**『人民軍内の宣伝・鼓舞活動を改善・強化するために』**において、人民軍内の政治・思想活動で抗日遊撃隊式宣伝・鼓舞方法を積極的に取り入れ、すべての宣伝と鼓舞活動を戦う軍隊らしく火線での宣伝・鼓舞活動に切り換えるべきだと指摘した。

総書記は、人民軍を軍事技術的にしっかりと準備させることに大きな力を注いだ。

そのために、人民軍の指揮官の指揮能力を向上させ、軍事組織体系と作戦指揮体系を改編して完成し、人民軍軍人の軍事技術的資質を高め、人民軍の武力装備をさらに近代化する問題を重要な課題として提示し、これらを同時に推し進めるようにした。

また、人民軍の指揮官がチュチェの戦法を深く研究してそれに精通する一方、外国の戦争経験も主体的な立場に立って研究するようにし、人民軍が朝鮮式の戦術、射撃、体育の訓練を強化し、各部隊の機動能力を向上させることに特に力を入れるようにした。

総書記は 1979 年 9 月、党中央委員会組織指導部責任幹部会議で行った演説**『軍需工業をさらに発展させるために』**において、軍需工業を発展させて人民軍の武力装備を改善するうえで提起される原則的問題を明示し、チュチェの戦法の要求と近代戦の特性に応じて、人民軍の打撃力と機動力を高めることに重点を置いて武力装備を近代化し、戦闘技術機材を国産化するようにした。

総書記は 1975 年 12 月、全軍に 3 大革命赤旗獲得運動の火を点じ、1979 年 5 月の初めには、人民軍が 3 大革命赤旗獲得運動を以前から展開していた赤旗中隊獲得運動と結びつけ、赤旗中隊、赤旗前衛中隊の称号を獲得した後に 3 大革命赤旗を獲得する方法で絶えず深化させるようにした。また、呉仲洽同志を見習う運動と、この時期、主席が探し出して押し立てた英雄を模範として見習う運動を密接に結びつけて推し進めるようにした。

(5)

金正日総書記は、各階層の大衆を党のまわりに固く結束させる方針を打ち出した。

総書記は、1974 年 8 月 2 日の朝鮮労働党第 4 回組織活動家大会での結語**『党活動を根本的に改善・強化し、全社会の金日成主義化を力強く推し進めよう』**において、大衆との活動の総体的課題と一貫した方針を示した。

結語で総書記は、各階層の大衆を教育・改造して熱烈なチュチェ型の革命家にし、彼らが金日成主義の旗の下にあくまで闘うようにすることが大衆との活動の総体的課題であるとし、孤立の線と教育の線を捉えて、ごく少数の反革命分子を徹底的に孤立させる一方、各階層の広範な大衆を獲得して党の周りに固く結束させることが党の一貫した方針であると述べた。

総書記は、1977 年 4 月 14 日に党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部の活動家に行った演説で、各階層の大衆との活動をさらに改善、強化するための課題と方途を示した。

演説で総書記は、各階層の大衆との活動を改善・強化するためには、党活動家が革命的大衆観点を持ち、党の大衆路線にしっかりと依拠して活動し、活動方法と活動作風を改善し、具体的な方法論を持って階層別、対象別の特性に応じて活動しなければならないと述べた。

総書記は、広範な大衆を党のまわりに固く結束させるための活動を賢明に指導した。

そのために、党組織がまず労働者、農民をはじめとする大衆との活動を強化するのに力を注ぎ、彼らを革命化して熱烈な金日成主義者にするための思想教育を強化するようにした。

そして、党組織が人々の政治的生命にあくまで責任を持つ立場に立って、すべての人を信じて包容し、彼らの心の痛みを責任をもって取り除き、社会・政治生活に差別せずに参加させるとともに、それぞれの準備程度と功労に応じて政治的評価も行うようにした。

総書記は、勤労者団体の同盟員の組織生活体系を単一化し、同盟生活を強化するための措置を講じるとともに、職業総同盟、青年同盟、農業勤労者同盟、女性同盟の各組織が各階層の大衆との活動においてそれぞれの役割を強めるようにした。

(6)

金正日総書記は 1974 年 3 月、**「生産も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に！」**というスローガンを打ち出した。

生産も学習も生活も抗日遊撃隊式に行うというのは、抗日革命闘争の時期に発揮された抗日遊撃隊員の活動気風、学習気風、生活気風を今日の現実にそのまま具現していくことを意味する。

総書記は、チュチェの革命伝統を全面的に継承し発展させるための活動を賢明に指導した。

そのために、党員と勤労者が革命伝統に対する正しい観点と立場を持つようにする一方、革命伝統教育の体系と方法を発展する現実の要求に即して改善し、1976 年には革命事績資料の収集・整理のための整然とした体系を確立し、この事業を全党的・全国家的事業として力強く推し進めるようにした。

総書記は、革命戦跡と革命史跡の建設を強力に推し進めた。

そのために、党創立 30 周年を迎えて王在山（ワンジェサン）革命史跡地の建設を発起し、1974 年 5 月から 1975 年 10 月の間に 3 度も建設現場を訪れて具体的な指導

を与え、王在山革命史跡地を革命伝統教育の殿堂として立派に建設するように導いた。そして、君子里（クンジャリ）と金亨稷郡（当時の厚昌（フチャン）郡）の革命史跡の建設も積極的に推進するようにした。

次いで、茂山（ムサン）地区戦闘勝利 40 周年を迎えて朝鮮革命の聖山である白頭山と三池淵一帯を革命伝統教育の大殿堂として整備する構想を示し、1976 年 7 月と 1977 年 4 月にその規模と形式、内容について具体的な指導を与え、建設を直接指導した。そうして、短期間に両江（リャンガン）道をはじめとする全国の数多くの革命戦跡と革命史跡を革命伝統教育の強力な拠点につくり上げた。

総書記は革命伝統教育の拠点と手段を整えたうえで、革命戦跡と革命史跡の踏査と参観を活発に行い、出版・報道手段と文学・芸術作品による革命伝統教育を強化するようにした。

総書記は、**「生産も、学習も、生活も抗日遊撃隊式に！」**というスローガンを活動と生活に具現するようにした。

まず、党活動で抗日遊撃隊式活動方法を確立し、すべての党員と勤労者が主席の命令を無条件に貫徹した抗日遊撃隊員の革命的活動気風を実践に具現するようにした。

そして、1975 年から抗日遊撃隊式学習方法である問答式学習コンテストを全党、全社会が取り入れるようにし、**「全党が学習しよう！」**というスローガンを高く掲げて党員と勤労者が学習を生活化・習性化するようにした。

また、全社会に抗日遊撃隊式生活気風を確立することに深い関心を払い、すべての党員と勤労者が革命的組織生活を強化し、国の経済管理を几帳面に行い、生活を文化的かつ質素に、楽天的に営む気風を確立するようにした。

(7)

金正日総書記は、1975 年 11 月に**「思想も、技術も、文化もチュチェの要求通りに！」**というスローガンを打ち出した。

思想、技術、文化をチュチェの要求通りに改造するというのは、思想革命、技術革命、文化革命を金日成主義の要求通りに行うということである。言いかえれば、人間改造、自然改造、社会改造を徹底的にチュチェの思想、理論、方法通りに行うということを意味する。

総書記は 3 大革命グループ運動を深化・発展させるようにした。

3 大革命グループ運動は金日成主席が提唱した運動であり、政治・思想上の指導と科学技術上の指導を結びつけ、上部が下部を実質的に助け、大衆を奮起させて思想、技術、文化の 3 大革命を推し進めていく新しい形式の革命的指導方法である。

総書記は 1974 年から、それまで工業と農業部門にだけ派遣されていた 3 大革命グループを、建設、運輸など人民経済の各部門と科学、教育、保健医療などの各部門に派遣するようにした。そうして、1975 年に至り 3 大革命グループ運動は全国のすべての部門を包括するようになった。

総書記は、3 大革命グループ運動に対する指導体系を新たに確立し、1975 年 5 月には、3 大革命グループ運動に対する党組織の指導を強化するための措置を講じた。

また、政治思想的に、科学技術的に準備された党の中核と青年知識人を 3 大革命グループとして派遣し、講習や模範講習、見学などを計画的に行って彼らの政治・実務水準を高めるようにした。

総書記の指導の下に、3 大革命グループは現場で幹部を助け、彼らと心を

合わせてすべての活動を党の意図通りに推し進めた。

この過程で、党組織の指導的役割と大衆の革命的熱意が高まり、革命と建設のすべての部門で新たな奇跡と革新が生まれた。

総書記は3大革命赤旗獲得運動を提唱し、賢明に指導した。

1975年11月に3大革命赤旗獲得運動を展開することを提唱した総書記は、1975年12月の初めに、検徳(コムドク)鉱山の労働者と青山里の農業勤労者が3大革命赤旗獲得運動ののろしを上げるようにした。そして、全国各地で検徳鉱山と青山協同農場の呼びかけに応える大衆集会を催し、この運動に対する党の方針を広く解説・宣伝するようにした。

こうして、検徳と青山里で始まった3大革命赤旗獲得運動は社会主義建設のすべての部門、すべての単位で展開され、全社会的な大衆運動となった。

総書記は、1976年1月1日に行った演説『**今年の党活動で力点を置くべきいくつかの中心的課題について**』において、3大革命赤旗獲得運動の本質と中心的課題など、この運動を力強く展開するうえで指針となる原則的問題を明示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「3大革命赤旗獲得運動は、速度戦、思想戦の原則を具現し、人々の思想改造と経済・文化・国防建設における集団的革新運動を有機的に結合して力強く推し進めることによって、革命的大事を迎えるための準備をしっかりと整え、社会主義・共産主義建設を最大限に促進する新しい大衆運動です。

この運動の中心的課題は、思想革命、技術革命、文化革命を全面的に一層促進することにあります」

3大革命赤旗獲得運動はチョンリマ作業班運動の新たな高い段階への深化・発展であり、より高い形態の大衆運動である。

この運動の重要な特徴は、全社会の金日成主義化の要求に即して思想革

命を力強く展開し、社会の全構成員を熱烈な金日成主義者にするための高い形態の大衆的思想改造運動であり、工業化が完成し社会主義建設がより高い段階に入った新たな現実の要求を反映した高い形態の大衆的技術改造運動であり、完全に勝利した社会主義社会の建設が日程にのぼっている革命発展の新たな段階に展開される高い形態の大衆的文化改造運動であるということである。

総書記は、3 大革命赤旗獲得運動を全社会的運動として力強く展開していくために、党組織がこの運動に対する指導を党活動の重要な構成部分として捉え、段階別の目標と課題を正しく定め、その遂行についての総括と評価を的確に行うようにした。また、3 大革命赤旗獲得運動の指導書を作成して下達し、それを実行するための大衆討議を行い、全党的に経験交換会と模範講習を催し、出版・報道手段を通じて 3 大革命赤旗獲得運動で得た経験と成果を広く紹介・宣伝して一般化させるようにした。

3 大革命赤旗獲得運動が力強く展開されることにより、人々の思考方法と活動態度には新たな転換がもたらされ、大衆の革命的熱意が一層高まるようになった。

(8)

金正日総書記は、社会主義大建設を強力に推進するための活動を賢明に指導した。

金日成主席は 1974 年 2 月の党中央委員会第 5 期第 8 回総会で、6 カ年計画を繰り上げて完遂し、新しい展望目標を達成するための社会主義大建設の方針を打ち出した。社会主義大建設のための新しい展望目標は、その規模と質的水準において前例のないものであり、速度戦を展開してのみ成功

裏に達成することができた。

総書記は、それまでの貴重な経験に基づき、1974 年 2 月、社会主義建設のすべての部門で速度戦を展開する方針を示した。

速度戦は、すべての活動を電撃的に推し進める社会主義建設の基本戦闘形式であり、革命的な活動展開原則である。

速度戦の基本的要求は、すべての力を総動員して仕事を最大限に速めるとともに、その質を最高のものに保障することであり、速度戦を展開するための基本的方途は、思想革命、技術革命を力強く推し進め、組織・指導活動を裏打ちすることである。

総書記は「70 日間戦闘」を提唱し、それを勝利へと導いた。

1974 年 10 月 3 日、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部の副部長たちに「70 日間戦闘」を行うべきだと述べ、10 月 9 日には、党中央委員会および政務院の責任幹部、道党委員会責任書記の協議会で行った演説**『全党が奮起して「70 日間戦闘」を力強く繰り広げよう』**において、「70 日間戦闘」の目的と中心的課題、その遂行方途を明示し、10 月下旬から「70 日間戦闘」を開始すべきだと述べた。

「70 日間戦闘」は、全党が総突撃戦を展開して 1974 年度の人民経済計画を超過遂行し、金日成主席を喜ばせるための戦闘であった。

総書記は、「70 日間戦闘」勝利の鍵を思想動員に見いだし、勤労者の間で党と領袖に対する忠誠心教育を強化する一方、古い思想を克服するための思想戦を力強く展開するようにした。そして、内部の潜在力動員活動を積極的に展開して、死蔵されていた莫大な量の原料と資材を探し出すようにした。

また、「70 日間戦闘」の主要攻略部門を採掘工業・輸送・輸出部門に定め、これらの部門に指導陣容と宣伝・鼓舞陣容を集中し、多くの労力と設備を

送るようにし、全国が支援するようにした。

こうして、「70 日間戦闘」は勝利に終わり、この過程で新しいチョンリマ速度、「70 日間戦闘」速度が創造された。工業生産は戦闘以前に比べて 1.7 倍に増え、1974 年の工業生産総額は前年度比 117.2%増となった。その結果、年間計画は超過遂行され、6 カ年計画を繰り上げて完遂しうる確固たる展望が開かれた。

1975 年 2 月 15 日、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会は金正日総書記に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を授与した。

総書記は、党創立 30 周年までに 6 カ年計画の主要な生産目標を繰り上げて達成するための闘争を力強く推し進めた。

1975 年 1 月、主席の新年の辞を心に受け止めて 10 月 10 日までに年間計画を完遂し、6 カ年計画の主要な生産目標を繰り上げて達成することによって、党創立 30 周年を勝利者の大祝典として輝かせるという方針を提示した。そして、それを貫徹するために 3 大革命グループを各道と主要な工場、企業に派遣し、3 大革命グループ中央指揮部を設けた。また、党員と勤労者の間に主席の新年の辞と党中央委員会第 5 期第 10 回総会の決定書、党創立 30 周年に際する党中央委員会のスローガンを浸透させる一方、全国に生産鼓舞活動の太鼓の音が鳴り響くようにした。

1975 年の初めには、速度戦青年突撃隊を組織して青年が社会主義経済建設で大きな役割を果たすようにし、1975 年 7 月の初めには、検徳鉱山を訪ねて鉱物生産を増やすための対策を講じた。

また、殷栗鉱山の大型長距離ベルトコンベヤー輸送ラインの建設と茂山鉱山―金策（キムチェク）製鉄所間の大型長距離精鉱輸送パイプの建設を早期に完了するように導き、鉱石の運搬と剥土の処理において大きな前進をもたらすようにした。

こうして、党創立30周年を間近にした1975年8月の末までに6カ年計画の電力、石炭、化学肥料の生産目標が成功裏に達成され、織物、水産物の生産目標はそれより前に達成され、穀物の生産目標は2年繰り上げて達成された。

総書記は、自力更生の旗の下に第2次7カ年計画を遂行するための闘争を賢明に指導した。

金日成主席は第2次7カ年計画の雄大な青写真を示し、自力更生の革命精神を強く発揮して、あらゆる障害、困難を勇敢に乗り越えることを訴えた。

総書記は1978年1月1日、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部の責任幹部に行った演説**『自力更生の革命的スローガンを高く掲げ、全党、全人民を立ち上がらせて第2次7カ年計画を期限前に遂行しよう』**において、自力更生の革命精神を強く発揮することを第2次7カ年計画遂行のための党活動の総体的方針として提示した。

総書記が打ち出したこのスローガンは、立ちはだかる障害と困難を自力で乗り越え、自国人民の力と知恵、自国の資源と技術で人民経済のチュチェ化、近代化、科学化を実現し、第2次7カ年計画を期限前に完遂しうる道を示した指導指針であった。

総書記は、全党、全人民を第2次7カ年計画の遂行へと立ち上がらせるための組織・政治活動を綿密に行うようにした。

1978年1月、全党、全人民を第2次7カ年計画を期限前に遂行するための闘争へと立ち上がらせるための課題と方途を示した総書記は、次いで党中央委員会第5期第16回総会ですべての党員に送る党中央委員会の手紙を採択するようにして、すべての党員と勤労者を新しい展望計画遂行のための経済建設闘争へと奮い立たせた。そして、すべての党組織が党活動を経済活動と密着させて経済建設を力強く推し進めるようにした。

総書記は1978年5月、共和国創建30周年を迎えて第2次7カ年計画遂行の突破口を切り開くための「100日間戦闘」を賢明に指導した。

第2次7カ年計画遂行の突破口が切り開かれた後、総書記は、新しい展望計画の重要な課題を遂行するための闘争を指導した。

石炭生産の増大を全般的経済発展の当面のキーポイントと見なした総書記は、1978年11月、主要な炭鉱に党の指導陣容を派遣する一方、各炭鉱が求める機械設備や坑木を十分に生産・供給するための対策を講じ、安州(アンジュ)炭鉱を総合的機械化のモデル単位として整え、その経験を広く一般化させるようにした。

次いで、人民経済の発展に輸送を追いつかせるために、1978年の年初から鉄道部門で「輸送革命200日間戦闘」を再度展開するようにし、1979年7月には、5・18無事故・定時・超過輸送運動の火を点じ、多くの区間の鉄道電化工事と駅の建設、鉄道の近代化工事を推進するようにした。

また、金属、機械、化学、建設などの重工業部門と軽工業、農業部門でも自力更生の革命精神を強く発揮して、第2次7カ年計画を繰り上げて遂行するようにした。

総書記は、生産と経営活動を科学化し、企業管理にテアンの事業体系を具現することにも大きな力を注ぐようにした。

こうして、人民経済のチュチェ化、近代化、科学化が強力に推進され、第2次7カ年計画が成功裏に遂行されていくことによって、人民生活はさらに向上するようになった。

総書記は1978年12月25日、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部責任幹部協議会で行った演説**『党の戦闘力を高めて社会主義建設に新たな転換をもたらそう』**において、われわれの方式で生きていくという戦略的方針を提示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「『われわれの方式で生きよう！』、まさにこれが今日わが党が強く打ち出している戦略的スローガンです」

われわれの方式で生きていくというのは、チュチェ思想の要求通りに自分の信念に従って思考し行動し、すべてのことを朝鮮革命と朝鮮人民の利益に即して自力で解決していくことを意味する。

総書記は、われわれの方式で生きていくためには、主席の教示と党の方針を無条件に貫徹することに重点を置いて党活動を積極的に展開するとともに、自力更生の革命精神を強く発揮し、党の戦闘力を高めることに大きな力を入れて朝鮮労働党を必勝不敗の革命的党にし、党員と勤労者に対する思想教育を強化して彼らをチュチェ思想で武装させなければならないと述べた。

(9)

金正日総書記は、教育事業に新たな転換をもたらすための活動を賢明に指導した。

総書記は、金日成主席が発表した古典的著作**『社会主義教育に関するテーゼ』**を貫徹することを、教育事業を改善・強化するための重要な問題と見なし、1977 年 10 月、教育テーゼを貫徹するための思想転換方針を打ち出した。

そして、人民が主体的な教育観点と態度を持って教育テーゼの貫徹に立ち上がるようにするため、1977 年 10 月から道・市・郡党拡大総会と大衆大会、集会を開いて教育テーゼを貫徹するための討議を行うようにし、1978 年 9 月の末から 10 月の初めにかけて 1 万 5000 余人規模の第 8 回全国教育

者大会を開くようにした。また、教育の内容と方法を改善するために、すべての教育機関の教育内容を全面的に検討し、改善の方向を示した。同時に、教員の政治・実務水準を一階段高め、教育活動で定められた教育学的過程を正確に経るとともに、開発授業法と直観および実物教育、実験・実習教育を強化し、学習本位、成績本位に進むようにした。

総書記は、科学技術を発展させるために精力を傾けた。

1975 年 9 月、各分野の科学者、技術者で「7・1 科学者・技術者突撃隊」を編成して検徳鉱山の科学技術上の懸案を解決させる一方、多くの工場、企業に科学者・技術者突撃隊を派遣するようにした。

1978 年 2 月には各分野の専門知識を持つ科学者で「2 月 17 日科学者突撃隊」を編成して人民経済各部門の重要対象に派遣するようにした。また、党中央委員会第 5 期第 19 回総会で示された技術革命の課題を遂行するために、「5・19 技術革新突撃隊」を編成して技術革新運動を力強く展開するようにし、その後、彼らが科学技術革命の遂行において主席への忠誠心をより強く発揮することを期待して、突撃隊の名称を「4・15 技術革新突撃隊」と改めた。

一方、科学技術の発展を正しく指導するための整然とした活動体系を確立するとともに、科学者、技術者に立派な科学研究条件を整え、目覚しい成果をあげた科学者、技術者には国家勲章や名誉称号も授けるようにした。

総書記は、文学・芸術革命の成果を固めて文学・芸術のすべての分野を開花発展させた。

そのために、1974 年 12 月、全社会の金日成主義化の要求に即して文学・芸術部門の活動をさらに発展させるための課題と方途を示し、1978 年 1 月には、数年内に 100 編の長・中編小説を創作するための措置を講じた。また、作家が政治的見識と創作的技量を高め、現実体験を積み重ねるように

するとともに、小説の創作で提起される問題を随時検討し、指導を与えた。こうして、叢書『不滅の歴史』の中の長編小説『根拠地の春』、『厳しい戦区』、『白頭山の麓』をはじめとする多くの小説が創作され、人民の教育に大いに寄与した。

総書記は、革命映画の制作を通じて映画部門で新たな革新を起こすようにした。

1975 年に、朝鮮で初めて劇映画に主席が登場する革命映画『燃える炎』を制作することを提案した。そして、1975 年 12 月と 1977 年 4 月に映画の制作を指導しながら、革命映画で格式化を避け、偉大な人間、偉大な生活を芸術的にリアルに描き、作品のスタイルに合わせて主席を描く問題など、革命映画制作の指針を与えた。

総書記の賢明な指導の下に、革命映画『燃える炎』が完成し、次いで『司令部を遠く離れて』、『白頭山』などが制作され、革命映画の開花期が開かれた。

総書記は 1972 年 11 月 7 日、朝鮮式の新しい革命演劇を創作するという方針を提示し、不朽の名作**『城隍堂』**を舞台化することから演劇革命を起こすようにし、その創作を精力的に指導した。

1978 年 8 月に初演を行った革命演劇『城隍堂』は、従来の演劇芸術の古い形式を一掃し、朝鮮式の新しい多場面構成法、流れ式立体舞台美術、音楽を重要な表現手段として取り入れた『城隍堂』式革命演劇のモデル作品となった。

総書記は、1974 年 9 月 4 日から 6 日にかけての文学・芸術部門の創作家への談話**『歌劇芸術について』**において、歌劇革命の成果と経験を総括し、チュチェの歌劇理論を全面的に集大成した。そして、音楽と舞踊、美術の創作活動も精力的に指導した。

総書記は1974年5月7日、朝鮮記者同盟中央委員会第3期第5回全員会議拡大会議での結語**『わが党の出版・報道手段は全社会の金日成主義化に寄与する強力な思想的武器である』**において、わが党の出版・報道手段の性格と使命、任務を明示し、新聞革命、報道革命、出版革命を起こすための方針を提示し、それを貫徹するための活動を賢明に指導した。そうして、まず『労働新聞』で社説革命、新聞革命が起こり、次いで出版・報道活動全般に革命的転換がもたらされ、出版・報道手段は全社会の金日成主義化に寄与する思想的武器としての使命を立派に果たすようになった。

総書記は、人民保健医療事業をさらに発展させるために、党の予防医学方針を貫徹し、高麗治療法を広く取り入れて医療奉仕活動で革新を起こし、現代医科学の発展趨勢に即応して医科学技術を発展させるようにした。

総書記は、スポーツの大衆化方針を貫徹することに重点を置いて国のスポーツ活動を発展させるようにした。

スポーツを大衆化するために、総書記は、スポーツ活動に対する社会的関心を高め、勤労者が諸種の大衆スポーツを活発に行い、祝日や記念日には種目別、部門別のスポーツ競技大会を広く行うようにした。同時に、専門スポーツを発展させるために、朝鮮人の体質に合う主体的な戦術体系を確立し、訓練を強化して、多くの競技種目を世界的水準に引き上げるよう導いた。

1975年7月1日、検徳鉱山を現地指導した総書記は、労働者の大集団の中で革命的文化を創造して都市と農村に普及するという方針を打ち出した。そして、勤労者が働き、生活するすべての所で社会主義的生産文化と生活文化を確立するように導いた。

(10)

金正日総書記は、祖国統一勢力を強化し、北南対話を実現するための闘争を賢明に指導した。

総書記は1975年5月、党中央委員会書記、部長、副部長協議会で行った演説**『現情勢の要求に即して革命勢力を打ち固め、党活動をさらに改善・強化するために』**において、祖国統一の主体的革命勢力を強化するという課題を提示した。

まず共和国北半部の革命勢力を政治、経済、軍事的に一層磐石のごとく打ち固める一方、南朝鮮の統一愛国勢力の成長に深い関心を払い、彼らが団結した力で統一偉業実現のための闘争に立ち上がるようにした。

総書記は、海外同胞を祖国統一偉業の実現に積極的に寄与する革命勢力として結束させた。

海外同胞が金日成主席を戴く民族の誇りと自負を抱き、分断された祖国の痛みと統一の切実性をよく知るようにするために、総書記は、海外に代表団や芸術団を派遣し、祖国を訪れる海外同胞との活動に力を入れるようにした。そうして、広範な海外同胞が祖国統一のための闘争団体を組織して祖国統一偉業の実現に立ち上がるようになり、海外の保守政客や宗教家、亡命した南朝鮮の元高官まで祖国の自主的統一を支持するようになった。

総書記は、祖国統一のための朝鮮人民の闘争に対する国際連帯を強めることに深い関心を払った。

祖国統一のための対外宣伝と祖国統一偉業を支持する連帯運動が強力に展開された結果、1977年6月に「朝鮮の自主的平和統一のための国際連絡委員会」が組織され、次いでアジア、アフリカ、ラテンアメリカの70余カ

国で「朝鮮人民との連帯委員会」、「朝鮮の統一支持委員会」などが組織されて活動するようになり、1979 年の 8 カ月の間に「アメリカ軍の南朝鮮からの撤退を求め、朝鮮の自主的統一を支持する国際的な署名運動」に 128 カ国と 31 の国際機構および地域機構の無慮 10 億 8000 万人が参加した。

総書記は幅広い北南対話を実現するために、1977 年 1 月、共和国北半部の諸政党、社会団体連席会議で、北南政治協商会議招集の問題を基本内容とする手紙を採択し、南朝鮮の諸政党、社会団体と各階層の人民、海外同胞に送るようにした。

また、1979 年 1 月と 2 月に朝鮮中央通信社と祖国統一民主主義戦線中央委員会の声明を発表して、北南間の不信と反目を解消し、民族の和解と団結のための共和国政府の主動的措置を公布するようにし、幅広い対話と協商を実現させるための闘争を積極的に推し進めるようにした。

総書記は、在日朝鮮人運動を新たに発展させるための活動を賢明に指導した。

総書記は、総聯がすべての活動家と同胞を主席に忠実な真の革命家、熱烈な愛国者にするための思想教育に重点を置いて活動するよう導いた。

総聯の教育事業に深い関心を払った総書記は、育ちゆく在日同胞の新しい世代を革命的領袖観と祖国観が確立した革命的人材に育てあげ、教育事業を通じて朝鮮人に立ち戻らせ、民族性を固守するための活動を進めていくようにした。

総書記は、重要な記念日や祝日、大会がある時には総聯の活動家と同胞が祖国を訪問して、金日成主席の偉大さとチュチェ思想が具現された社会主義祖国の現実を深く体得するようにした。

(11)

金正日総書記は、チュチェ思想の対外宣伝を世界的規模で力強く展開するための活動を賢明に指導した。

1974 年 3 月 21 日、総書記は、チュチェ思想の対外宣伝を具体的な計画を立てて積極的に繰り広げるための課題を提示した。

チュチェ思想の対外宣伝における出版物の役割に大きな意義を付与した総書記は、金日成主席の古典的著作を多く翻訳・出版し、主席の革命活動史とチュチェ思想の解説図書を大々的に出版・普及するようにした。世界各国では進歩的団体や出版界の人士が主席の著作翻訳委員会や出版委員会を設け、毎年膨大な部数の著作を翻訳・出版した。主席の著作は、1978 年には 71 万 6000 部が発行され、79 カ国の 487 の出版物 5 億 9000 万部に掲載された。1980 年には 20 余の言語で 297 万余部が発行され、百数十カ国で 700 余種の新聞と出版物に掲載された。

総書記はチュチェ思想の信奉者との活動に深い関心を払い、彼らを学術的に積極的に助けるとともに、彼らが朝鮮に来てチュチェ思想を学ぶようにした。

主席の著作の出版・普及活動が広範に行われるにつれてチュチェ思想の信奉者が急増し、1970 年代の後半に至っては世界のほとんどの国にチュチェ思想研究組織が結成された。チュチェ思想研究組織には政界、言論界、学界の人士や抗争部隊の闘士、青年学生だけでなく、党と政府の高位級人士も参加した。

チュチェ思想の研究・普及活動が世界的規模で行われる中、1978 年 2 月にラテンアメリカチュチェ思想研究所が、同年 4 月には日本の東京に事務

局を置くチュチェ思想国際研究所が、1980 年 9 月にはアジア地域チュチェ思想研究所が設立された。そして、チュチェ思想研究組織ではさまざまな名称の定期刊行物を発行した。また、チュチェ思想に関する国際討論会が朝鮮とトーゴ、マダガスカル、インドなどで盛大に行われた。

チュチェ思想の研究は次第に学術的な認識の段階を超えて、革命実践の指針を探求するより高い実践段階に発展し、チュチェ思想を研究し信奉するのは時代の思潮となった。

総書記は、反帝・自主勢力の強化・発展のための闘争を賢明に指導した。

まず、非同盟運動が自主の道に沿ってさらに発展していくようにした。

金正日総書記は次のように述べている。

「非同盟運動は、支配と従属に反対し、自主性を志向する進歩的運動であり、帝国主義と対峙しているわれわれの時代の強力な革命勢力である」

総書記は 1975 年、対外活動の基本方向を朝鮮が非同盟運動加盟国になることに定め、そのための活動を積極的に展開して有利な局面を切り開くようにした。

そうして、1975 年 8 月、ペルーの首都リマで開催された非同盟諸国外相会議でこの運動の正式の加盟国となった朝鮮は、1976 年 8 月の第 5 回非同盟諸国首脳会議と 1978 年 7 月の非同盟諸国外相会議、1979 年 9 月の第 6 回非同盟諸国首脳会議で、非同盟諸国が反帝・自主の立場を堅持し、統一と団結を成し遂げるよう原則的な活動を展開した。

朝鮮は 1979 年 9 月、キューバの首都ハバナで開かれた第 6 回非同盟諸国首脳会議でこの運動の調整委員会のメンバー国となり、非同盟運動で重要な役割を果たすようになった。

総書記は、非同盟諸国間の友好・協力関係を発展させるために、1970 年代の末までに朝鮮が 21 カ国で中小規模の灌漑工事をはじめ農業の物質的・

技術的土台を築くための建設事業を援助するようにした。また、多くの国に農業や教育、芸術、スポーツなどの専門家を派遣して、それらの国の経済・文化建設を支援するようにした。

総書記は、反帝・自主勢力を強化するために、世界の労働者階級の革命運動の団結とその自主的発展のための原則的問題を明示し、それを実現するために労苦を重ねた。

1979年1月1日、各国の党と人民があらゆる形態の支配と従属に反対し、自主性を擁護し、すべての国の党が自主性に基づく相互関係の規範を厳守するという原則的問題を明示した。

総書記は、対外活動の幅を広げて、ヨーロッパと世界各地の資本主義諸国の共産党、労働者党との接触や交流も積極的に行うようにした。

5

1980年10月～1989年12月

(1)

金正日総書記は、朝鮮労働党第6回大会を党と革命発展の新たな里程標をもたらす歴史的な大会にするための闘争を賢明に指導した。

1979年12月の朝鮮労働党中央委員会第5期第19回総会では、党創立35周年に当たる1980年10月に朝鮮労働党第6回大会を招集するという決定を採択した。

総書記は、第6回党大会を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えるための活動を賢明に指導した。

1980年1月8日、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部責任幹部協議会で行った演説『**第6回党大会を迎えて党をさらに強化し、革命と建設で新たな高揚を起こそう**』において、第6回党大会を迎えて党を強化し、革命と建設で新たな高揚を起こすための課題を提示し、同年6月には党中央委員会のスローガンを示達し、全人民の革命的熱意を呼び起こすようにした。

そして、すべての党組織が第6回党大会を勝利者の大会として意義深く迎えるための活動に重点を置いて党活動を積極的に展開するとともに、党の隊伍を固め、広範な大衆を党の周りに固く結束させるための活動を力強く展開するようにした。

総書記は、第6回党大会を輝かしい勤労の成果をもって迎えるために、1980年の初めから社会主義建設のすべての部門で革命的大高揚の炎を一層強く燃え上がらせるようにした。

1980年6月、「100日間戦闘」と「党大会製品」の生産戦闘を力強く展開して1980年度人民経済計画を第6回党大会の前に繰り上げて完遂し、良質の各種一般消費財をより多く生産して人民に供給するようにした。そして、平壌産院や蒼光（チャングァン）院、蒼光通りなどを、労働党時代を輝かせる大記念碑的建造物として建設するよう導いた。

総書記は、朝鮮労働党第6回大会と党創立35周年慶祝行事が高い水準で行われるように導いた。

そのために、党大会の文書の準備に深い関心を払い、具体的な指導を与えた。

党規約の改正草案を作成する際、総書記は、朝鮮労働党の性格を金日成主席が創立したチュチェ型の革命的党と定立し、党の歴史的根源を明示し、党の指導思想は主席の革命思想、チュチェ思想であり、党の最高目的は全社会の金日成主義化であると新たに規定した。また、人民軍に対する党の指導を強化するための内容を補足した。そして、党大会に提出する他の文書と代表たちの討論も高い政治的・思想的水準のものにするためにきめ細かく指導した。

総書記は、第6回党大会と党創立35周年を大政治祝典として輝かせるための慶祝行事の準備全般を掌握し、最高の水準で行われるようにした。

こうして、朝鮮労働党第6回大会は1980年10月 10日から10月14日まで首都平壌で盛大に行われた。

大会で金日成主席は、総括期間に朝鮮労働党が3大革命の遂行において得た勝利と経験を総括し、全社会のチュチェ思想化を朝鮮革命の総体的任務として宣布し、それを実現するための課題とその遂行方途を示した。

党中央委員会第6期第1回総会では金正日同志を、党中央委員会政治局常務委員会委員、党中央委員会書記、党中央軍事委員会委員に選出した。

第 6 回党大会は、チュチェ思想の全面的勝利と党の不敗の威力を示威した勝利者の大会であり、チュチェの革命偉業達成のための確固たる保証をもたらした歴史的な大会であった。第 6 回党大会を契機に朝鮮人民は、金正日同志の指導の下に全社会の金日成主義化偉業を一層力強く促進することができるようになった。

総書記は、1980 年 12 月 3 日の党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部、平壌市党委員会責任幹部協議会で行った演説『**党組織のいくつかの課題について**』と、1981 年 4 月 3 日の道党責任書記協議会で行った演説『**道・市・郡党委員会の課題**』において、党大会の決定に呼応して全社会の金日成主義化を促進するための課題を提示した。

演説で総書記は、党活動を革命発展の要求に即して深化・発展させ、この時期、主席が探し出して押し立てた英雄を模範として見習う運動を着実に進めるとともに、3 大革命グループの活動に対する指導をさらに強化すべきであると述べた。

1982 年 2 月、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会は、党の強化・発展とチュチェの革命偉業の継承・完成のための闘争で不滅の業績を積み上げた金正日総書記に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を授与するという政令を発表した。

(2)

金正日総書記は、金日成主席の生誕 70 周年を迎えて主席の革命業績をとわに輝かせるための活動を賢明に指導した。

総書記は、主席の古典的著作を出版するとともに、主席の不滅の革命業績を収録した図書や記録映画、革命映画、長編小説などをつくるように導いた。

総書記は、主席の不滅の革命業績をとわに伝えるために大記念碑的建造物を建設するようにした。

金日成主席の生誕60周年を迎えた1972年4月から、主席の革命思想と業績をたたえ、とわに伝える大記念碑を建てる構想を練り上げてきた総書記は、1979年3月、主席の生誕70周年を迎えて平壌にチュチェ思想塔と凱旋門を建てることを提唱した。

そして、1979年11月21日の党中央委員会政治委員会で、チュチェ思想塔と凱旋門の建設工事を全党、全国、全人民的な事業として進めるという決定書を採択するようにし、建設陣の編成や大記念碑の位置選定、形成案について具体的な指示を与え、何度も建設現場に出向いて大記念碑が最高の水準で完成されるように導いた。

総書記は1981年7月、主席が歴史的な凱旋演説を行った革命事績が秘められている牡丹峰(モランボン)競技場を改造・拡張するための措置をとり、1982年2月16日には現場に出向いて建設工事を指導し、競技場を金日成競技場と呼ぶようにした。そうして、牡丹峰競技場の改造・拡張工事は着工後 4 カ月で完了した。

総書記は、人民大学習堂やアイススケート・リンク、万景台遊園地、平壌第1百貨店などの記念碑的建築物も最高の水準で建設するように導いた。

総書記は、主席の生誕70周年を迎えて全国の子どもと生徒・学生、世帯に贈り物を贈ることを提案し、この事業を精力的に指導した。

そして、党中央委員会政治局決定書「偉大な領袖金日成同志の生誕70周年をわが党と祖国の歴史にとわに輝く民族最大の慶事として迎えるために」を採択して、主席の生誕70周年を民族の大政治祝典として祝うようにした。

一方、主席の生誕70周年記念全国チュチェ思想討論会を開催するように

し、1982 年 3 月 31 日には論文**『チュチェ思想について』**を寄せて、主席の革命思想、チュチェ思想を広く宣伝するうえで新たな転機をもたらした。

そして、マスゲーム『人民は金日成元帥をうたいます』と音楽舞踊叙事詩『栄光の歌』が記念碑的傑作として完成されるように導き、主席の生誕 70 周年中央祝賀報告大会と祝賀夜会も盛大に催すようにした。

また、主席の生誕 70 周年慶祝行事に世界各国の代表団と芸術団を参加させ、各国の芸術家による祝賀公演も行うようにした。

世界の多くの国で主席の生誕 70 周年を祝う多彩な行事が催された。インドの首都ニューデリーではチュチェ思想に関する国際討論会が盛大に行われ、世界のほとんどの国で祝賀大会、祝賀報告会、祝賀集会、記念集会、記念講演会、祝賀宴、祝賀芸術公演、写真展覧会、映画鑑賞会などの行事が催された。

(3)

金正日総書記は、金日成主席が創始した不滅のチュチェ思想を総合的に体系化するための思想・理論活動を精力的に展開した。

金日成主席は次のように述べている。

「わたしは、朝鮮革命の要請と新しい自主時代の人民の志向を反映してチュチェ思想を創始し、それを指針として革命と建設を指導してきましたが、チュチェ思想の原理を総合的に体系化することについては別段考えませんでした。この問題は、金正日同志によって立派に実現されました。彼は、チュチェ思想の根本原理と真髄をなす内容を深く研究したうえで、わが党の指導思想をチュチェの思想、理論、方法の全一的な体系として定式化しました」

総書記が 1982 年 3 月 31 日、主席の生誕 70 周年記念全国チュチェ思想討論会に寄せた古典的著作**『チュチェ思想について』**は、主席が創始したチュチェ思想を総合的に体系化し、一段と深化・発展させたチュチェ思想叢書である。

著作で総書記は、チュチェ思想の創始とチュチェ思想の哲学的原理、社会・歴史原理、指導的原則、チュチェ思想の歴史的意義を集大成し、その原理と内容を新たに解明した。

『チュチェ思想について』は世界の人民の間で絶対的な共感と賛辞を呼び起こした。著作の発表後、1 年足らずの間に 90 余カ国の新聞、雑誌が著作の全文または詳細な要旨を掲載し、単行本も 140 余カ国に普及された。

総書記は、チュチェ思想をさらに深化・発展させるための思想・理論活動を展開した。

1983 年 5 月 3 日に発表した論文**『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう』**、1986 年 7 月 15 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『チュチェ思想教育における若干の問題について』**、1987 年 9 月 25 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『反帝闘争の旗をさらに高く掲げ、社会主義・共産主義の道を力強く前進しよう』**、1987 年 10 月 10 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『チュチェの革命観を確立するために』**をはじめとする多くの著作で、新しい思想と理論によってチュチェ思想をさらに発展させて豊富にし、その正当性と独創性、生命力を論証した。

総書記は、チュチェの哲学的世界観の独創性と優越性を解明し、チュチェの社会歴史観の原理をさらに深化・発展させた。特に、歴史の主体に関する理論を深化・発展させて革命の主体についての独創的な理論を打ち出し、それに基づいてチュチェの革命観と人生観に関する理論を新たに提示し、チュチェ思想の内容を一層豊かにした。

このほかにも、社会主義建設と祖国統一、世界革命に関する理論とチュチェの指導方法に関する理論を全面的に発展させ、新たに革新した。

(4)

金正日総書記は、チュチェ革命偉業の継承のための党の基礎構築を完成するための闘争を賢明に指導した。

総書記は、1980 年 12 月 3 日の党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部、平壌市党委員会責任幹部協議会で行った演説**『党組織のいくつかの課題について』**と、1981 年 4 月 3 日の道党責任書記協議会で行った演説**『道・市・郡党委員会の課題』**において、党の基礎構築を引き続き強力に推進する方針を提示した。

そして、党の基礎構築を引き続き強力に推進するためには、先を見通して幹部陣容を固め、党内に一体となって動く革命的規律を確立するとともに、党員の組織観念を高め、党生活を強化し、党員と勤労者の間で党への忠誠心を培うための教育活動を強化しなければならないと指摘した。

総書記は、党の基礎構築をより積極的かつ着実に進めるための活動要綱を各級党組織に示達し、それに依拠して党の基礎構築を完成するための活動を力強く展開した。

まず、先を見通して幹部陣容を党に限りなく忠実な人で固めることに主力を注いだ。

そのために、党への忠誠心を基本とし、若くて能力のある人を登用して先を見通して幹部陣容を固め、幹部事業の体系と秩序を厳格に守って幹部陣容の純潔性をしっかりと保障するようにした。また、1981 年 6 月、全国党幹部養成機関の教員講習会の参加者に書簡**『党幹部養成事業を改善する**

ためのいくつかの課題』を送り、後続幹部養成事業に新たな転換をもたらすための指針を与えた。

総書記は、党内に一体となって動く革命的規律を確立し、幹部と党員の党生活を強化するようにした。

そのために、すべての党組織と幹部と党員が党の定めた革命的活動秩序と規律を厳守するようにし、第 6 回党大会で採択された新しい規約についての全党的な学習と新しい党員証の授与を契機に、幹部と党員の党生活水準を一段と高めるように導いた。

総書記は、党の基礎構築は本質上、幹部と党員の間で党への忠誠心を培うことであるとし、党への忠誠心を革命的信念、信義とするための思想教育をさまざまな形式と方法で行うようにした。

1981 年 10 月、**「80 年代の金赫（キムヒョク）、車光秀（チャグァンス）になろう！」**というスローガンを提示し、朝鮮革命の黎明期に新しい世代の青年共産主義者が抱いていた領袖への忠誠心の輝かしい伝統をそのまま受け継いでいくようにした。そうして、1980 年代の前半に党の基礎構築の歴史的課題は立派に実現された。

総書記は、朝鮮労働党をチュチェ型の革命的党として強化・発展させるための活動を賢明に指導した。

1982 年 10 月 17 日、主席の打倒帝国主義同盟結成 56 周年に際して、古典的著作**『朝鮮労働党は栄えある「トゥ・ドゥ」の伝統を継承したチュチェ型の革命的党である』**を発表した。

著作で総書記は、党建設の歴史的経験を全面的に総括し、労働者階級の革命的党が備えるべき面貌と本質的特徴を明示し、党をチュチェ型の革命的党として強化・発展させるうえで提起される理論的・実践的問題を科学的に解明した。

総書記は、党員と勤労者に対するチュチェ思想教育をさらに強化するようにした。

1986 年 7 月 15 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『チュチェ思想教育における若干の問題について』**において、発展する現実の要求に即してチュチェ思想教育の本質と、忠誠心教育をはじめあらゆる形態の思想教育をチュチェ思想で一貫させるための原則的問題を明示した。

そして、党と領袖に対する忠誠心教育、党政策教育、階級的教育、革命伝統教育、社会主義的愛国主義教育など党のすべての思想教育をチュチェ思想の基本原理と結びつけ、革命の主体を強化することに指向させて着実に行うようにした。

総書記は、党の統一団結の純潔性を固守し、さらに強化することに大きな力を入れた。

1985 年 1 月 26 日の朝鮮労働党中央委員会の責任幹部への談話**『一心団結の旗を高く掲げて進もう』**、1986 年 1 月 3 日に朝鮮労働党中央委員会の責任幹部に行った演説**『党と革命隊伍の強化・発展と社会主義経済建設の新たな高揚のために』**をはじめとする多くの著作で、党の統一団結、一心団結の特徴と威力を明らかにし、党の統一団結を代を継いで固守し、強化・発展させるための課題と方途を示した。

そして、党の統一団結をさらに強化するために、党組織が抗日革命闘争の時期に築かれた領袖を中心とする統一団結の伝統を代を継いで揺るぎなく継承していくための教育活動を深化させるようにした。また、幹部と党員を反分派闘争の経験で武装させ、彼らが党の統一団結を固守し、代を継いで強化・発展させていくようにした。

総書記は、全党に革命的党風を確立するための運動を力強く推し進めた。

1988 年 1 月 10 日の党中央委員会組織指導部責任幹部会議で**「全党に革命**

的党風を確立しよう！」というスローガンを提示し、それを実現するための課題と方途を示した。また、1989 年 8 月には、党中央委員会書記局特別指示文を各級党組織に示達し、それを実行するための討議を行うようにし、党組織の戦闘的機能と役割を一段と高めるようにした。

総書記は、朝鮮労働党の栄えある革命伝統を固守し、純粋に継承し、発展させていった。

まず、大城山（テソンサン）革命烈士陵を革命伝統教育の拠点として立派に整えるために、1982 年 10 月、大城山革命烈士陵の改造・拡張の方向と方途を示し、革命烈士陵の改作形成試案を完成させるとともに、党中央委員会書記局指示文を示達して革命烈士陵の改造・拡張工事を全党的、全国家的な事業として進めるようにした。そして、1984 年 6 月と 11 月をはじめ数度にわたって大城山革命烈士陵工事現場に出向き、工事で提起される問題を解決した。

次いで、1984 年 4 月、新美里（シンミリ）愛国烈士陵を建設することを提案し、その位置から安置の対象に至るまで細やかな指示を与えた。

そうして、1985 年 10 月、大城山革命烈士陵の改造・拡張工事が完了し、1986 年 9 月には新美里愛国烈士陵が立派に完成した。

総書記は、党と革命の万年の財宝である白頭山密営と革命的スローガンを記した樹木を新たに発掘して原状のまま保存するようにした。

総書記は、1986 年 8 月に主席が両江道を現地指導した際の教示を体して、小白水（ソペクス）谷を集中的に発掘して白頭山密営を探し出し、原状に復するようにした。そうして、白頭山密営は原状に復元され、1987 年 2 月に公開された。

1987 年 5 月の初め、白頭山密営の周辺で革命的スローガンを記した樹木が発見されたことを契機に、総書記は、全国的な規模で抗日革命闘争の時期のスローガンを記した樹木と革命遺跡・遺物の発掘作業を行うよう指示した。そうして、1980 年代の後半、全国各地でその発掘作業が進められ、

数多くの革命的スローガンを記した樹木と秘密根拠地が発掘された。

1988 年 8 月 18 日、新たに発掘された白頭山密営とスローガンを記した樹木を見て回った総書記は、白頭山密営地区を整備し、スローガンを記した樹木を保存するための対策を講じた。

総書記は 1989 年 3 月、党の革命伝統を思想的・理論的に擁護するという方針を提示し、それを実現するための活動を賢明に指導した。

(5)

金正日総書記は、全軍に党の指導体系を確立することに心血を注いだ。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは、人民軍内に党の指導体系を確立する活動をさらに深化させなければなりません。人民軍内に党の指導体系を確立することは、金日成同志が切り開いたチュチェの革命偉業がわが党によって継承されている現段階において軍建設の核心だと言えます」

総書記は、人民軍内での党への忠誠心教育を他の部門とは異なり、ストレートに、強力に行うようにした。そして、1982 年 1 月 2 日の朝鮮人民軍総政治局の宣伝副局長との談話で、全軍が党の指導に限りなく忠実であるようにするための思想教育活動をさらに深化させることについて強調した。

1982 年 6 月 12 日の党中央委員会軍事委員会に参加した朝鮮人民軍の指揮メンバーへの談話**『人民軍を金日成同志の軍隊、党の軍隊としてさらに強化・発展させよう』**とその後の多くの教示で、金日成主席が党中央軍事委員会で提示した構想に従って、人民軍の活動全般に対する党の指導を全面的に確立しなければならないと指摘した。そして、1985 年 3 月には、発展する現実の要求に即して、軍隊内の党の政治活動で提起されるすべての問

題を朝鮮人民軍総政治局が直接報告し、結論に従って処理する活動体系と秩序を確立した。

総書記は、全軍に党組織観念に基づく革命的軍紀を確立し、軍・政連携を強めるようにした。

総書記は、人民軍の軍事技術的威力を強化し、戦闘準備を完成するために力を尽くした。

まず、発展する現実の要求に即して、人民軍の指揮メンバーの軍事技術的水準と指揮能力を高めるための軍事講習とさまざまな研究討論会を計画的に催すようにし、軍事学校の教育活動を改善するための対策を講じた。

そして、種々の戦闘規定と教範をチュチェの戦法と近代戦の要求に即して朝鮮式に改め、**「訓練も戦闘だ！」**というスローガンの下に戦闘訓練を着実に行うようにした。

また、国の自然地理的条件と工業の発展水準、近代戦の特性に応じて機動力と打撃力を高めることに主眼を置いて、人民軍の武力装備の近代化を高い水準で実現するための対策を立てた。

総書記は、中隊長、中隊政治指導員を助けるための中隊指導グループ活動を繰り広げるようにし、1984 年 1 月 14 日には朝鮮人民軍中隊指導グループ会議の参加者に書簡**『中隊指導グループ活動を力強く繰り広げて人民軍の中隊をさらに強化しよう』**を送り、中隊指導グループが中隊を政治的、軍事的に強化するうえで大きな役割を果たすようにした。また、1985 年 9 月、朝鮮人民軍中隊長および中隊政治指導員大会に臨席し、大会が中隊長、中隊政治指導員が自分の任務と役割を立派に果たすことができるようにする重要な契機となるようにした。

総書記は 1981 年 6 月、人民軍内で軍律を強化するための課題を提示し、そのための思想教育活動を強力に繰り広げるようにするとともに、全軍に

抗日遊撃隊式部隊指揮・管理方法を具現するように導いた。また、全軍的な社会主義的競争を行って軍律強化のための活動にすべての将兵が立ち上がるようにし、1984年1月には10項目の中隊管理準則を作成して下達した。

(6)

金正日総書記は、人民政権を強化するために力を尽くした。

人民政権の主権的機能と役割を強めることに大きな力を入れた総書記は、人民政権機関を固め、主権機関内に党の指導体系を確立し、国家の指導・管理体系をさらに改善し、下部に対する整然たる掌握・指導体系を確立するようにした。

総書記は、人民政権の順法生活指導機能をさらに高めて全社会に革命的順法気風を確立するようにした。

1982年12月15日、古典的著作『**社会主義順法生活の強化について**』を発表して社会主義順法生活を強化するための指導指針をもたらし、勤労者に対する順法教育を強化するために順法教育単位を的確に定め、順法教育担当者の陣容を固め、彼らの役割を強めるようにした。

また、社会主義順法生活指導委員会と社会安全機関、司法・検察機関の機能と役割を強めるための対策を立てた。

総書記は、人民政権の経済組織者としての機能を高めるようにした。

人民政権機関が地方工業に対する指導を強めてその水準を一段と高め、国家予算を人民経済計画とかみ合わせて立てて確実に実行し、市・郡の政権機関の機能と役割を強めて地方予算制を正しく実施するようにした。また、人民政権機関が人民生活に責任を持つ戸主としての役割を果たすようにした。

総書記は、勤労者団体の活動をさらに改善、強化するために精力を傾けた。

朝鮮社会主義労働青年同盟第7回大会の開催を提唱し、大会を迎えて**「朝鮮労働党の頼もしい青年前衛になろう！」**というスローガンを提示し、1981年10月には金日成主席とともに社労青第7回大会に臨席した。

総書記は、勤労者団体の活動に対する党の指導を強めるようにした。

1981年7月、道・市・郡党委員会青年事業部の活動家講習会を催して書簡**『青少年活動に対する党の指導を一層強化するために』**を送り、1985年4月には、全国党勤労者団体事業部の活動家講習会を催して書簡**『勤労者団体の活動に対する党の指導を強化するために』**を送って、青少年活動と勤労者団体の活動に対する党の指導に新たな転換をもたらすようにした。

一方、勤労者団体組織が同盟員の間で、抗日革命烈士の金日成主席への忠誠心に見習うための教育と革命伝統教育、社会主義的愛国主義教育などの思想教育を着実に行うようにした。

また、勤労者団体組織が「80年代速度」の創造に立ち上がった同盟員の間で、党の経済政策の宣伝と生産激励活動を活発に展開し、技術革新運動や社会主義的競争運動などの大衆運動を繰り広げるようにした。そうして、至る所で生産激励活動の太鼓の音が響き、社会主義的競争運動や青年突撃隊運動、青年分組・青年作業班運動が同盟員の高い熱意の中で進められた。

(7)

金正日総書記は、社会主義経済建設で新たな高揚を起こすための闘争を賢明に指導した。

総書記は、社会主義経済建設で新たな高揚を起こすために「80年代速度」創造運動を力強く繰り広げるようにした。

1982年6月8日の党中央委員会組織指導部､宣伝扇動部責任幹部協議会で、社会主義経済建設で今一度新たな大高揚を起こすべきであると述べ、金策製鉄所の労働者が「80年代速度」創造運動ののろしをあげるようにした。

金策製鉄所の労働者は1982年7月9日、「80年代速度」創造運動で先鋒隊になることを決意する集会を催して全国の勤労者に社会主義経済建設において大高揚を起こすよう呼びかけ、これに応えて全国の勤労者が「80年代速度」創造運動に立ち上がった。

総書記は、同年7月23日の党中央委員会宣伝扇動部の責任幹部との談話**『党組織は「80年代速度」を創造するための組織・政治活動を着実に行うべきである』**と8月13日の教示をはじめとする多くの教示で、「80年代速度」を創造するうえで提起される原則的問題を明示した。

「80年代速度」創造運動は、チョンリマ（千里馬）の大高揚の時期に朝鮮人民が発揮した革命精神を受け継ぎ、速度戦の原則を全面的に具現して、1980年代の社会主義経済建設で一大高揚を起こすための大衆的進軍運動であった。

総書記は、全人民が「80年代速度」創造のための闘争にこぞって立ち上がるようにした。

まず、大衆を「80年代速度」創造運動に立ち上がらせるための組織・政治活動を強化することに関心を払い、1982年10月と11月に全国青年熱誠者会議とチョンリマ運動先駆者大会を開いて、全人民を新しい速度の創造へと立ち上がらせた。

そして、1982年6月、検徳鉱業総合企業所第3選鉱場の建設を立体戦の方法で行うという方針を提示し、その建設工事を賢明に指導した。そうして、わずか1年で朝鮮の技術と資材、設備による第3選鉱場が立派に完成し、「80年代速度」のモデルが創造された。

総書記は、「80 年代速度」創造運動を人民経済各部門に拡大するために多くの工場、企業を現地指導し、1984 年 5 月と 10 月には竜城機械連合企業所と楽元（ラクウォン）機械工場を訪ね、1 万トンプレスや大型酸素分離機などの近代的な機械設備をより多く製作する課題を与えた。

総書記は、西海閘門の建設で「80 年代速度」創造運動の威力を余すところなく示すように導いた。

西海閘門の建設は、8 キロの外海をせき止め、三つの閘室と数十の水門を持つダムを建設する膨大な大自然改造事業であった。

1981 年 5 月の末、西海閘門の建設を人民軍に任せることにした総書記は、大立体戦、大全面戦の方法で工事を進めるよう指示した。そして、数度にわたって閘門の建設現場を訪ねては、工事の基本的方向を示し、工事に新しい工法を大胆に導入するようにした。こうして、西海閘門はわずか 5 年で完成した。

総書記は、社会主義経済建設で引き続き革命的高揚を起こすため、全人民を第 3 次 7 カ年計画の遂行に立ち上がらせた。

第 3 次 7 カ年計画（1987～1993）は、第 6 回党大会が打ち出した社会主義経済建設の新たな展望目標を達成するための経済建設綱領であった。

総書記は全人民を「200 日間戦闘」へと奮い立たせた。

1988 年 2 月、共和国創建 40 周年に際して全党員に党中央委員会の手紙とスローガンを送るようにし、「200 日間戦闘」のための整然とした戦闘指揮体系を確立し、強力な指導陣容を派遣した。

1988 年 5 月には、**「すべての人が英雄のように生き、たたかおう！」**というスローガンを提示し、「200 日間戦闘」の主要攻略部門を基本建設に定め、戦闘期間に動力基地、金属工業基地、化学工業基地、光復（クァンボク）通り、北部鉄道などの重要対象建設に力を集中するようにした。また、全国の人民経済各

部門を現地指導し、全人民を新たな生産的高揚へと奮い立たせた。そうして、朝鮮人民は「200 日間戦闘」期間に新しいチョンリマ速度、「200 日間戦闘速度」を創造した。

総書記は 1988 年 9 月、共和国創建 40 周年を迎えて全国英雄大会を開催し、大会で「200 日間戦闘」を今一度展開することを全人民に呼びかけるようにした。全国英雄大会の呼びかけに応えて、朝鮮人民は再び「200 日間戦闘」を展開して、国の経済発展に寄与する 500 余の対象建設を完了し、人民経済の各部門で高い生産計画を立派に遂行した。

総書記は、チュチェの社会主義経済管理システムを擁護するために心血を注いだ。

まず、工業部門でテアンの事業体系を擁護し、具現するようにした。

金日成主席は 1981 年 4 月の党中央委員会第 6 期第 3 回総会で、発展する現実の要求に即してテアンの事業体系を一層徹底的に貫徹することについて強調した。

総書記は、各級党組織が主席のこの教示を貫徹するための討議を行うようにするとともに、各工場、企業が教示実行状況の総括を着実に行い、テアンの事業体系の要求を貫徹するようにした。

主席の意を体した総書記は、新たに設けられる道行政・経済指導委員会の体系と連合企業所の体系が優越性を発揮するよう具体的な措置を講じた。また、種々の形態の朝鮮式の連合企業所を合理的に組織し、連合企業所の体系がその優越性を十分に発揮するよう独立採算制を正しく実施するようにした。

総書記は、農業の管理・運営において集団主義の原則を具現するために、作業班優遇制と分組管理制をより正しく実施するようにした。

1986 年 5 月と 12 月の党中央委員会書記局会議をはじめ多くの機会に、わ

が国の社会主義農業経営制度の優越性を強く発揮させる唯一の方途は、金日成主席が打ち出した社会主義農村テーゼが指し示す道に沿って進むことであるとし、われわれは農業を小規模の個人経営へと後退させるのではなく、より近代化され、工業化された大規模の経営へと前進させなければならないと述べた。そして、分組管理制と作業班優遇制の優越性と生命力をより強く発揮させるための対策を講じた。

総書記は、人民の物質・文化生活を向上させるために精力を傾けた。

1984 年 2 月 16 日の党中央委員会責任幹部協議会で行った演説『**人民生活をさらに向上させるために**』、1989 年 1 月 5 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**全社会に文化・情操生活気風を確立するために**』をはじめとする多くの著作で、人民の物質・文化生活をさらに向上させるための課題と方途を示した。

これらの著作で総書記は、人民生活を向上させるためには、農業生産を増やし水産業を発展させて人民の食の問題をより円滑に解決し、軽工業を発展させ、人民へのサービス活動を改善し、住宅を大々的に建設しなければならないと述べた。また、全社会に文化・情操生活気風を確立して、勤労者に文化的生活を営ませるという課題を提示した。

総書記は、農業と水産業を発展させて人民の食の問題を円滑に解決することに主力を傾注する一方、軽工業を発展させることに心血を注いだ。

軽工業の発展に対する幹部の観点と立場を正すようにし、1984 年 3 月 31 日の軽工業部門責任幹部協議会と 4 月 1 日のアルファ化米工場への現地指導において、軽工業を発展させるための課題と方途を再度示した。

また、軽工業の各部門にモデル工場をつくり、それを一般化させて軽工業部門の工場の近代化を大きなスケールで推進するとともに、中央と各道には軽工業製品見本館を、各市・郡と工場には軽工業製品見本室を設け、

それを手本にして一般消費財の品目を増やし、品質を高めるようにした。

そして、紡織工業、食品工業、日用品工業、製靴工業をはじめとする軽工業の各部門を新たな高い水準へと引き上げることに力を注ぎ、中央工業の各企業に生活必需品を生産する分工場や職場、作業班を増設する一方、1983年8月には、種々の形態の家内作業班を広く組織・運営し、そこで得た貴重な経験を全国に一般化させるようにした。

特に1984年8月3日、平壌市の軽工業製品展示場を視察し、内部の潜在力と可能性を引き出して、各種の生活必需品の生産を大衆運動として繰り広げるよう指示し、「8月3日一般消費財」生産運動の端緒を開いた。

そして、1986年5月、平壌市平川(ピョンチョン)区域をこの運動のモデル単位として押し立て、その経験を全国に一般化させるようにし、1989年5月には「8月3日一般消費財」生産模範郡(市・区域)称号獲得運動を展開するようにした。

一方、第13回世界青年学生祭典を契機に、軽工業製品の生産を増やし品質を高めるために全人民が立ち上がるようにし、1989年6月の党中央委員会第6期第16回総会で、軽工業発展3カ年計画を立て、その実現に向けて全党、全国、全人民を動員するための対策を講じた。

総書記は、商品供給システムを確立し、商業施設を近代化するとともに、骨の折れる部門の勤労者に対する商品供給をさらに改善するようにした。また、人民の生活上の要求に即して平壌市と主要な都市に近代的な食堂をたくさん設け、随所に小規模の食堂も設けるようにした。

便益サービス事業を改善するために、平壌市に新たに建設した蒼光院を手本にして各道・市・郡(区域)に総合的な便益サービス拠点を築き、常時運営するようにした。

1988年4月の党中央委員会の責任幹部への談話をはじめとする多くの教

示で、サービス部門従事者のサービス精神を高めるうえで提起される問題を明示し、人民の生活上の便宜を最大限に図る原則に基づき、サービスの手配りと方法を改善するようにした。

総書記は、人民の住宅問題を円滑に解決するために、平壌市に蒼光通りを建設し、次いで紋繡（ムンス）通りや安商宅（アンサンテク）通り、光復通りなどを建設するようにした。また、清津（チョンジン）市、咸興（ハムフン）市をはじめ各道都や郡機関所在地、農村の里にも住宅を大々的に建設するようにした。

総書記は、全社会に文化・情操生活気風を確立することに大きな力を入れた。

1984 年 3 月の末、新しい出退勤制度を確立し、文化・スポーツ施設を大々的に建設して勤労者の文化・情操生活条件を十分整えるようにした。また、人々が楽天的で感情豊かであり、文化的で衛生的かつ道徳的な生活を送ることにも深い関心を払った。

(8)

金正日総書記は、教育事業のさらなる発展のために心血を注いだ。

1984 年 7 月 22 日、第 9 回全国教育者大会の参加者に送った書簡『**教育事業をさらに発展させるために**』において、教育事業をさらに発展させる方針を提示した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは革命発展の新たな要求に即して教育革命を起こし、学校教育事業を全般的に改善し、教育の質を一段と高めて、新しい世代を有能な革命的人材に育て上げ、われわれの教育が国の科学技術の発展と社会主義経済建設によりよく貢献するようにしなければなりません」

総書記は、中等一般教育の質を高めるために平壌第 1 高等中学校を建てることを提唱し、1984 年 4 月 28 日には完成した同校を現地指導し、基礎教育を強化するためのモデルをつくり、それを一般化させて中等一般教育に質的変化をもたらすとともに、すぐれた才能を持つ生徒を系統的に育成するようにと述べた。また、教育部門責任幹部協議会で行った演説**『平壌第 1 高等中学校をモデル学校として整えるために』**において、平壌第 1 高等中学校を英才養成拠点として整え、それを全国に一般化させるようにと指摘し、その後、各道に近代的な教育施設を備えた第 1 高等中学校を建て、英才教育に力を入れるようにした。

そして、中等一般教育の内容を正しく定め、教育学的過程を正確に経て、教育方法を抜本的に改善するようにした。また、1987 年 2 月に「7・15 最優等賞」を制定し、その獲得運動を力強く繰り広げて、全国のすべての中学校の生徒の間に革命的学習気風を確立するようにした。

総書記は、発展する現実の要求に即して高等教育部門の技術者、専門家の養成事業を改善するために、金日成総合大学をはじめとする主要な大学をよく整え、その経験を一般化させて他の大学をもり立てるようにした。そして、有能な科学者、技術者をより多く育てるために各大学の養成規模を拡大し、多くの単科大学と高等専門学校を新設するようにした。また、工場大学、農場大学、漁場大学を拡大し、その教育水準を高める一方、テレビ放送大学を創設し、その運営を正常化することにより、働きながら学ぶ教育システムをさらに発展させるようにした。

総書記は、国の科学技術を高い段階へと発展させるために力を傾けた。

1985 年 8 月 3 日に党中央委員会の責任幹部に行った演説**『科学技術をさらに発展させるために』**をはじめとする多くの著作で、国の科学技術の発展方向とそれを実現するための課題を示した。

これらの著作で総書記は、国の科学技術を発展させるうえで重要な課題は、原料と燃料、動力問題を解決し、機械設備の近代化で提起される科学技術上の問題を解決し、人民経済各部門の生産技術工程と生産方法、経営活動を新たな科学技術的土台の上に引き上げるための研究を強化し、基礎科学を発展させ、新しい科学技術分野を開拓することであるとし、それを遂行するための方途を示した。

総書記は、国の科学技術の発展に新たな転換をもたらすために、1986 年 2 月の党中央委員会第 6 期第 11 回総会と 1988 年 3 月の党中央委員会第 6 期第 13 回総会、1988 年 11 月の党中央委員会第 6 期第 14 回総会などで、その対策問題について討議するようにした。また、全国学位・学職取得者会議と全国発明家大会を開催し、1986 年からは毎年全国科学技術祭典を催して、科学者、技術者の責任感と役割を最大限に強めるようにした。

一方、科学者、技術者が科学研究活動を、国の経済発展にとって切実な問題を解決することに主眼を置いて、人民経済をチュチェ化、近代化、科学化するうえで提起される科学技術上の問題を解決する方向で行い、新しい科学技術上の成果を適時に生産に導入するようにした。特に、科学技術発展の世界的趨勢に即して、重要な科学部門を全面的に発展させることに力を集中するよう導いた。

総書記は、チュチェの文学・芸術を発展させるために精力を傾けた。

1981 年 3 月 31 日に第 8 回全国芸術家大会の参加者に送った書簡『**チュチェの文学・芸術をさらに発展させるために**』と、1986 年 5 月 17 日の文学・芸術部門の活動家への談話『**革命的文学・芸術作品の創作で新たな高揚を起こそう**』において、文学・芸術をより高い水準に引き上げるための課題を提示した。

そして、文学作品の創作に新たな転換をもたらすために、叢書『不滅の

歴史』をはじめ領袖形象化作品の創作を力強く推し進めるとともに、1978年から開始した「長・中編小説 100 編創作戦闘」について、1984 年から 5 年を期間とする新たな「長・中編小説 100 編創作戦闘」を展開するようにした。そうして、1980 年代に叢書『不滅の歴史』のうち抗日革命闘争時期編の創作が 15 編をもって完成し、解放後編の長編小説である『輝かしい朝』と『1950 年の夏』が創作され、長編小説『廃墟の中から』、『鉄の信念』など思想性・芸術性の高い作品が多数創作された。

総書記は、金日成主席の偉大さと革命活動史を描いたシリーズ革命映画『朝鮮の星』、『民族の太陽』をはじめとする数多くの革命映画と多様な主題の劇映画の制作を精力的に指導して、時代の記念碑的作品として完成させ、これを機に映画の制作で新たな高揚が起こるようにした。

総書記は、舞台芸術を新たな高い段階へと発展させるために、不朽の名作である**『血噴万国会議』**、**『娘からの手紙』**、**『三人一党』**、**『慶祝大会』**などを『城隍堂』式の革命演劇にする活動を指導して革命演劇の開花期を開いた。

こうした成果に基づき、1988 年 4 月 20 日の文学・芸術部門の活動家への談話**『演劇芸術について』**において、チュチェの演劇理論を全面的に体系化した。

総書記は、民族歌劇『春香伝』を民族歌劇芸術のモデルとして完成させ、1985 年 6 月にはポチョンボ・エレクトロニック・アンサンブルを組織し、朝鮮式の電子音楽を創造して電子音楽のモデルをもたらした。

1970 年代の初めに朝鮮式の舞踊表記法を作成することを発案し、強力な舞踊表記法研究チームを結成した総書記は、数十回にわたってその活動を指導した。そうして、1987 年 2 月にチュチェの舞踊表記法は完成を見た。

総書記は、朝鮮式の音楽舞踊叙事詩を創作することを提案し、音楽舞踊

叙事詩『栄光の歌』、5000 人の大公演『幸福の歌』、7 万人の大公演『祝典の歌』の創作を指導し、サーカス芸術と美術分野においても飛躍的な発展を遂げるようにした。

一方、文学・芸術活動を大衆化することに深い関心を払い、大衆文学創作活動や大衆芸能活動、勤労者の芸術祭典や歌謡コンクールを行って、全国に革命的ロマンと芸術的情緒があふれるようにした。

(9)

金正日総書記は、高麗（コリョ）民主連邦共和国創立方案を実現するために心血を注いだ。

金日成主席が朝鮮労働党第 6 回大会で打ち出した高麗民主連邦共和国創立方案は、北と南が相手側に現存する思想と体制をそのまま容認する基礎のうえで、双方が同等に参加する民族統一政府を組織し、その下で北と南が同等の権限と義務を持ち、それぞれ地域自治制を実施するという統一方案である。

総書記は、高麗民主連邦共和国創立方案を実現するために、その正当性と現実性、公明正大性を内外に広く宣伝するようにした。

また、1984 年 9 月、共和国赤十字会の名義で南朝鮮の水害被災民に救援物資を送るという決定を発表するようにし、その実現のための措置を講じて、民族的和解と団結の新局面を開いた。そうして、国土分断約 40 年にして初めて、5 万石の米、50 万メートルの織物、10 万トンのセメントと大量の医薬品が南朝鮮の水害被災民に届けられた。

こうした成果に基づき、総書記は、北南間の多岐にわたる接触と対話を実現するようにした。そうして、1985 年 5 月に 10 余年間中断されていた北

南赤十字会談が再開され、祖国解放 40 周年を契機に赤十字芸術団および故郷訪問団の相互訪問が実現した。

総書記は、朝鮮半島の緊張状態を緩和し、恒久平和を保障するための主動的な措置を講じるようにした。

まず、国際平和年である 1986 年に、朝鮮半島で戦争の危険を防止し、鋭い軍事的対峙状態を緩和するために、15 万人の朝鮮人民軍軍人を国の平和的建設に参加させるという重大措置を講じるようにした。次いで、1987 年 12 月の末までに 10 万人の朝鮮人民軍将兵を除隊させて社会主義建設場に進出させる措置を講じて、平和統一の前提条件を整えた。

そして、民族大統一戦線を形成するために、1980 年から 1982 年にかけて、北と南、海外の人士からなる民族共同の協議機構である高麗民主連邦共和国創立準備委員会の設置、北と南、海外が参加する民族統一促進大会と 100 人連合会議の招集などの現実的な提案を行うようにした。その結果、1984 年 12 月に非常設協議体である「祖国統一のための民族連合」が結成された。

総書記は、全民族的な統一戦線を形成するための措置として、1988 年 1 月に北南連席会議の招集を提案し、1989 年 7 月には、祖国解放 45 周年に当たる翌年に板門店で祖国統一のための 8・15 汎民族大会を開催するようにした。

総書記は、在日朝鮮人運動に新たな転換をもたらすために心血を注いだ。

1980 年代に入って、在日朝鮮人運動はその発展の新たな転換期を迎えた。

この時期、在日同胞の間では世代の交替がなされ、日本で生まれ育った 2 世、3 世の同胞が在日朝鮮人運動の主役として登場するようになった。

総聯（在日本朝鮮人総聯合会）の変化した環境と在日朝鮮人運動発展の合法則的要求を深く洞察した総書記は、1986 年 9 月 15 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『発展する現実の要求に即して総聯の活動をさらに改**

善・強化するために』において、新たな転換期を迎えた総聯が堅持していくべき綱領的指針を示した。

総書記は、在日朝鮮人運動に新たな転換をもたらすために、総聯の幹部陣容を固め、広範な同胞大衆を組織に結束し、彼らに対する思想教育を強化するようにした。

また、同胞の間で、民主主義的民族権利を擁護し、祖国の社会主義建設と自主的平和統一のための愛国運動を力強く繰り広げていくようにした。

(10)

金正日総書記は、反帝・自主勢力の団結と協力を強めるために力を傾けた。

金正日総書記は次のように述べている。

「反帝・自主勢力の団結を実現することは、帝国主義の侵略と戦争策動を阻止し、破綻させ、世界の恒久平和を成し遂げ、自主化された新しい世界を建設するうえで決定的保証となる」

総書記は、1983年5月3日の古典的著作**『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう』**において、兄弟党、兄弟諸国間の意見の違いを縮め、団結と協力を成し遂げるための方途を明示し、そのための対外活動を賢明に指導した。

総書記は、社会主義諸国および各国の共産党、労働者党との団結を強めることに主力を傾注した。

朝中友好を深めることに大きな意義を付与した総書記は、1983年6月1日から13日にかけて中国を非公式訪問し、朝中友好の新たなページを開いた。中国の指導者たちと人民は外交慣例を破って総書記を熱烈に歓迎し、手厚くもてなした。

訪問期間に総書記は、中国の党および国家の指導者たちと数回にわたって会談を行い、党と国家の状況を相互に通報し、国際舞台における重要な問題について幅広い意見を交換し、中国の主要な都市と工場、企業、農村、軍部隊を参観し、中国人民が社会主義建設で収めた成果を高く評価した。

そして、1983 年 9 月には、訪朝した中国の党・政府代表団を自ら迎接し、地方参観にも同行し、友好の情を深めた。

社会主義諸国および世界各国の共産党、労働者党との友好・協力関係を発展させることに深い関心を払った総書記は、1984 年 7 月の党中央委員会第 6 期第 9 回総会で、世界のすべての進歩的政党、社会団体、革命組織との連係と接触を強め、団結を固めるという課題を提示し、党代表団の往来を活発化させるための対策を立てた。そうして、1985 年の 1 年間だけでも、朝鮮労働党代表団は 70 余回にわたって外国を訪問して諸政党との活動を行い、90 余の外国の党代表団が朝鮮を訪問した。

総書記は、非同盟運動を強化・発展させることに大きな力を入れた。

1983 年 5 月 3 日の著作をはじめとする多くの教示で、非同盟諸国は非同盟運動の根本原則を厳守し、完全な平等と内政不干渉の原則に基づいて政治的に固く団結し、経済的に緊密に協力するという活動原則を明示した。そして、南南協力を拡大発展させることに深い関心を払い、朝鮮で多くの国際会議を開催して南南協力の促進を図るとともに、多くの国に農業科学研究所や試験農場を設け、それらの国の農業の発展を積極的に助けるようにした。また、多くの国に多数の専門家を派遣し、党および国家建設、経済管理、民族文化建設、医療奉仕活動などを誠心誠意助けるようにした。

総書記は、アメリカをはじめとする帝国主義者の侵略と戦争策動に反対し、世界の平和と安全を守るための闘争を力強く展開するようにした。

そのために、1983 年 7 月に平壌で開催された反帝・友好・平和のための

世界ジャーナリスト大会と、1986 年 9 月に開催された朝鮮半島における非核・平和のための平壌国際会議が、戦争の危険を防止し、平和と安全を守り、世界の平和愛好人民を反帝共同闘争へと立ち上がらせる重要な契機となるようにした。

そして、1987 年 9 月 25 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**反帝闘争の旗をさらに高く掲げ、社会主義・共産主義の道を力強く前進しよう**』において、帝国主義滅亡の不可避性と社会主義勝利の必然性を明示し、世界の革命的人民が反帝闘争の旗を高く掲げて帝国主義者の侵略と戦争策動を阻止し破綻させ、世界の平和を守るうえで堅持していくべき綱領的指針を示した。

総書記は、第 13 回世界青年学生祭典を反帝連帯、平和と友好の大祭典にするよう導いた。

1988 年 10 月 12 日に著作『**現代と青年の任務**』を発表し、現代の青年の生の価値と意義、世界の進歩的な青年学生の闘争進路を示し、平壌祭典がその崇高な理念を固守するための思想的・理論的指針を与えた。そして、第 13 回世界青年学生祭典の建設対象と会場を最高の水準のものにするための作戦を展開し、全人民をその建設へと奮い立たせた。

世界の青年学生と人民の大きな期待と関心の下に、第 13 回世界青年学生祭典は 1989 年 7 月 1 日から 8 日にかけて平壌で開催された。祭典には 180 カ国の代表が参加した。

平壌祭典は、党と領袖の周りに一心団結した朝鮮人民の威力と朝鮮式社会主義の優越性を全世界に示し、朝鮮革命の国際連帯と反帝・自主勢力の団結をさらに強め、全世界の自主化を促進する重要な契機となった。

6

1990年1月～1994年7月

(1)

1980年代の末から1990年代の初めにかけて、ソ連と東欧諸国では社会主義が次々と崩壊し、資本主義が復活するという事態が生じた。これを奇貨として、アメリカをはじめとする帝国主義者と反動勢力は「社会主義の危機」について喧伝し、社会主義のとりでである共和国を政治・経済・軍事的に圧殺しようと策動した。

こうした情勢は、帝国主義者と反動勢力の反社会主義的策動を粉砕し、人民大衆中心の朝鮮式社会主義を固守し、輝かせていくことを切実に求めた。

金正日総書記は、チュチェ思想の旗印を高く掲げ、社会主義の偉業を固守するために精力的な思想・理論活動を展開した。

1990年5月30日と12月27日に党中央委員会の責任幹部に行った演説**『社会主義の思想的基礎に関する諸問題について』**と**『わが国の社会主義はチュチェ思想を具現した朝鮮式の社会主義である』**、1991年5月5日の党中央委員会の責任幹部への談話**『人民大衆中心の朝鮮式社会主義は必勝不敗である』**など多くの著作で、朝鮮の社会主義はチュチェ思想を思想的基礎としている独特な社会主義であることを論証して、朝鮮式社会主義の本質的特性を明らかにした。また、朝鮮の社会主義は人間本来の要求を最も立派に具現している優れた社会主義であり、人民大衆に自主的で創造的な生活を真に保障する社会主義であることを明らかにした。そして、朝鮮式社会

主義の優越性を全面的に解き明かし、朝鮮式社会主義は領袖、党、大衆が一心団結した社会主義であることを明らかにして、朝鮮式社会主義の不抜性と永遠の生命力を科学的に解き明かした。

総書記は、1992 年 1 月 3 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』**において、一部の国で社会主義が挫折した根本原因は、社会主義の本質を歴史の主体である人民大衆を中心にして理解していなかったために、社会主義建設において主体の強化と主体の役割向上の問題を基本として捉えることができなかったところにあると指摘した。また、その原因は、社会主義と資本主義の質的な差異に目を向けず、社会主義の根本原則を一貫して堅持せず、社会主義国の党同士の関係において、自主性に基づく国際連帯を強めなかったところにあることを科学的、理論的に解明した。

一部の国で社会主義が挫折した原因を分析したうえで、総書記は、社会主義に対する確信と正しい指導思想を持って革命の主体を絶えず強化し、いかなる環境の下でも社会主義の原則を固守し、自主性に基づく同志的団結と協力を強めていくとき、社会主義偉業は勝利の道を前進するというのが社会主義建設の歴史的教訓であると述べた。

総書記は、人民政権を強化し、その機能と役割を絶えず強め、思想、技術、文化の 3 大革命を徹底的に遂行することが、金日成主席が打ち出した社会主義建設に関する朝鮮労働党の総路線であるという古典的定式化を下し、その正当性を論証した。

1993 年 3 月 1 日に朝鮮労働党中央委員会機関誌『勤労者』に発表した談話**『社会主義に対する誹謗は許されない』**において、社会主義を「全体主義」、「兵営式」、「行政命令式」と誹謗中傷する敵のあらゆる反動的詭弁の不当性を逐一あばき、社会主義偉業を固守し、達成するうえで提起される原則的問題を明示した。

総書記が1990年代前半に展開した思想・理論活動は、社会主義理論をさらに発展させて完璧なものにし、一時挫折を経ていた社会主義運動を新しい思想的基礎の上で立て直し、社会主義偉業を高揚へと導くことに大いに寄与した。

(2)

金正日総書記は、金日成主席の生誕80周年を大政治祝典として盛大に、意義深く慶祝するために心血を注いだ。

朝鮮人民は1992年に、金日成主席の生誕80周年と金正日総書記の生誕50周年を迎えることになった。

主席は、総書記の誕生日を民族最大の祝日として祝おうとする朝鮮人民の願いを聞き届け、1992年2月7日、総書記の誕生日である2月16日を民族最大の祝日として制定するという朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会の政令を裁可した。しかし、総書記が重ねて差し止めたため、その政令は発表されず、1995年2月になってようやく公布された。

2月の祝日を迎えて総書記に意義深い贈り物をしようと考えた主席は、頌詩『光明星賛歌』をつくり、刺繍『チュチェの太陽』などの贈り物を準備した。

1992年2月、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会は、総書記に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を授与するという政令を発表した。

総書記は、主席だけを高く仰ぐという崇高な道義心を持って、2月16日を機に計画されていた国家的な行事を取り止めさせ、主席の生誕80周年を民族最大の祝日として盛大に祝うことに全力を集中するようにした。

総書記は、主席の生誕80周年を高い政治的熱意をもって迎えることに主力を注いだ。

1991年10月12日の党中央委員会政治局会議で「全党員に送る手紙」を採択するようにし、1992年1月1日の党中央委員会の責任幹部への談話では**「金日成同志の生誕80周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えよう！」**というスローガンを打ち出し、すべての党組織が主席の生誕80周年に際して全党員に送る党中央委員会の手紙についての討議を高い政治的熱意の中で行うようにした。

また、主席の生誕80周年を控えて首都平壌で全国チュチェ思想討論会と各部門別の討論会を開催し、主席の著作を全面的に収録した『金日成全集』(第2巻〜第5巻)と主席の回顧録**『世紀とともに』**(第1部　抗日革命編　第1巻、第2巻)を出版するようにした。

1992年4月15日(主席の誕生日)を迎えて降仙に主席の銅像が建てられ、革命事績館が開設され、西海閘門—信川—康翎—甕津水路の入り口には主席の親筆命題碑が建てられた。

総書記は、主席の生誕80周年を輝かしい勤労の成果をもって迎えるようにした。

1992年3月26日、党中央委員会の緊急電報指示文を示達し、各級党組織がその討議と決起集会を行い、生産と建設で一大高揚を起こすための最後の突撃戦を繰り広げるようにした。そして、主席の生誕80周年を機に、統一通りと平壌—開城間高速道路の建設、首都の路面電車化工事(第1、第2段階)などの重要対象と、新たに建設、改造された数多くの工場、企業の竣工式を意義深く行うようにした。

総書記は、主席の生誕80周年慶祝行事が高い水準で行われるようにした。

1992年4月13日、朝鮮人民の一致した念願と志向を反映して、金日成主席に朝鮮民主主義人民共和国大元帥の称号を授与するという朝鮮労働党中央委員会と朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委

員会、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会の決定が採択された。

総書記は、主席の生誕80周年を迎えて中央祝賀報告大会と芸術公演、大マスゲーム、祝賀夜会、祝宴、第10回4月の春親善芸術祭など種々の慶祝行事が最高の水準で行われるようにした。また、これらの慶祝行事に多くの外国の祝賀使節が参加するようにした。

総書記は、1992年4月17日の党中央委員会の責任幹部への談話**『敬愛する領袖金日成同志の偉大な業績を輝かしていこう』**において、主席の偉大さと不滅の業績について全面的に論述した。

この談話で総書記は、主席は非凡な思想的・理論的英知をそなえた偉大な思想家・理論家であり、卓越した指導力をそなえた偉大な指導者であり、人民をこよなく愛する崇高な徳性をそなえた真の人民の領袖であることを解き明かした。そして、主席が人民に自己の運命を切り開いていくための指導思想と、人民大衆の運命を責任を持って見守るチュチェ型の政治組織をもたらし、人民の自由と幸せを守る真の人民の革命武力を建設したことについて、朝鮮人民を自主性の強い革命的人民に育て、人民大衆中心の朝鮮式社会主義を建設し、チュチェの革命偉業を代を継いで立派に継承し、達成するための保証をもたらした不滅の業績について言及した。

(3)

金正日総書記は、党を強化し、その指導的機能と役割を強めるために心血を注いだ。

総書記はまず、チュチェの党建設理論を深化・発展させることに第一義的な関心を払った。

1990年10月3日に発表した著作**『朝鮮労働党は朝鮮人民のすべての勝利**

の組織者であり導き手である』、同年 10 月 10 日に党中央委員会の責任幹部に行った演説『**チュチェの党建設理論は労働者階級の党の建設において堅持すべき指導指針である**』、1992 年 10 月 10 日の朝鮮労働党創立 47 周年に際して執筆した論文『**革命的党建設の根本問題について**』などで、従来の労働者階級の党建設理論の制約性を解明し、チュチェの党建設で提起される原則的問題を明示した。総書記が明示したチュチェの革命的党建設の基本原則は、チュチェ思想を指針として党建設と党活動を進めること、党を勤労人民の大衆的党として建設すること、党内で思想と指導の唯一性を確保すること、党の統一と団結を強めること、思想を基本として党を固めること、全社会の思想の一色化を実現すること、全社会に対する政治的指導を確実に実現すること、革命的大衆路線を具現することである。

総書記は、党の隊伍を組織的・思想的にしっかりと固め、特に党の基層組織である党細胞を強化するようにした。

1990 年 11 月、党の指導に忠実に従うことを誓った朝鮮中央通信社 5 局 2 細胞の党員たちの手紙を受け取った総書記は、彼らに直筆の返書を送り、この細胞を忠誠の党細胞のモデルとして押し立て、この細胞を見習うための運動を繰り広げるようにした。

1991 年 5 月、総書記は、党史に前例のない大きな規模で朝鮮労働党第 1 回細胞書記大会を開催するようにし、5 月 10 日、大会の参加者に送った書簡『**党細胞を強化しよう**』において、「**すべての党細胞を忠誠の細胞にしよう！**」というスローガンを打ち出し、各級党組織がこのスローガンを中心的課題として捉え、忠誠の党細胞を増やすように導いた。そして、1994 年 3 月の末から 4 月の初めにかけて朝鮮労働党第 2 回細胞書記大会を開き、忠誠の党細胞を増やすための活動を新たな高い段階へと深化させた。

総書記は、党の活動方法と作風を改善することに大きな力を入れた。

1990 年 1 月 1 日、総書記は**「人民に奉仕する！」**というスローガンを示し、このスローガンの要求通りに党活動家が人民の忠僕であるという確固たる観点を持って、大衆と運命を共にし、人民のために献身する気風を確立するよう導いた。

1994 年 5 月 24 日には党中央委員会の責任幹部への談話**『革命発展の要請に即して幹部を徹底的に革命化するために』**を発表し、党の意を体して幹部を革命化する活動を偏向を犯すことなく引き続き推し進めるようにした。

総書記は、全社会の一心団結を強めるために精力を傾けた。

1992 年 1 月 1 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『党活動を強化して朝鮮式社会主義をさらに輝かそう』**において、一心団結の威力によって朝鮮式社会主義をさらに輝かせるというスローガンを提示し、全社会の一心団結をさらに強めるための課題を示した。

この談話で総書記は、帝国主義者と反動勢力のあらゆる挑戦を退け、人民大衆中心の朝鮮式社会主義を固守し輝かせるための最も強力な武器はほかならぬ一心団結であり、一心団結は朝鮮革命の生命であり、われわれがあくまで捉えていくべき旗じるしであると述べた。そして、党組織は全社会の一心団結をより一層強めることに党活動の中心を置き、この活動を絶えず深化させるべきであると強調した。

総書記は、広範な大衆を党の周りに結束させるための活動を深化させるようにした。

総書記は、1992 年 10 月に全国烈士遺族大会を、1993 年 7 月には第 1 回全国老兵大会を開催し、彼らが党の指導に従ううえで中核的役割を果たすようにした。

1990 年 9 月 20 日に党中央委員会の責任幹部に行った演説**『革命と建設におけるインテリの役割をさらに高めよう』**において、知識人は革命の主体

の構成部分の一つであり、革命闘争と社会発展の推進力であるとし、党組織が新たな情勢の要求に即して知識人との活動を強化する課題を提示した。そして、1992 年 12 月には党の歴史で初めての朝鮮知識人大会を開催するようにした。

青年・学生を党の周りに結束させることにも深い関心を払った総書記は、1991 年 1 月、主席が朝鮮共産主義青年同盟を結成した日である 8 月 28 日を青年デーとして制定するようにし、1991 年 8 月 26 日、初の青年デーを迎える全国の青年と青年同盟の活動家に書簡を送り、**「青年は党と領袖に限りなく忠実な青年前衛となろう！」**というスローガンを提示した。

そして、1993 年 2 月に社労青第 8 回大会を開催し、大会が党に限りなく忠実なチュチェの革命偉業の継承者の大会として盛大に行われるようにした。また、青年の間で思想教育と青年同盟の組織生活、革命的実践による鍛練をさらに強化し、すべての青年をチュチェの革命偉業の頼もしい継承者として準備させるように導いた。

総書記は、人民の間に見られる美しい行いが全国に広がるようにした。

そのために、人民の間に見られる模範的行為を広く紹介、宣伝するようにし、彼らに感謝や直筆の手紙、贈り物などを送った。そして、1993 年 12 月には全国共産主義的美風先駆者大会を開催し、この大会を機にこうした美挙を見習う運動を新たな高い段階へと発展させるよう導いた。

(4)

金正日総書記は、卓越した、かつ洗練された用兵術を身につけ、人民軍を党と領袖に限りなく忠実な必勝不敗の革命武力として強化・発展させた。

総書記は、革命武力の強化・発展と社会主義偉業遂行における不滅の業

績により、1990 年 5 月に朝鮮民主主義人民共和国国防委員会第 1 副委員長、1991 年 12 月 24 日に朝鮮人民軍最高司令官の重責を担い、1992 年 4 月 20 日に朝鮮民主主義人民共和国元帥の称号を授与された。そして、1993 年 4 月 9 日の最高人民会議第 9 期第 5 回会議で朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に選出された。

総書記は、人民軍を不敗の革命武力として強化・発展させるために心血を注いだ。

1992 年 1 月 1 日の党中央委員会の責任幹部への談話と、同年 2 月 4 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『人民軍を強化し、軍事重視の社会的気風を確立するために』**において、人民軍を真の領袖の軍隊、党の軍隊、人民の軍隊にしなければならないとして、人民軍の課題を示した。

総書記は、全軍に最高司令官の命令、指示を無条件に実行する革命的軍紀を確立するようにした。

1993 年 10 月、総書記は人民軍の主要指揮メンバーに、革命的軍紀を確立するうえで何よりも重要なのは人民軍内に確固たる命令・指揮系統を構築することであるとし、その基本は全軍が最高司令官の命令一下、一糸乱れず行動するようにすることであると指摘した。

そして、1993 年 12 月に全軍に革命的軍紀を確立するための対策を立て、人民軍がただ最高司令官に忠実であり、最高司令官の命令を絶対、無条件に実行することを鉄則とするようにした。

総書記は、人民軍の幹部陣容をしっかりと固め、その政治・実務水準を一段と高めることに力を傾けた。

党と領袖に対する忠誠心を持ち、近代戦の種々複雑な状況を的確に処理できる若い人で人民軍の幹部陣容全般を固めるようにするとともに、1970 年代の末から行われている人民軍指揮官のための党講習を着実に行うよう

にした。また、指揮官の軍事的資質と部隊の指揮・管理水準を高めるための対策を立て、軍事教育の質を一段と高めるようにした。

総書記は、軍人に対する政治・思想教育をさらに強化するようにした。

まず、チュチェ思想教育と社会主義の信念教育を強化し、思想教育の形式と方法も絶えず改善するよう導いた。そして、思想教育を90年代の最初の英雄である金光哲（キムグァンチョル）英雄をはじめとするわれわれの時代が産んだ英雄を見習うための活動と密接に結びつけて行うようにした。

総書記は、人民軍軍人の間で戦闘訓練を強化して、人民軍を不敗の革命武力としてしっかりと準備させた。

1990年5月28日、朝鮮人民軍訓練担当指揮官講習の参加者に戦闘・政治訓練において一貫して堅持すべき原則を提示し、全軍に革命的訓練気風を確立するようにした。

また、全軍近代化の方針をより高い水準で実現するために、人民軍の武力装備を近代戦の要求に即してわれわれの方式で近代化するという方針を提示し、それを実現するための闘争を賢明に指導した。

総書記は、軍事を重視する社会的気風を確立することに深い関心を払った。

人民軍を愛し助けた行いを新聞や放送、出版物を通じて広く紹介・宣伝するとともに、人民軍支援活動で模範を示した幹部や勤労者を多くの大会に参加させ、彼らの模範を広く一般化させるようにした。

また、参戦老兵、戦傷栄誉軍人と除隊軍官を社会的に大いに押し立て、優遇するための措置を講じた。そして、祖国解放戦争（朝鮮戦争）の勝利と革命武力の強化・発展に貢献した老兵の功績を末長く輝かせ、戦傷栄誉軍人を尊敬し愛し助けることが全社会の気高い道徳的気風となるようにし、息子や娘を人民軍に入隊させた人民軍留守家族を社会的に大いに押し立て、広く紹介・宣伝するようにした。

(5)

金日成主席は、1990 年の新年の辞と同年 1 月の党中央委員会第 6 期第 17 回総会で、変化する国際的環境と当面する経済困難に対処して、自力更生、刻苦奮闘の革命精神を発揮して最大限に増産し節約するための闘争を力強く繰り広げて、社会主義建設で今一度革命的大高揚を起こすという方針を提示した。

金正日総書記は主席の意を体して、全人民を党中央委員会第 6 期第 17 回総会の決定を貫徹するための闘争に立ち上がらせた。

1990 年 1 月、各級党組織が主席の新年の辞と党中央委員会第 6 期第 17 回総会の決定を貫徹するための討議を行い、すべての宣伝・鼓舞陣容と手段を総動員して全国に新たな革命的大高揚の炎を燃え上がらせるための思想活動を集中的に行うようにした。

そして、1990 年 2 月に全国生産革新者大会を、3 月には機械工業部門と金属工業部門の熱誠者会議を開催し、これを機に人民経済の各部門で「90 年代の速度」創造運動を力強く繰り広げ、社会主義建設のすべての部門で新たな高揚を起こすようにした。また、同年 4 月には全国青年熱誠者大会を開催し、青年を 90 年代の社会主義大進軍に立ち上がらせた。

1990 年 1 月 1 日の党中央委員会および政務院の責任幹部への談話**『党活動と社会主義建設に転換をもたらし、1990 年代を輝かそう』**において、人民生活を一段と向上させることを社会主義経済建設の中心的課題として提示し、軽工業と農業、住宅建設に主力を傾注するようにした。

そして、党の軽工業発展方針の貫徹において画期的な転換の契機をもたらすため、1990 年 6 月に全国軽工業大会を開催して大会の参加者に書簡を

送り、1992 年 5 月には党中央委員会の指示文を下達し、軽工業部門に指導陣容を派遣して軽工業の発展を促進するようにした。

総書記は、農村の技術革命を力強く推し進めて農業の機械化、化学化の水準を高めるとともに、西部地区の穀倉地帯の水の問題を解決するために数百里に及ぶ水路工事を行って農業の水利化を高い水準で完成するように導いた。

主席の生誕 80 周年を迎えて、平壌市に一つの都市に匹敵する統一通りを建設するようにし、すべての道がそれぞれの実情に応じて都市と農村に多くの住宅を建設して、増大する住宅の需要を充足させるようにした。

総書記は 1991 年 7 月 1 日、創立 45 周年を迎える人民経済大学の教職員、学生に送った書簡**『チュチェの社会主義経済管理理論で武装しよう』**において、チュチェの社会主義経済管理理論を全面的に体系化し、それを経済管理実践に具現するようにした。

総書記は、金日成主席が提示した革命的経済戦略を貫徹するための闘争へと全人民を奮い立たせた。

主席は、1993 年 12 月の党中央委員会第 6 期第 21 回総会で、今後 3 年間を社会主義経済建設の調整期とし、この期間に農業第一主義、軽工業第一主義、貿易第一主義を堅持し、人民経済の先行部門である石炭工業と電力工業、鉄道運輸を確固として優先させ、金属工業を引き続き発展させるという革命的経済戦略を示した。

総書記は、1994 年 3 月 1 日の党中央委員会の責任幹部への談話で、革命的経済戦略の本質と内容、その課題と方途を明示し、それを実現するための組織・政治活動を力強く繰り広げるようにした。

そして、1994 年 4 月の最高人民会議第 9 期第 7 回会議で社会主義経済建設の調整期の課題を確実に遂行するという決定を採択するようにし、それ

を実現するための措置を講じるとともに、全国農業大会、全国畜産部門熱誠者会議、全国石炭工業従事者大会などを開催し、革命的経済戦略を貫徹するための闘争へと全人民を奮い立たせた。

総書記は、社会主義文化建設を促進するために精力を傾注した。

まず、科学技術の発展に大きな力を入れ、1991 年 10 月 28 日に開催された全国科学者大会に書簡**『科学技術の発展に新たな転換をもたらそう』**を送り、国の科学技術を急速に発展させるための展望目標と当面の課題、その遂行方法を明示した。

そして、1991 年から新しい科学技術発展 3 カ年計画を遂行するために奮闘するようにするとともに、科学研究部門に対する国家の投資を増やし、研究条件をよく整え、科学者、技術者を大いに押し立てる社会的気風を確立するようにした。

総書記は、チュチェの文学・芸術を発展させることに引き続き大きな力を入れ、文学・芸術革命とその成果を固める過程で得た成果と経験を集大成した古典的著作である**『舞踊芸術論』**、**『音楽芸術論』**、**『美術論』**、**『チュチェの文学論』**などを発表し、チュチェの文芸理論を全面的に深化・発展させた。

そして、1990 年代の初めにシリーズ劇映画『民族と運命』をつくるよう指示し、その制作を精力的に指導して、わずか 1 年の間に第 1 部から第 7 部まで完成するように導いた。また、1992 年 5 月 23 日の文学・芸術部門の幹部および創作家、芸術家への談話で、シリーズ劇映画『民族と運命』制作の成果を踏まえて、文学・芸術建設全般に新たな転換をもたらすという課題を提示した。

こうして、1990 年代の前半に、映画芸術部門ではシリーズ劇映画『民族と運命』(第 1 部～第 30 部)、劇映画『若い参謀長』、『母は狩人だった』、『あ

りがたい乙女』など様々な主題の作品が制作された。

チュチェの音楽芸術を発展させることに大きな関心を払った総書記は、人民に愛唱される革命的な音楽作品を創作し、民族音楽を現代的美感に合わせて発展させるための課題と方途を示し、それを実現させるために精力を傾けた。そうして、歌謡『ピョンヤンがいちばんだ』をはじめとする多くの時代の名曲が創作、普及され、朝鮮式の電子音楽を発展させるうえでも大きな成果がもたらされた。

総書記は、民族文化遺産を正しく継承し発展させることに大きな力を入れた。

金日成主席は、朝鮮民族の始祖王である檀君(タングン)の陵を建設するよう指示した。総書記は、主席の指示を実行するために尽力するとともに、人民を朝鮮民族第一主義の精神で教育するようにした。そうして、大国主義・事大主義史家たちによってはなはだしく歪曲されていた朝鮮民族の悠久の歴史を取り戻し、燦然たる文化と愛国の伝統を代を継いで輝かせていくことができるようになった。

総書記は、人民保健医療事業を改善することに深い関心を払った。1992年 7 月の保健医療部門の責任幹部への談話で、社会主義保健医療制度の優越性をさらに強く発揮させることに主眼を置いて人民保健医療事業を発展させるべきだと述べた。そして、党の予防医学方針を貫徹するために、衛生防疫活動を大衆運動として力強く繰り広げ、予防医療対策に万全を期するようにした。また、歯科医療部門を発展させ、癌性疾患の予防医療に大きな力を入れるとともに、薬水や温泉、鉱泥土などの天然手段を治療に大いに利用するようにした。

(6)

1990 年代に入って、共和国に反対するアメリカの核騒動はエスカレートした。朝鮮半島における核問題は、アメリカが南朝鮮に 1000 余の核兵器を持ち込み、朝鮮半島を核戦争の危険な根源地にしたことによって生じた。

朝鮮は、南朝鮮からアメリカの核兵器を撤去させ、朝鮮に対するアメリカの核の脅威を取り除き、朝鮮半島を非核地帯にするため、1985 年 12 月に核拡散防止条約（NPT）に加盟していた。

しかし、アメリカは核保有国は非核保有国を核兵器で威嚇してはならないという条約上の義務を履行せず、かえって朝鮮に対する核査察騒動を繰り広げた。アメリカの無謀な反共和国孤立・圧殺策動に帝国主義連合勢力と一部の国際機構まで追従して、朝鮮半島の情勢は緊張した。

特に、アメリカが 1993 年 1 月、中止していたチーム・スピリット合同軍事演習の再開を公表し、これに 20 余万の兵力と膨大な核打撃手段を動員することにより、朝鮮にはいつ何時戦争が起こるかわからない一触即発の危機が生じた。

金正日総書記は、敵がチーム・スピリット合同軍事演習を開始するのと時を同じくして、1993 年 3 月 8 日、朝鮮人民軍最高司令官命令第 0034 号**「全国、全人民、全軍に準戦時状態を宣布することについて」**を下達した。

この命令で総書記は、アメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡一味が新たな戦争を起こすならば、朝鮮人民と人民軍は党と領袖のために、血潮をもって勝ち取った人民大衆中心の朝鮮式社会主義のために、最後まで戦って侵略者に殲滅的打撃を与え、英雄朝鮮の尊厳と栄誉を今一度とどろかせるであろうと宣言し、敵は共和国の寸土、一木一草をもみだりに侵すことができな

いことをはっきり知るべきであると警告した。

最高司令官の命令が下達された後 10 日余りの間に、150 万余の青年・学生が人民軍への入隊を志願し、数多くの除隊軍人や参戦老兵が軍役復帰を願い出た。

総書記は、準戦時状態の宣布に次いで、1993 年 3 月 12 日、民族の自主権と国家の最高利益を守るため、核拡散防止条約から脱退するという共和国政府の声明を発表するようにした。

共和国政府が次々と強硬な措置を講じると、アメリカはチーム・スピリット 93 合同軍事演習を中止し、特別査察騒動も打ち切り、朝米協商を通じて朝鮮半島の核問題を解決するという共和国政府の提案に応じざるを得なくなった。そうして、朝米政府間会談が開かれることになった。

朝米会談は、1993 年 6 月から 1994 年 10 月まで 3 ラウンドにわたって行われた。

1993 年 6 月に開かれた第 1 ラウンドの会談では、史上初めて朝米間の共同声明が発表された。同年 7 月 14 日から 19 日にかけて開かれた第 2 ラウンドの会談で、共和国政府は自国の黒鉛減速炉と関連核施設を軽水炉に替えるという提案を行い、これをアメリカ側が受け入れるよう要求し、アメリカ側もこの提案を支持した。

1994 年 8 月から 10 月にかけて開かれた第 3 ラウンドの会談では、朝米基本合意書が採択された。

同年 10 月 20 日には、アメリカ大統領クリントンがその履行に関する保証書簡を金正日総書記に寄せた。クリントンは保証書簡で、大統領のあらゆる権限を行使して朝米基本合意書を責任をもって履行すると確約した。

(7)

金正日総書記は、内外の朝鮮同胞が民族の和解と団結を成し遂げるよう導いた。

総書記はまず、スポーツと文化の分野で北と南の協力と交流を図るようにした。

1990年9月に中国で開催された第11回アジア競技大会で北と南の選手たちを北と南が共同で応援するようにし、同年10月には、平壌とソウルで北と南のサッカー選手たちが統一サッカー競技を行うようにした。そして、民族分断以来初めて北南単一チームを構成し、1991年4月24日から5月6日にかけて日本の千葉で開催された第41回世界卓球選手権大会と、同年6月にポルトガルのリスボンで開催された第6回世界ユースサッカー選手権大会に出場して、民族の統一の意志を全世界に示威し、内外同胞の統一への熱望をさらに盛り上げるようにした。

また、1990年10月に平壌で「汎民族統一音楽会」を、1990年12月にはソウルで「90送年統一伝統音楽会」を催すことによって、朝鮮民族の優秀性を誇示し、朝鮮民族は一つであることを一層熱く感じるようにした。

内外の同胞の間で日ごとに高まる全民族的な統一運動を組織化・体系化するようにした。

総書記は、1990年8月15日に板門店とソウルで、解放後45年にして初めて内外の統一運動団体の代表と各階層の人士が参加する「祖国の平和と統一のための第1回汎民族大会」を開催するように導いた。大会では、祖国の自主的平和統一のための連帯共同闘争を強化し、統一愛国勢力の拡大をめざして積極的に闘うという趣旨の決議文が採択された。これは事実上、

祖国統一のための全民族的連合戦線が結成されたも同然であった。第 1 回汎民族大会以降、常設の汎民族統一戦線組織を結成するための闘争がさらに強化される中、1990 年 11 月にベルリンで北と南、海外の 3 者実務会談が開かれ、全民族的な統一愛国勢力の連合組織として「祖国統一汎民族連合」（汎民連）が結成された。また、1992 年 8 月には板門店で「祖国統一汎民族青年学生連合」（汎青学連）が結成された。

汎民連と汎青学連が結成されることにより、北と南、海外の 3 者連帯・連合を実現し、統一運動を全民族的範囲で組織化するうえで新しい局面が開かれた。

総書記は、北南高位級会談が民族の和解と団結の新たな転機となるよう導いた。

1990 年 9 月から北と南の総理を団長とする高位級会談が平壌とソウルで開かれた。総書記は、北南高位級会談に参加する北側代表団の活動方向を明示し、会談が実を結ぶように提起されるすべての問題を解決した。そうして、1991 年 12 月の第 5 回北南高位級会談で「北南間の和解と不可侵および協力・交流に関する合意書」が採択され、次いで「朝鮮半島の非核化に関する共同宣言」について合意が成立し、1992 年 2 月の第 6 回北南高位級会談でそれが正式に発効した。北南合意書と非核化共同宣言が採択され発効したことは、祖国統一の 3 大原則を貫徹するための全民族的な闘争過程でもたらされた大きな勝利であり、民族の和解と団結、平和統一の新しい局面を切り開いた歴史的な出来事であった。

総書記は、全民族大団結 10 大綱領の旗印の下に、祖国統一の画期的局面を開くために心血を注いだ。

金日成主席は、1993 年 4 月に開かれた最高人民会議第 9 期第 5 回会議で、全民族の一致した統一の意志を反映して作成した**『祖国統一のための全民**

族大団結 10 大綱領』を発表した。

総書記は、全民族大団結 10 大綱領の対内対外宣伝をさまざまな形式と方法で行う一方、共和国政府と各政党、社会団体、海外同胞組織や汎民連組織が全民族大団結 10 大綱領を支持する声明や談話を発表し、集会や研究討論会を催し、署名運動を活発に繰り広げて、全民族大団結 10 大綱領に対する内外人民の絶対的な支持と歓迎を呼び起こすようにした。

総書記は、非転向長期囚の送還問題を実現するために精力を傾注し、1993 年 3 月 19 日、34 年間も鉄窓の中で信念と意志を守って闘った朝鮮人民軍従軍記者であった李仁模(リインモ)同志の送還を実現させた。李仁模同志の共和国北半部への送還は、革命戦士への金日成主席と金正日総書記の愛と信頼の精華であり、社会主義祖国に対する朝鮮人民の自負と信頼感をより一層強め、祖国統一の意志をさらに強固にした重要な契機となった。

全民族大団結 10 大綱領の旗印の下に内外同胞の民族的団結を実現するために、総書記は、総聯が北と南、海外の同胞美術家の汎民族的な美術展覧会を開催するよう指示し、それを実現するための活動を指導した。そうして、1993 年 10 月に東京と大阪で、民族分断 48 年にして初めて北と南、海外の同胞美術家の統一美術展が全同胞の大きな関心の下に開かれた。

総書記は、全民族大団結 10 大綱領の旗印の下に祖国統一の画期的局面を開くことになる北南最高位級会談を成功させるために心血を注いだ。

まず、北南高位級会談に先立ち、1993 年 10 月から北南最高位級特使交換のための実務代表団の接触を行い、1994 年 6 月 28 日には板門店で最高位級会談のための双方の副総理級予備接触を持つようにした。予備接触では、同年 7 月 25 日から 27 日まで平壌で北南最高位級会談を開くという合意書が採択された。

総書記は、北南最高位級会談が祖国統一の画期的局面を開く決定的な契

機となるようにするため、会談に関する多くの文書に残らず目を通して完成させた。

金日成主席は1994年7月7日、総書記の心血がこもった会談に関する文書を検討し、**「金日成　1994.7.7.」**という歴史的な親筆を残した。しかし、北南最高位級会談は、金日成主席の急逝という思いがけない不幸のため実現を見なかった。

(8)

金正日総書記は、社会主義偉業を擁護し前進させるための闘争を賢明に導いた。

1990 年代に入って、一部の国で社会主義が挫折し、資本主義が復活したことにより、社会主義偉業は大きな試練を経ることになった。帝国主義者と反動勢力は「社会主義の終焉」について喧伝し、反社会主義攻勢に一層熱をあげた。こうした情勢は、社会主義偉業を擁護し前進させることを切実に要求した。

総書記は、世界の革命的党と人民の共同の闘争綱領を採択するための前提をつくることに大きな力を入れた。

1992年1月3日、党中央委員会の責任幹部への談話**『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』**を発表して、社会主義偉業を擁護し前進させるための綱領的指針を与えた。

総書記は、一部の国における社会主義の挫折と資本主義の復活は、歴史発展の主流から見ると部分的かつ一時的な現象に過ぎないと指摘し、社会主義が挫折した原因とそこから汲み取るべき教訓、社会主義建設を指導する党が一貫して堅持すべき総路線を明示した。

朝鮮労働党は、金日成主席の生誕 80 周年に際して世界各国の党首班をはじめとする多くの党代表団が訪朝することを機に、社会主義を擁護し、前進させるための共同の闘争綱領として平壌宣言を発表することを提唱した。

そうして、金日成主席の生誕 80 周年を慶祝するために訪朝した各国の共産党、労働者党と進歩的政党の代表たちは、朝鮮式社会主義の真骨頂を目の当たりにして、チュチェ思想を具現した人民大衆中心の社会主義こそが人類の志向する真の社会であり、朝鮮式に社会主義を建設してこそ勝利を収めることができるということを一層強く確信するようになり、社会主義偉業を擁護し前進させるための共同の闘争綱領を採択することを一致して提起した。

こうして、1992 年 4 月 20 日、平壌では 48 人の党首を含む世界の 70 の共産党、労働者党、進歩的政党の代表たちが署名した歴史的な平壌宣言「社会主義偉業を擁護し前進させよう」が採択・発表された。

平壌宣言は、今の時代は自主性の時代であり、社会主義偉業は人民大衆の自主性を実現するための聖なる偉業であると指摘し、社会主義は本質上、人民大衆があらゆるものの主人となり、すべてのものが人民大衆に奉仕する真の人民の社会であり、社会主義のみがあらゆる形の支配と従属、社会的不平等をなくし、人民に実質的に自由と平等、真の民主主義と人権を保障することができると確言した。そして、社会主義偉業を擁護し前進させるために各国の党が自主性を堅持し、自らの革命力量を打ち固め、いかなる環境の下でも革命的原則を堅持し、社会主義の旗を高く掲げて進み、すべての党が自主性と平等の原則に基づいて同志的な団結と協力、連帯のきずなを強めるという共同の闘争課題を提示した。

世界の革命的党はこの宣言を「新しい共産党宣言」、「国際共産主義運動の新たな出発を告げる歴史的文書」、「革命的党が進むべき行動方向を規定

した指導指針」と高く評価し、これに次々と署名した。

総書記は、朝鮮労働党創立47周年に当たる1992年10月10日に論文**『革命的党建設の根本問題について』**を発表し、新しいタイプの革命的党、チュチェ型の党建設の道を示し、それに基づいて革命的な党を再建し、社会主義を再生させるための進路を明示した。

総書記は、世界各国の革命的な党の首班や革命家が朝鮮を訪れて金日成主席と会見することができるようにするとともに、彼らに会って助言を与えた。

金日成主席と金正日総書記に謁見した革命的な党の首班や革命家は、総書記に心から謝意を表し、総書記の偉人としての風格に感嘆した。

7

1994年7月～1998年12月

(1)

金正日総書記は、領袖永生の偉業を立派に実現するために心血を注いだ。

つとに革命の道を踏み出し、人民大衆の自主偉業の実現のために精力的に活動してきた金日成主席が、1994年7月8日に急逝した。

同日、総書記は党中央委員会政治局非常会議を招集した。会議では、金日成主席の逝去について通報し、総書記の提議により金日成主席の霊柩を安置する問題を協議した。

会議で総書記は、主席の霊柩を主席が20年近く執務をとっていた錦繍山（クムスサン）議事堂に安置することを提起した。

そして、主席の逝去に関する悲報を発表する問題と、国家葬儀委員会を組織し、弔意式と永訣式、中央追悼大会を行う問題について細やかな指示を与えた。

1994年7月11日と19日の党中央委員会の責任幹部への談話『**偉大な領袖金日成同志をわが共和国の永遠なる主席として高く戴こう**』、1994年10月16日の党中央委員会の責任幹部への談話『**金日成同志を永遠に高く戴き、その偉業をあくまで成し遂げよう**』などで総書記は、領袖永生の偉業を実現するうえで提起される原則的問題を明示した。

金正日総書記は、次のように述べている。

「われわれは金日成同志の永生についてよく口にしますが、金日成同志はとわに生きるということも金日成同志の思想と業績が不滅であり、金日成

同志が朝鮮人民の心に生き続けるという意味です」

総書記は、追悼行事を既成の慣例に従うのではなく、われわれの方式で行うようにし、その過程を通じて金日成主席は永遠にわれわれとともにあるという信念を人民の心に植えつけた。

そして、主席の霊前で弔意を表することを願う人民の心情を推し量り、1994年7月15日、国家葬儀委員会が哀悼期間を延長するという公報を発表し、7月17日までとされていた哀悼期間を20日まで延長し、16日までとなっていた弔客の受け入れを18日まで延期するようにした。そうして、数多くの人民と南の同胞、海外の同胞や抗日革命闘争の縁故者が主席の霊前で弔意を表し、外国駐在の朝鮮代表部でも追悼行事が厳かに執り行われた。

総書記は、永訣式の時に掲げる主席の太陽像を最高の水準のものにし、主席が生前愛用していた乗用車を霊柩車として利用し、永訣行事で追悼曲ではなく不滅の革命頌歌『金日成将軍の歌』が響くようにした。そして、儀仗隊の敬礼法も新たに定めた。

総書記は、領袖永生祈願のスローガンと永生塔、記録映画、文学・芸術作品を通して、人民の心に領袖永生の信念を深く植えつけた。

まず、**「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにおられる」**というスローガンを示し、主席の永生塔を全国の工場や農村、軍部隊、街や村に建てるようにした。そして、1996年7月初旬には、主席がいつも通っていた金星（クムソン）通りの入り口に大型の永生塔を建てることを提唱し、その建設工事をきめ細かく指導した。

また、記録映画を最高の水準で完成し、それによる教育を強化するようにし、歌謡『主席は永遠にわれらとともに』をはじめ領袖永生を主題とした文学・芸術作品を創作・普及するようにした。

1998年9月5日、最高人民会議第10期第1回会議で新たに採択された朝

鮮民主主義人民共和国社会主義憲法は、朝鮮民主主義人民共和国の創建者であり、社会主義朝鮮の始祖である金日成同志を共和国の永遠なる主席として高く戴くということを規定した。

総書記は、金日成主席を生前の姿のまま永遠に安置する事業を賢明に指導した。

1994 年 7 月 11 日と 19 日の党中央委員会の責任幹部への談話で、金日成主席を錦繍山議事堂に永遠に安置し、錦繍山議事堂を主席の記念館として整えるという確固たる意志を表明した。

そして、この建設工事を人民軍に任せ、工事を最高の水準で完成するよう精力的に指導した。

総書記は、数回にわたって現地に出向き、主席を生前の姿のまま安置する部屋の位置を定め、主席の大理石の立像を建てるよう指示し、設計や施工はもとより宮殿内部の照明や音響設備に至るまで細やかに指導した。

工事が仕上げの段階に入っていた 1995 年 6 月 12 日、錦繍山議事堂は錦繍山記念宮殿と新たに命名し、錦繍山記念宮殿に金日成主席を生前の姿のまま安置することを主旨とする朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会、朝鮮民主主義人民共和国政務院決定書「偉大な領袖金日成同志を生前の姿のまま安置することについて」が採択・発表された。そして、主席の 1 周忌に当たる 1995 年 7 月 8 日には錦繍山記念宮殿の開館式が行われた。

その後も総書記は、錦繍山記念宮殿と錦繍山地区をチュチェの最高聖地としてより立派に整えることに引き続き深い関心を払い、宮殿の内部を最高の水準で整備するようにした。そして、花崗岩で舗装した広場と宮殿外廊、石造門、石垣を新たに建設するよう指示するとともに、錦繍山地区に

樹木園を造成し、9・9節通りを建設するようにした。

総書記は、主席の革命思想と不滅の業績を代を継いで輝かせることに力を傾けた。

主席の革命思想を朝鮮革命の永遠の指導思想として輝かせることに特別な意義を付与した総書記は、**「偉大な領袖金日成同志の革命思想でしっかり武装しよう！」**を党の基本スローガンとして提示した。そして、チュチェ思想著作展示館を設けることを発案し、それを設置するうえで提起される問題をすべて解決した。

総書記は、主席の革命的生涯と不滅の業績を末永く輝かせるために、金日成政治大学と金日成軍事総合大学に大元帥服姿の主席の銅像を建て、全国の数多くの単位に主席の現地指導事績碑と現地教示碑を新たに建てるようにした。また、青年運動の発展に尽くした主席の不滅の業績を輝かせるために、1996 年 1 月、朝鮮社会主義労働青年同盟を金日成社会主義青年同盟と改称し、主席が数回現地指導した平壌大同門人民学校を「金成柱（キムソンジュ）人民学校」と新たに命名した。

そして、主席の親筆碑と記念塔を建て、金剛山（クムガン）と妙香山（ミョヒャン）の名所や天然岩に主席をたたえる文字を刻むようにし、全 21 巻の叢書『偉大な領袖金日成同志の不滅の革命業績』をはじめとする記念碑的図書を編纂することを発案し、それを精力的に指導した。

1997 年 7 月 8 日、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会、朝鮮民主主義人民共和国政務院の決定書「偉大な領袖金日成同志の革命的生涯と不滅の業績を末長く輝かせるために」が発表され、チュチェ年号と太陽節(金日成主席の誕生日、4 月 15 日)が制定された。

(2)

金正日総書記は、1990年代の中頃から先軍政治を実施した。

総書記は、人民軍を革命の主力部隊、国の柱として押し立てた。

1994年7月13日、朝鮮人民軍の指揮メンバーに、人民軍は主席が切り開き、指導してきた革命偉業を達成するうえで主力部隊とならなければならないと言明し、1995年1月1日、小松林の軍営への歴史的な視察を行った。

小松林の軍営への総書記の視察は、新たな情勢に対処して人民軍の威力をさらに強化し、それに依拠して、金日成主席が切り開いたチュチェの革命偉業をあくまで達成せんとする鉄の信念と意志の宣言であった。

総書記は、革命的軍人精神を創造し、それを全社会に一般化させるようにした。

総書記は、小松林中隊の視察についで、柿の木中隊、五聖山（オソン）、鉄嶺（チョル）など絶え間ない現地視察の道を歩みながら、人民軍が無敵必勝の革命強兵、人民の幸福の創造者としての使命を果たしていくよう導いた。

この過程で、人民軍軍人の間では、党と祖国のためなら自爆の道もためらわぬ多数の英雄戦士が輩出し、「敬愛する最高司令官の命令を貫徹するまでは祖国の青空を仰ぐな！」というスローガンを叫びながら、地下の切羽で生命をもなげうって闘った安辺（アンビョン）青年発電所軍人建設者の闘争精神が強く発揮された。

1996年6月10日、総書記は安辺青年発電所の建設現場を現地指導し、軍人建設者が発揮した徹底した領袖決死擁護精神、決死貫徹の精神、英雄的犠牲精神を革命的軍人精神と命名し、全党と全社会がこれを大いに見習うようにした。

そして、1997 年 3 月 17 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**革命的軍人精神を見習うために**』において、すべての部門、すべての単位が革命的軍人精神を見習うための課題と方途を示し、それを実現するための対策も立てた。

総書記は、国家機構体系を先軍政治の要求に即してさらに発展させるように導いた。

主席が逝去した直後、総書記は、国家機構体系を継承性を確固と保障し、軍事重視の思想の要求に即して発展させる構想を示した。そして、先軍政治を全面的に実現するために、1998 年 9 月 5 日の最高人民会議第 10 期第 1 回会議で国防委員会を中枢とする新しい国家機構体系を確立するようにした。

そして 1999 年 2 月 8 日、朝鮮人民軍の指揮メンバーに、先軍政治は自分の基本政治方式であり、朝鮮革命を勝利に導くための万能の霊剣であるとし、それを全世界に宣言した。

総書記は、全人民の一致した意思と念願によって党と国家の首位に推戴された。

金日成主席が逝去した後、朝鮮人民は金正日同志を朝鮮労働党の総書記に、国家主席に戴くことを切願した。

一日も早く金正日同志を党と国家の首位に戴くことを請願する各階層の人民の手紙が毎日のように党中央委員会に寄せられた。

総書記は、主席の霊前で号泣した人民の悲憤がまだ心に残っているのに、党と国家の指導機関を新たに選挙して万歳を叫ぶのは戦士の道理でないとし、既成の慣例にこだわらず推挙を数年間も延ばしてきた。

金正日同志を党の首位に戴こうとする全党員の意思と念願をこめて、各級党組織は党創立52周年を控えて金正日同志を朝鮮労働党の総書記に推挙する政治行事を行った。

1997 年 9 月に平城市で開かれた朝鮮労働党平安南道代表会を皮切りに、朝鮮人民軍代表会、道（直轄市）代表会、省・中央機関および道党の機能を果たす党組織の代表会などが相次いで開かれた。これらの代表会では、金正日同志を朝鮮労働党の総書記に推挙する問題を討議し、決定した。

1997 年 10 月 8 日、朝鮮労働党中央委員会と朝鮮労働党中央軍事委員会は特別報道を通じて、全党員の一致した意思により、金正日同志が朝鮮労働党の総書記に推戴されたことを厳かに発表した。こうして、金正日同志を朝鮮労働党の総書記に推戴しようとする人民の熱望は、主席が逝去して 3 年後にようやく実現した。朝鮮人民の総意により、1998 年 9 月 5 日の最高人民会議第 10 期第 1 回会議では金正日総書記が朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に選出された。

これは、すでにその職にあった総書記が単に国防委員会委員長に再度選出されたことを意味するのではなかった。それは、新しい憲法により国防委員会が国防部門の常設の最高主権機関、行政機関であるだけでなく、新しい国家機構体系の中枢機関となったので、政治、軍事、経済をはじめすべての分野の活動を統率する共和国の最高職責を担ったことを意味した。

金正日総書記を党と国家の首位に戴いたことは、金日成主席が切り開いたチュチェの革命偉業を最終的に完遂しうる決定的保証がもたらされた意義深い出来事であった。

(3)

金正日総書記は、人民軍を党と領袖を決死擁護する思想と信念の強兵に鍛え上げることに力を注いだ。

まず、思想教育を領袖の偉大さを革命的信念、信義とし、階級的自覚を

高めるための内容で一貫させるようにした。

人民軍軍人の間で偉大性教育を強化するために、総書記は、人民軍内の政治学習網で金日成主席と党の偉大さを深く認識させることを基本とするようにし、各級部隊と区分隊が自分の部隊に秘められている革命事績を通じての軍人教育を強化するようにした。

そして、すべての人民軍将兵を呉仲洽型の領袖決死擁護闘士に、李寿福型の肉弾英雄、吉永祚(キルヨンジョ)型の自爆勇士に鍛え上げるために、彼らの偉勲を広く紹介・宣伝し、党および青年同盟組織がこの活動を軍人の組織・思想生活と密接に結びつけて着実に行うようにした。また、この活動を自分の部隊の戦闘偉勲をもって教育する活動と密接に結びつけて行うための対策も講じた。

この時期に、任務遂行中思いがけなく南朝鮮に抑留されたが、屈することなく革命的信念と志操を守って闘った弱年の人民軍兵士たち、全身が炎に包まれ、意識が朦朧とする瞬間にも金日成主席と金正日総書記の肖像画を守りぬいて目を閉じた人民軍の勇士、革命的スローガンを記した樹木を守りぬいて犠牲になったムジェ峰の 17 人の英雄戦士など、数多くの領袖決死擁護の闘士が輩出した。

1998 年 11 月 22 日、信川博物館を現地指導した総書記は、軍人に対する階級的教育を強化するよう強調し、最前線の板門店の軍営を訪ねては、兵士たちの胸に強い階級的自覚を植えつけた。また、軍人の強い階級的覚悟がみなぎる戦闘的で革命的な芸術公演を見ては、全軍にその模範を一般化させるようにした。

総書記は、思想教育をさまざまな形式と方法で生き生きと戦闘的に行うようにした。

そのために、卓上こよみ形式の教育カードをつくって全軍の中隊教育室

に備えて利用するようにし、軍隊では歌を一つ歌い、速報を一つ発刊し、アジ演説を一つ行うにしても、戦う軍隊らしく戦闘的に、火線式に行うようにした。

総書記は、人民軍を不敗の戦闘力を備えた無敵必勝の強兵に育てる活動を賢明に指導した。

まず、人民軍のすべての指揮官を党に忠実で、高い作戦指揮能力を備えたつわものに育てた。

そのために、人民軍の指揮官の陣容を党に忠実で、つわものとしての気質をもつ人で将来を見通して固めるとともに、彼らのための新しい形式の講習制度を設けるようにした。そして、数多くの軍事教育機関を現地指導し、すべての教育活動を主体的立場に立って着実に行うように導いた。

総書記は、戦闘訓練を強化して人民軍の戦闘力を全面的に高めるようにした。

そのために、戦闘訓練教範を党の軍事戦略戦術思想と国の現実に即して改め、すべての訓練をチュチェの戦法の要求通りに行って、戦闘訓練で主体性の原則を確実に具現するようにした。また、訓練で戦闘性の原則をしっかりと具現するようにした。

人民軍の武力装備を近代化することにも深い関心を払った総書記は、国防工業部門の科学者と労働者、技術者をしばしば訪ねて、より大きな偉勲を立てるよう励ました。また、集団的技術革新運動を力強く繰り広げて、既存の武器や戦闘技術機材の性能をさらに高め、合理的に改造する活動も積極的に推し進めるようにした。

総書記は、人民軍軍人の物質・文化生活を改善して全軍に戦闘的で楽天的な情緒があふれるようにし、人民軍の戦闘力をさらに高めるように導いた。

1996 年 1 月 1 日、総書記は、全軍が革命の領袖を決死擁護する今日の第7連隊になろうというスローガンを打ち出して呉仲洽第7連隊称号獲得運動を提唱し、同年 1 月 24 日には、朝鮮人民軍最高司令官命令第 0072 号**「人民軍内で『呉仲洽第 7 連隊称号獲得運動』を力強く展開することについて」**を下達した。

呉仲洽第 7 連隊称号獲得運動は、抗日革命闘争の時期、革命の司令部を命をなげうって守った第 7 連隊を模範として見習って、党と領袖を断固擁護するための新たな高い形態の革命的大衆運動である。換言すれば、全軍の金日成主義化の要求に即してすべての人民軍将兵を党と領袖を決死擁護する銃弾・爆弾に鍛え上げて、人民軍を最高司令官の親衛隊、決死隊にするための集団的革新運動である。

抗日武装闘争の時期、強く発揮された呉仲洽第 7 連隊の領袖決死擁護の精神は、自分の指導者に対する絶対的な信頼感に基づく最も高潔な革命精神であり、司令部の安全のためなら、敵陣にもためらうことなく突っ込む肉弾精神であり、飛んでくる敵弾も身をもって防ぐ砦の精神、盾の精神である。

総書記は、呉仲洽第 7 連隊称号獲得運動の炎が全軍に燃え上がるようにした。

そのために、呉仲洽第 7 連隊称号獲得運動を人民軍の軍事・政治活動の総体的方向とし、これを党委員会挙げての活動としてしっかり捉えていくようにする一方、多くの単位を現地で指導して軍人たちを励まし、この運動が着実に進められるように導いた。また、呉仲洽第 7 連隊称号獲得運動を展開するうえでの偏向を適時に正し、この運動が全軍を領袖決死擁護の精神がみなぎる銃弾・爆弾の隊伍にすることに指向するように導いた。

(4)

金正日総書記は、社会主義の思想的陣地をさらに打ち固めるための闘争を賢明に指導した。

総書記は精力的な著述活動により、1994年11月1日の『**社会主義は科学である**』、1995年6月19日の『**思想活動を優先させるのは社会主義偉業の遂行にとって必須の要求である**』、1997年6月19日の『**革命と建設において主体性と民族性を固守するために**』など数多くの著作を発表し、これらの著作で社会主義の科学性と真理性、生命力を科学的、理論的に論証し、社会主義の偉業を完成するうえでの理論的・実践的問題を解明した。

また、1996年7月26日に朝鮮労働党中央委員会機関誌『勤労者』に寄せた談話『**チュチェ哲学は独創的な革命哲学である**』をはじめとする多くの著作で、チュチェ思想の研究と宣伝における偏向とその原因を明らかにし、社会科学の研究と理論・宣伝活動において主体的な立場と方法論を堅持すべきだと強調した。

総書記は、党員と勤労者を社会主義思想で武装させるための思想教育活動をさらに深化させた。

まず、思想教育の内容を複雑な国際情勢と革命発展の要求に即して深めることに深い関心を払った。

そして、情勢が厳しく、闘争が困難を極めるほど、党員と勤労者の間で党と領袖への忠誠心教育と偉大性教育をさまざまな形式と方法で着実に行う一方、社会主義への信念教育と困難克服の精神を植えつけるための教育を強化するようにし、革命伝統教育と階級的教育にも深い関心を払った。

1995年2月5日、東海岸の某海軍部隊を現地指導した総書記は、アメリ

カ帝国主義の侵略史を立証する証拠物件である武装情報収集艦プエブロ号を平壌の大同江畔につなぎとめて、人民と人民軍軍人の反米教育に利用するようにと指示した。また、1998年11月に新築の信川博物館を現地指導した際には、この博物館を反米意識を高める拠点、階級の敵に対する憎悪心と闘争精神を高める階級的教育の場として利用すべきだと強調した。

総書記は、思想活動の形式と方法において古い枠を打ちこわし、思想活動を火線式に切り替えるとともに、党員と勤労者を社会主義思想で武装させるための思想教育活動を、非社会主義的要素を克服するための闘争と密接に結び付けて推し進めた。

総書記は、党をしっかりと固め、革命隊伍の一心団結をさらに強める活動に力を注いだ。

まず、党をしっかりと固め、その指導的役割を強めるようにした。

党創立50周年を迎えて1995年10月2日、総書記は古典的著作『**朝鮮労働党は偉大な領袖金日成同志の党である**』を発表して、チュチェの党建設偉業における金日成主席の不滅の業績を固守し、朝鮮労働党を永遠に栄えある金日成同志の党として強化・発展させていくための指導指針を示した。また、党創立記念塔を建設することを提唱し、その形成案や位置の選定から施工に至るまで具体的に指導し、党創立50周年慶祝行事を最高の水準で行うように導いた。そうして、党建設偉業における主席の不滅の業績を子々孫々に伝え、朝鮮労働党を永遠に金日成同志の党として強化・発展させていくための確固たる保証をもたらした。

総書記は、党の唯一的指導の下に全党が一体となって動く革命的な規律と秩序を確立するとともに、党の路線と政策を無条件に受け入れ、あくまで貫徹する革命的気風を打ち立てて、全党と全社会に党の指導体系を確立するようにした。

また、幹部陣容を党と領袖に限りなく忠実な人で固め、幹部陣容の政治的・思想的純潔性をより高い水準で保障するようにした。

そして、1997 年 1 月と 1998 年 1 月に全党党活動家会議を開催し、党活動家の活動気風と闘争気風に根本的転換をもたらすようにした。

総書記は、革命隊伍の一心団結を強めるための活動をさらに深化させた。

1995 年 12 月 25 日、古典的著作『**革命の先輩を敬うのは革命家の気高い徳義である**』を発表して、全社会に革命の先輩を敬う気高い道徳的気風を確立するようにした。また、抗日革命闘士だけでなく、祖国の統一と社会主義の偉業を完遂するために闘い、先に逝った愛国烈士も永生の丘に立たせ、祖国解放戦争で英雄的偉勲を立てた参戦老兵の功績も輝かせてくれた。

総書記は、各階層の大衆との活動に力を入れて、彼らが自分の指導者を清らかな良心をもって戴くようにし、全国を互いに助け導き合うむつまじい一つの大家庭にするようにした。

また、幹部が人民への献身的奉仕精神を持ち、人民のためにすべてを尽くして働くよう導いた。

1998 年 2 月、総書記は、すべての人民と人民軍将兵の思想の一致、闘争気風の一致を保障することを軍民一致の基本と規定し、軍民関係において新たな転換をもたらすことによって領袖、党、大衆の一心団結を強めるようにした。

(5)

金正日総書記は、朝鮮で困難を極めた 1990 年代中期の「苦難の行軍」と強行軍の時期に、帝国主義者の反共和国圧殺策動を先軍政治の威力によって粉砕するようにした。

総書記は、敵の無謀な武力挑発策動に仮借ない懲罰を加えるようにした。

1994 年 12 月 17 日、人民軍は前線東部の軍事境界線を越えて共和国の領空を侵犯した米軍のヘリコプターを一撃の下に撃墜した。同年 12 月 28 日、アメリカは大統領の特使を平壌へ送って領空侵犯行為について公式に謝罪し、今後こうした事件の再発を防ぐ措置を取ることを公式に保証する「了解覚書」に署名した。

1997 年 7 月中旬をはじめ軍事境界線一帯で敵が武力挑発策動を行うたびに、人民軍将兵はそれを断固粉砕した。

1996 年 3 月、総書記は敵の大規模戦争演習騒動を粉砕するようにした。

敵は 1996 年初頭から南朝鮮に米海軍の主力原潜を引き入れて連合対潜訓練を行い、2 月にも大規模合同軍事演習を行った。3 月 28 日からは「護国 96」陸海空軍合同戦争演習を繰り広げて情勢を緊張させた。

総書記は、知略をめぐらせて人民軍の作戦・戦闘行動方向を明示する一方、1996 年 3 月 29 日には人民武力部第 1 副部長の談話を発表して、火には火をもって、棍棒には棍棒をもって報いるのがわが軍隊の気質であり、敵があえてわが祖国の寸土、一木一草でも侵すならば、人民軍は強力な自衛的措置をとって粉砕するであろうと宣言するようにした。

アメリカは 1998 年に入っても朝鮮の人工衛星打ち上げと「地下核施設疑惑」について騒ぎ立て、第二の朝鮮侵略戦争計画である「作戦計画 5027」の内容を第三国の出版物に公開し、共和国に対する封じ込め作戦を展開した。「作戦計画 5027」は、アメリカ帝国主義の戦争挑発策動が極めて危険な段階に入ったことを示すものであった。

1998 年 12 月 2 日、朝鮮人民軍総参謀部スポークスマンの声明「われわれの革命武力はアメリカ帝国主義侵略軍の挑戦に秋毫の容赦もなく殲滅的打撃をもってこたえるであろう」が発表された。声明が発表されるやいなや

世界中に激震が走り、アメリカの戦争計画は水泡に帰した。

総書記は、朝米基本合意書が採択された後、それを実現するための闘争を賢明に指導した。

まず、朝鮮が主動的に核開発凍結措置を取るようにした。

1994 年 10 月 30 日、政務院の決定として同年 11 月の初めから 5MW 試験原子炉の稼動を中止し、それに対する国際原子力機関(IAEA)の監視を許容し、5 万および 20 万 KW 発電能力の黒鉛減速炉の建設を中止するなど、核エネルギー施設を即時凍結する措置を講じたことを公表し、次いで 5MW 試験原子炉の燃料棒保管に関する協商など、各分野の専門家協議を行うことを提案した。

こうして、クリントン行政府は、米国内の強硬保守勢力の攻撃にもかかわらず、朝米基本合意書による初年度分の重油 15 万トンのうち、まず 5 万トンを 1995 年 1 月までに納入した。

総書記は、朝米基本合意書の核心をなす軽水炉提供に関する公約を実現させるための対米外交戦を引き続き推進させるようにした。

朝米政治協商を通じて軽水炉提供に関する問題を解決するようにした総書記は、会談の進捗状況を聞き取って、提起された問題の解決方途を一つ一つ示した。

そうして会談では、朝米基本合意書に基づき、アメリカが軽水炉対象実現の全過程に全的な責任を負うことが再確認され、アメリカ主導の KEDO（朝鮮半島エネルギー開発機構）は軽水炉発電所の建設資金と設備を提供するだけで、朝鮮民主主義人民共和国の基本相手はアメリカであり、したがって総決算もアメリカとだけ行うということを明白にした朝米共同コミュニケが採択、発表された。

共同コミュニケの発表後、アメリカは KEDO を発動して 1995 年 12 月 15 日に軽水炉提供に関する協定文に調印し、1997 年 8 月には、軽水炉対象建

設のための着工式が朝鮮で行われた。そして、アメリカは、軽水炉対象建設を終えて鍵を渡す前まで自分たちが実行することになっている代替燃料提供公約に基づいて重油の納入も続けた。

(6)

金正日総書記は、当面の経済的難局を打開するための闘争に全人民を立ち上がらせた。

金日成主席の逝去後、アメリカをはじめとする帝国主義者の反共和国孤立・圧殺策動と東欧諸国での社会主義の挫折による社会主義市場の崩壊、数年続きの天災のため、朝鮮人民は厳しい「苦難の行軍」をせざるを得なくなった。

総書記はまず、全人民が「苦難の行軍」精神をもって生き、闘うよう導いた。

1996 年 1 月 14 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**今日のための今日を生きるのでなく、明日のための今日を生きよう**』と、10 月 14 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**幹部は「苦難の行軍」精神をもって生き、働くべきである**』などで、総書記はすべての幹部と勤労者が「苦難の行軍」精神をもって生き、闘うよう強調した。

「苦難の行軍」精神をもって生き、闘うという総書記の教示には、すべての幹部と党員、勤労者が抗日革命烈士が「苦難の行軍」の時期に発揮した領袖決死擁護の精神、自力更生の精神、難関克服の精神、革命的楽観主義の精神をもって立ちはだかる障害と難関を克服し、革命と建設のすべての分野で新たな高揚を起こそうという崇高な志と意図がこめられていた。

総書記の高志を体して人民は、電気がなければ手で機械を動かし、原料や

資材が不足していれば内部の潜在力を積極的に探し出して生産を保障した。

総書記は、「苦難の行軍」の時期の要求に即して党活動をより戦闘的に、着実に進めて、大衆を新たな革命的高揚へと奮い立たせるようにした。

総書記は、党活動家が大衆の中に深く入り、火線宣伝、火線鼓舞式で政治活動を行って大衆を革命的高揚へと奮い立たせるようにした。そして、1997 年 1 月には全国党活動家会議を催して書簡『**今年を社会主義経済建設において革命的転換の年にしよう**』を送り、すべての党組織と党活動家が党活動を覇気にみちて革命的に、戦闘的に行って、経済問題と人民生活の問題を解決するうえで転換をもたらすよう強調した。

総書記の教示を心に刻みつけたすべての党活動家は、大衆の中に深く入って彼らと苦楽を共にしながら、「苦難の行軍」を勝利のうちに締めくくるための闘争へと党員と勤労者を奮い立たせた。そうして、銀波（ウンパ）郡養洞（ヤンドン）協同農場第 7 作業班の農場員たちの提唱による 90 年代の金済元（キムジェウォン）運動、愛国米献納運動が全国の農業勤労者の間で力強く繰り広げられ、多くの工場、企業が困難な状況にあっても、内部の潜在力を積極的に探し出して人民経済計画を遂行するという成果をあげた。

総書記は、人民軍各部隊を絶えず現地視察することにより、人民軍の戦闘力を全面的に強化し、祖国の防衛線を鉄壁のごとく打ち固めるとともに、都市や農村、工場や企業、発電所の建設現場や耕地整理の作業現場など人民経済各部門を現地指導することにより、操業が停止していた工場に活力を与え、生産の活性化を促した。

総書記は、人民軍を先頭に立たせて経済的難局を切り抜けるようにした。

総書記は、主席の遺訓貫徹のための重要対象建設を人民軍に任せ、それを所定の期日内に立派に完成させるようにした。

1994 年 11 月 9 日、朝鮮人民軍最高司令官命令第 0051 号**「平壌市に清流（チョンリュ）**

橋（第 2 段階）と錦綾（クムルン）第 2 トンネルを建設すること」を下達し、党創立 50 周年を迎えて人民軍がこの建設を終えるようにした。また、安辺青年発電所の建設、平壌―香山（ヒャンサン）観光道路の建設、九月山（クウォルサン）、七宝山（チルボサン）、正方山（チョンバンサン）を人民の文化休養地として整備する工事など、重要対象建設を人民軍が担当して完成するようにした。

総書記は、農業、電力、石炭、鉄道運輸などを国の経済全般をもり立てる主要部門に定め、これを人民軍に担当させた。

総書記は、農業生産を正常化し、飛躍的な発展を遂げるための決定的対策として農業部門に人民軍を派遣することにし、1997 年 3 月 18 日、人民軍が農村支援を大規模に、かつ積極的に行う措置を講じ、翌年にも人民軍が農作に責任を持つという立場に立って引き続き農業部門の突破口を切り開くようにして、食糧問題の解決に大きく寄与するようにした。

総書記は、人民軍が主要な建設対象に軍人を派遣して、経済をもり立てるための活動を新たな高い段階に引き上げるようにした。

人民軍軍人は、「祖国の防衛も社会主義建設もわれわれが引き受けよう！」というスローガンを掲げて、社会主義祖国の防衛線を確固と守りながら、重要対象の建設現場に駆けつけ、経済建設の進撃路を先頭に立って切り開いた。

こうして、数多くの工場、企業が原状通り復旧されて生産正常化の軌道に乗るようになった。

総書記は、慈江道（チャガンド）が「苦難の行軍」、強行軍を勝利のうちに締めくくるモデルを創造するように導いた。

慈江道をモデルにして「苦難の行軍」を締めくくることを決心した総書記は、1996 年 8 月、道党の責任幹部に中小の発電所を大々的に建設する課題とそれを実現するための方途を示した。

慈江道の幹部と勤労者は、「道は険しくても笑顔で行こう！」というスローガンを掲げて、自力で中小の発電所を大々的に建設して電力問題を解決し、農作に励んで食糧問題解決の突破口を切り開いた。そうして、他の道より大きな困難と試練を経なければならなかった慈江道が全国の先頭に立つようになった。

1998 年 1 月、小寒・大寒の寒さもいとわず慈江道を訪ねた総書記は、道内の各部門の活動を現地で指導し、慈江道の人民が発揮した革命精神を**「江界（カンゲ）精神」**と名付け、全国がそれを見習うようにした。

慈江道の労働者と人民が生み出した江界精神は、党が最も厳しい試練に見舞われている時に生み出された社会主義防衛精神であり、新たなチョンリマ（千里馬）大高揚の炎を燃え上がらせた闘争精神である。それはまた、金正日総書記がおられればわれわれは必ず勝利するという必勝の革命精神であり、総書記の意図と構想を水火も辞せずあくまで実現していく決死貫徹の精神、無から有を生み出す自力更生、刻苦奮闘の精神であり、困難であるほど笑顔で闘っていく革命的楽天主義の精神である。

総書記は江界精神を全国に一般化させるようにした。

1998 年 3 月 9 日、城津（ソンジン）製鋼連合企業所を訪ねた総書記は、城鋼（城津製鋼連合企業所）の労働者が新たな大高揚ののろし、城鋼ののろしを上げるよう呼びかけた。そして、1998 年 6 月と 10 月には慈江道を訪ね、江界精神の創造者が社会主義強国の建設で引き続き先頭に立つよう励まし、中央機関の幹部と道・市・郡党の責任幹部、工場の党書記が慈江道内の工場を見学してその模範を見習うようにした。

そうして、城鋼ののろしが燃え盛る中、金属工業、機械工業など人民経済の基幹工業部門の活性化の土台が築かれ、ジャガイモ栽培革命、二毛作、耕地整理などで奇跡のような成果が収められた。また、1996 年 8 月 11 日の

党中央委員会の責任幹部への談話『**国土管理事業に新たな転換をもたらすために**』において総書記が提示した課題を心に受けとめた全国の人民が国土管理事業にこぞって立ち上がり、国土は面目を一新した。

(7)

金正日総書記は、科学技術を急速に発展させるための活動を指導した。

まず、全社会に科学重視の気風を確立するための活動に大きな力を入れた。

1995 年 4 月、国家科学院を現地指導した総書記は、科学研究活動を改善し、科学技術を世界的水準に引き上げるための指針を示した。そして、5 月 3 日には科学を重視し、科学を優先的に発展させるよう強調した。また、1997 年の新年を迎えて科学者たちに贈り物を贈り、科学者を社会的に押し立て優遇する気風を打ち立てるようにした。

総書記は、国の科学技術を急速に発展させるための対策を講じた。

まず、平城市に属していた科学地区を 1995 年に平壌市に所属させるようにし、同年 9 月には全国のすべての科学研究機関に対する指導体系を確立して、国家科学院は国家科学行政機関として、国家科学技術委員会は国家技術行政機関として活動するようにした。

また、科学技術に対する審議、評価と導入を正しく行うための整然たる体系を確立するとともに、実力を基本として老・壮・青を適切に組み合わせて科学者、技術者の陣容を固め、外国との科学技術交流と科学技術情報活動を強化するようにした。

そして、1997 年 4 月、科学技術発展 5 カ年計画（1998～2002）を立てる課題を提示し、党の革命的経済戦略を貫徹するうえでの科学技術上の問題を解決して生産を正常化し、人民生活を向上させるとともに、電子工学、生物工

学をはじめとする先端科学分野に力を入れて、これらの部門の科学技術を高い水準に引き上げることをこの計画の中心的課題とするようにした。

総書記は、コンピュータ科学部門をはじめとする国の主要科学部門を急速に発展させるための活動を精力的に指導した。

まず、プログラム技術を発展させるための方向と方途を示し、科学研究機関に高性能のコンピュータを完備するとともに、科学研究機関と教育部門、人民経済の各部門でプログラムの開発に大きな力を入れるようにした。1998 年 2 月には全国プログラムコンテスト・展示会場に出向いて、プログラム開発の課題とその遂行方途を示した。そして、全国的なプログラムコンテストおよび展示会をしばしば催して、プログラムの開発に大きな転換がもたらされるようにした。

1997 年 2 月の祝日を迎えて、総書記は、データベースサービス、電子メールサービス、電子ニュースサービスなど、すべてのデータサービスを朝鮮式のプログラムを利用して行う科学技術データ検索のための全国的なネットワークを形成するようにした。

総書記は、電子工学と熱工学、細胞および遺伝子工学を新たな高い段階へと発展させ、電力工業、採掘工業、金属工業、機械工業、化学工業、鉄道運輸、建設建材工業など人民経済の主要部門を発展させるための科学研究活動と、軽工業の近代化、水産業の発展など人民生活を向上させるための科学研究活動に大きな力を入れた。

そして、「苦難の行軍」、強行軍をしていた困難な状況下にあっても現代科学技術の総合体である人工衛星を自国の力と技術で開発・完成するように導き、共和国創建 50 周年を契機に、1998 年 8 月 31 日、朝鮮最初の人工衛星「光明星(クァンミョンソン)－1」号の打ち上げを成功させて、チュチェ朝鮮の国力、科学技術の威力を全世界に誇示するようにした。

総書記は、教育の質を一段と高めるために力を尽くした。

1996年10月1日、金日成総合大学創立50周年に際して同校の教職員、学生に送った書簡**『革命発展の要求に即して大学教育を強化するために』**と、1996年12月7日、金日成総合大学を現地で指導した際の教示をはじめとする多くの教示で、発展する現実の要求に即して教育事業を改善・強化するための進路を明示し、チュチェ教育の発展に新たな転換をもたらすための活動を精力的に指導した。

総書記は、社会主義建設の一翼を担う有能な人材をより多く養成できるように教育体系を改善するようにした。

まず、普通教育部門ですでに1980年代から平壌第一高等中学校と各道都に第一高等中学校を設けて運営する過程で積んだ経験に基づき、1995年7月、第一高等中学校を増設するようにした。また、高等教育体系を合理的に整備して、科学者、技術者、専門家の養成においてその量的拡大にのみ偏る偏向をなくし、社会主義建設に寄与しうる人材を養成できるようにした。

総書記は、教育の内容を党と領袖に忠実で有能な革命的人材をより立派に育成できるように全面的に改善するようにした。

そうして、1998年4月、各級学校で抗日の女性英雄金正淑女史の革命活動史をカリキュラムに含める措置が取られ、金日成主義著作科目の教育を強化し、金日成主義基本、チュチェ哲学とチュチェ政治経済学科目の教育内容を党の思想と意図に即してさらに完成するようにした。また、中学校から大学に至る各級学校で論理学と心理学を教えるようにした。

そして、中等一般教育の段階から数学、物理、生物、化学などの基礎知識教育を高い水準で行うようにし、特に、すべての中学校でコンピュータ教育を一段と強化するための画期的措置を取った。また、高等教育機関でも、国の実情と発展する革命の要求に即して、科学技術を急速に発展させ

るのに寄与しうる科学技術人材を育てることを原則として科学技術教育を絶えず改善するようにした。

総書記は、朝鮮式の優れた教育方法を全面的に具現するようにした。

そのために、すべての教育を開発の方法で行うようにし、近代的な直観手段を大いに利用し、討論と練習、実験と実習を強化して、学生・生徒が実際の活動に役立つ生きた知識を体得するようにした。特に、学生に原理を明確に教え、彼らの思考を啓発して自立的に、能動的に真理を体得させる方法で大学教育を行い、実践・実技教育を強化するようにした。また、授業コンテストや経験討論会、教育展示会など、さまざまな形式と方法で先進的な教育方法を積極的に一般化させるようにした。

総書記は、教員の役割を強めるとともに、1997 年 2 月の 7・15 最優等賞受賞者大会を契機に学生・生徒の間に学習気風を確立するようにした。そして、新学年度の始業日を国の実情に即して改めるようにした。

総書記は、チュチェの文学・芸術を発展させるように導いた。

1996 年 4 月 26 日の党中央委員会宣伝扇動部、文学・芸術部門の責任幹部への談話『**文学・芸術部門でより多くの名作を創作しよう**』において、今日党が求める名作は、金日成主席の遺志がこもっている赤旗の精神と「苦難の行軍」精神、明日のための今日を生きようという革命的人生観を具現した作品であるとして、時代が求める名作の創作・普及において提起される原則的問題を明示した。そして、人民軍が革命的文学・芸術の創造と普及において先頭に立つよう導いた。

そうして、勲功国家合唱団、朝鮮人民軍 4・25 劇映画撮影所をはじめとする人民軍の芸術団体が党の指導に従ううえで先頭に立つ戦闘的な芸術部隊として強化され、それを模範として見習って映画、音楽、舞踊、美術、舞台芸術など文学・芸術のすべての分野で創作的高揚が起こり、文学・芸

術活動の大衆化も力強く進められた。

総書記は、国のスポーツ活動と保健医療事業を発展させ、生産文化と生活文化を確立することにも深い関心を払った。

(8)

金正日総書記は、祖国統一の 3 大憲章の旗の下に国の統一を実現するために全力を尽くした。

総書記は、金日成主席の祖国統一の思想と理論を祖国統一の 3 大憲章として定式化した。

1996 年 11 月 24 日に板門店にある金日成主席の祖国統一親筆碑を見た際の教示と、1997 年 8 月 4 日に発表した古典的著作『**偉大な領袖金日成同志の祖国統一遺訓をあくまで貫こう**』において、主席が示した祖国統一の 3 大原則、全民族大団結 10 大綱領、高麗民主連邦共和国創立方案を祖国統一の 3 大憲章として定式化し、それを実現するための原則的立場と方途を明示した。

そして、祖国統一偉業を実現するための朝鮮労働党の原則的立場は、国の統一をあくまでも民族自主の原則に基づき、武力行使ではなく平和的方法で、連邦制方式に基づいて実現することであると今一度明らかにした。

また、北南関係を改善し、祖国統一の画期的局面を開く方途は、南朝鮮当局者が外部勢力に依存し、外部勢力と共助するのでなく、民族自主の立場に立って同族と力を合わせて外部勢力を排撃する道に進み、北南間の政治的・軍事的対決状態を終わらせ、南朝鮮の社会政治生活が民主化されることであると指摘した。

1998 年 4 月 18 日、歴史的な南北朝鮮政党・社会団体代表者連席会議 50

周年記念中央研究討論会に送った書簡**『全民族が大団結して祖国の自主的平和統一を成し遂げよう』**において、民族の大団結はあくまでも民族自主の原則に基づくべきであり、愛国・愛族の旗、祖国統一の旗の下に全民族が団結して北南間の関係を改善し、外部勢力の支配と干渉に反対し、外部勢力と結託した民族反逆者、反統一勢力に反対して闘い、北と南、海外の全民族が互いに来往し接触して対話を発展させ、連帯・連合を強めることを基本内容とする民族大団結5大方針を提示した。

総書記は、民族の大団結を実現するための闘争を積極的に推し進めた。

まず、北と南の来往と接触、協力と交流を通じて民族的団結をさらに強めるために、文益煥(ムンイクファン)牧師の夫人や南朝鮮の現代グループの名誉会長鄭周永(チョンジュヨン)とその一行など、南朝鮮の各階層の人士が平壌を訪問できる道を開き、彼らと会見した。そして、1998年には、民間級統一運動団体として民族和解協議会(民和協)と民族経済協力連合会(民経連)を結成して、北南間の民間級対話と来往、協力、交流も活発に行うようにした。

また、金日成主席の逝去という民族最大の痛恨事に見舞われた中でも計画されていた第5回汎民族大会を予定通り開催するようにし、第6回、第7回、第8回、第9回汎民族大会も分裂主義勢力の反統一策動を粉砕し、成功裏に行われるようにして北と南、海外の3者連帯・連合を実現させるようにした。

総書記は、海外朝鮮人運動を新たな高い段階へと発展させるようにした。

1995年5月24日、在日本朝鮮人総聯合会（総聯）結成40周年に際して総聯と在日同胞に送った書簡**『在日朝鮮人運動を新たな高い段階へ発展させるために』**において、在日朝鮮人運動を新たな高い段階へ発展させるための課題と方途を示した。

1995年3月、総書記は、総聯の活動家と同胞、特に3、4世代の同胞に対

する教育を強化して、彼らが代を継いで総聯の愛国事業を立派に継承するよう強調し、社会主義祖国を訪れた朝鮮大学校の学生たちや朝青（在日本朝鮮青年同盟）の活動家にたびたび会った。

また、1995 年 7 月には総聯内に青年商工人の組織を結成すべきであるとし、「在日本朝鮮青年商工会」（青商会)が結成された後には、青商会の活動家を祖国に呼び寄せて彼らを励まし、青商会の活動を一層活性化するための方向を示した。

そして、総聯の活動家の代がかわっている状況の下で、総聯隊伍の思想・意志の団結を強め、特に、総聯中央常任委員会の責任幹部が思想的団結を成し遂げ、互いに尊重し、総聯の活動において提起される問題を真摯に協議して見解の一致を見るようにすることに大きな力を入れた。

1995 年 7 月中旬、総書記は、総聯第 17 回全体大会を契機に、変化した現実と世代交替の要求に即して総聯が同胞大衆との活動を大きなスケールで幅広く行うように導いた。また、党創立 50 周年と金日成主席の生誕 85 周年を迎えて、総聯の支部委員長たちで構成された総聯活動家代表団に会って支部の活動を発展させるための課題を示し、総聯の基層組織である支部を強化するよう強調した。

総書記は、日本と南朝鮮当局が反総聯謀略策動の一環として「参政権」策動を行っていた 1996 年 6 月、「参政権」策動の本質をあばき、それを粉砕するための方途を示した。そして、その後にも数回にわたって、祖国を訪問した総聯の代表団や訪問団に会い、日本と南朝鮮当局の反総聯策動を粉砕するよう強調した。

総書記は、総聯の強化・発展のために一生をささげた老世代の幹部を在日朝鮮人運動に功労のある老革命家、元老として押し立て、総聯結成 40 周年に際して平壌軽工業大学を韓徳銖（ハンドクス）平壌軽工業大学と命名するようにし、

韓徳鉄議長の 90 歳の誕生日には自ら祝電と贈り物を贈った。

また、総聯と在日同胞が祖国に寄贈したすべての対象に、彼らの愛国的行為が末長く伝えられるように、同胞の名や「愛国」を冠して呼ぶようにした。

そして、総聯の民族教育の発展のために、国の経済状況が困難を極めていた時にも毎年、巨額の資金を教育援助費と奨学金として送り、1995 年 1 月、兵庫県をはじめとする近畿地方で大地震が発生した時には即時に慰問電と多額の慰問金を送るようにした。

総書記は、全般的な海外朝鮮人運動をチュチェの革命偉業に真に奉仕する民族的愛国運動として発展させるために力を尽くした。

そのために、朝鮮人の住むすべての国と地域に同胞組織を結成するための活動を活発に展開して、1995 年 2 月に発足した在中朝鮮公民総連合会を、発展する現実の要求に即して 1998 年 4 月に在中朝鮮人総連合会に発展させ、1997 年 9 月には国際高統連（国際高麗人統一連合会）の下部組織として極東高統連（極東高麗人統一連合会）を結成するようにした。

総書記は、海外同胞が民族至上の課題である祖国統一のための闘争に立ち上がるようにし、金日成民族の一構成員としての高い民族的誇りを抱いて民族性を固守し、社会主義祖国を擁護し、祖国の富強・発展のために奮闘するように導いた。

(9)

金正日総書記は、古典的著作を発表して社会主義偉業の遂行において提起される理論的・実践的問題を全面的に解明した。

1994 年 11 月 1 日、総書記は、朝鮮労働党中央委員会機関紙『労働新聞』に論文**『社会主義は科学である』**を発表した。

金正日総書記は次のように述べている。

「わたしは社会主義に反対する帝国主義者と反動勢力に打撃を加え、人民に社会主義は必ず勝利するという信念を抱かせるために、『社会主義は科学である』という論文を発表しました。この論文には、社会主義の科学性と真理性が明らかにされています」

論文で総書記は、多くの国で社会主義は挫折したが、科学としての社会主義は依然として諸国人民の心の中に生きているとし、社会主義は日和見主義によって一時心痛に耐えない曲折を経てはいるが、その科学性と真理性によって必ず再生し、最終的勝利を収めるであろうと言明した。そして、社会主義の科学性と真理性、社会主義を固守し前進させるうえでの原則的問題を全面的に明示した。

まず、人民大衆の自主性は社会主義によって実現するとし、個人主義に基づく社会が人間本来の要求である集団主義に基づく社会、人間の自主的本性にかなった最も先進的な社会である社会主義へと移行するのは歴史発展の必然的要求であることを明らかにした。

また、人間に対する最も正確な主体的観点と立場に基づいていることに朝鮮の社会主義の科学性と真理性があるということを解明した。

そして、朝鮮の社会主義は人民大衆に対する主体的観点と立場に基づいているがゆえに、人民大衆に絶対的に支持され信頼される、最もすぐれた威力ある社会主義であることを明らかにした。

論文の最後の部分で、人間本位の社会主義、人民大衆中心の社会主義は最も科学的で最もすぐれた、最も威力ある社会主義であるとし、社会主義はその科学性と真理性によって必ず勝利すると強調した。

総書記は、チュチェ思想に基づいて社会主義運動を再建するための革命的党と人民の闘争を積極的に鼓舞激励し、誠心誠意支援するようにした。

こうして、チュチェの社会主義思想・理論が集大成された古典的著作が大々的に出版・普及された。そして、1995 年 2 月にデンマークの首都コペンハーゲンで、1996 年 2 月にはロシアの首都モスクワで、同年 4 月にはエクアドルのクエンカでチュチェ思想の信奉者の国際的な討論会が行われた。

総書記は、社会主義のために闘う多くの国に朝鮮労働党代表団を派遣して彼らの闘争を誠心誠意支援するようにした。また、各国の政党の指導者や個々の人士を朝鮮に招いて、チュチェ思想が具現された社会主義の現実を目の当たりに見るようにするとともに、助言も与えた。

1997 年 6 月 19 日、総書記は古典的著作**『革命と建設において主体性と民族性を固守するために』**を発表して、帝国主義者の「グローバル化」、「一体化」策動を粉砕し、国と民族の自主性を固守するための思想的・理論的武器をもたらした。

そして、バンドン会議 40 周年行事が、非同盟運動の発展に尽くした金日成主席の指導業績を輝かせ、いかなるブロックにも加わらず、自主的に進むこの運動の根本原則を固守し、統一団結を示威する重要な契機となるようにした。また、1995 年 10 月にコロンビアで行われた第 11 回非同盟諸国首脳会議と 1998 年 9 月に南アフリカで開かれた第 12 回非同盟諸国首脳会議が、この運動の根本理念と根本原則に基づいて行われるようにした。

総書記は、アメリカをはじめとする帝国主義者の「ワッセナー協約」と「東北アジア安保対話フォーラム」策動を粉砕し、反帝的で自主的かつ革命的な国に対する帝国主義者の干渉と圧殺策動に反対して断固闘うようにした。

8

1999 年 1 月～2011 年 12 月

(1)

金正日総書記は、社会主義強国建設に転換をもたらすという路線を打ち出した。

総書記は、1994 年 12 月 31 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**金日成同志の遺志を継いで、わが国、わが祖国をさらに富強にしよう**』と、1995 年 1 月 1 日に新年を迎える全人民に送った親筆書簡で、富強な祖国を建設するという自分の意志と決心を内外に明らかにした。そして、人民経済各部門の活動を現地で指導し、経済建設と人民生活の向上において新たな飛躍を遂げるための土台を築くようにした。

1999 年 1 月 1 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**今年を強盛大国建設への偉大な転換の年として輝かそう**』、2000 年 1 月 1 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**社会主義強盛大国の建設において決定的な前進を遂げるために**』をはじめとする多くの著作で、総書記は社会主義強国建設に転換をもたらすという路線を打ち出した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれが言う強盛大国とは、社会主義強盛大国です。国力が強く、すべてが栄え、人民が満ち足りた生活を営む国が、社会主義強盛大国です」

総書記は、人民大衆の自主的要求と利益を擁護し具現すること、革命と建設において主体性と民族性を具現することを社会主義強国建設の根本原則として、思想重視、銃剣重視、科学技術重視の路線を社会主義強国建設

の戦略的路線、三つの柱として打ち出した。

そして、社会主義強国を建設するためには、社会主義祖国の政治的・思想的陣地を打ち固めて、国防力を強化することに引き続き大きな力を入れ、社会主義経済建設を強力に推し進めて朝鮮を経済強国にし、教育、保健医療、文学・芸術をはじめとする社会主義文化建設のすべての分野を全面的に発展させなければならないと述べた。

社会主義強国を建設するためにはまた、党の指導の下に一心団結の威力を余すところなく発揮し、人民大衆の不屈の精神力と愛国心を高く発揚し、現代的科学技術に基づく自力更生の革命精神を強く発揮しなければならないと指摘した。

(2)

金正日総書記は、1990 年代の中ごろ新たに示した先軍思想を深化・発展させるための精力的な思想・理論活動を展開した。

総書記は 2001 年 7 月 5 日、古典的著作**『わが党の先軍政治は強力な社会主義政治方式である』**を発表して先軍思想を深化・発展させた。

この著作では、まず、銃剣によって朝鮮革命を切り開き、前進させてきた金日成主席の革命活動史を総括し、それに基づいて朝鮮労働党は主席の軍事重視思想を今日の現実的条件に即して一つの政治方式として深化・発展させたと明言した。

そして、わが党の先軍政治は、人民軍を無敵必勝の強兵にして祖国を守り、人民軍を中核とし手本として革命の主体を打ち固め、人民軍を革命の柱として社会主義建設全般を力強く推し進めていく政治方式であると指摘した。

2003 年 1 月 29 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『先軍革命路線はわれわれの時代の偉大な革命路線であり、朝鮮革命の百戦百勝の旗印である』**において、総書記は、革命の主力部隊に関する独創的な解明を行い、革命的軍人精神の地位と役割、先軍政治の性格を明示した。

この談話では、まず、時代の発展と変化した社会・階級関係を深く分析し、それに基づき、党が人民軍を革命の主力部隊として押し立てたのは、革命の主力部隊に関する問題、革命と建設における革命軍隊の役割の問題に対する新しい見解、新しい観点に基づいていることを論証した。

そして、党の指導の下に人民軍で創造され、余すところなく発揮されている革命的軍人精神は、領袖決死擁護の精神、決死貫徹の精神、英雄的犠牲精神を基本とする人民軍の高潔な革命精神であり、革命と建設で奇跡を起こし、偉勲をとどろかせる最も革命的で戦闘的な思想的・精神的武器であると言明した。

また、先軍政治の革命的性格は、帝国主義反動勢力のあらゆる侵害から人民大衆の自主的要求と利益、国と民族の自主権と尊厳を固守し保証する原則的で正義に徹した反帝・自主の政治であり、崇高な愛国、愛族、愛民の政治であると指摘した。

2007 年 4 月 18 日の党および軍隊の責任幹部への談話**『偉大な先軍の旗を高く掲げ、金日成同志の偉業、チュチェの革命偉業を成功裏に完成させていこう』**において、総書記は、先軍政治の根本的基礎、先軍政治の柱について明示した。

この談話で総書記は、革命の銃剣の上に人民大衆の自主偉業、社会主義偉業の勝利があり、国と民族の富強・繁栄があるということはチュチェ思想によって明らかにされ、歴史によってその真理性が実証された革命の原理であり法則であると明言した。

そして、革命的軍人精神を先軍政治の根本的基礎として定式化し、チュチェの革命的党と無敵必勝の革命武力、革命隊伍の一心団結を先軍政治の柱、チュチェの革命偉業の強力な推進力と規定した。

この他にも多くの著作と教示で、先軍指導体系と指導芸術、先軍革命の原則と先軍政治の目的を明示した。

総書記は、精力的な思想・理論活動によって先軍思想を深化・発展させ、それに基づき先軍思想の構成体系を先軍革命の原理と先軍革命の原則、先軍政治理論として体系化した。

(3)

金正日総書記は、金日成主席の生誕 90 周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えるための活動を賢明に導いた。

2001 年 6 月、朝鮮では朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議常任委員会、朝鮮民主主義人民共和国内閣の共同決定書「偉大な領袖金日成同志の生誕 90 周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えることについて」が採択され、すべての単位でそれを貫徹するための大衆集会や決起集会が開かれた。そして、主席を描いたポスターがつくられるとともに、「偉大な領袖金日成同志の生誕 90 周年を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えよう！」、「偉大な領袖金日成同志を千年万年高く戴こう！」など、4 月の祝日に際する党のスローガンが制定された。

総書記は、2002 年 1 月 1 日、党機関紙、軍機関紙、青年同盟機関紙に共同社説「金日成同志の生誕 90 周年を迎える今年を強盛大国建設の新たな飛躍の年として輝かせよう」を掲載して、全人民が 4 月の祝日を最も盛大に、

かつ意義深く慶祝するための活動にこぞって立ち上がるようにした。

総書記は、全人民の高い熱意に依拠して、社会主義建設のすべての部門で新たな革命的高揚を起こすよう導いた。

まず、黄海南道の耕地整理と价川—台城湖間の用水路工事を 2002 年の農繁期の前に完了し、軽工業製品の生産を増やすとともに食の問題を解決して、朝鮮を何不自由なく暮らせる国にしようとした金日成主席の遺訓を貫徹するように導いた。そして、2001 年 11 月には、各級党委員会が共同決定書貫徹のための活動状況を中間総括し、その単位の幹部と勤労者が主席の生誕 90 周年までの決意目標を間違いなく達成するよう極力助けるようにした。

こうして、黄海南道の耕地整理が完了し、大同江ビール工場が建設されて操業を開始するなど、主席の生誕 90 周年に贈る数多くの勤労の成果がもたらされた。

総書記は、主席の生誕 90 周年を迎えて、その不滅の革命業績を永遠に輝かせていくための事業を賢明に指導した。

まず、主席の著作と主席の不滅の革命活動史と業績を収録した図書をより多く編纂・発行するようにした。そうして、『金日成全集』(第 41～第 46 巻)、図書『偉大な領袖金日成同志伝記』(第 4、5 巻)、『抗日武装闘争史』(第 1、2 巻)、回想実記集『人民とともに』(62 巻)など、数多くの著作と図書が出版され、偉大性教育に大いに寄与した。

また、白頭山地区を革命の聖地にふさわしく立派に整え、「解放の千里の道」・价川革命史跡地と清津市羅南区域に主席の銅像を建て、平壌紡織工場や万景台養鶏工場などに革命事績碑や標識碑を建てるようにした。

総書記は、金日成主席の生誕 90 周年慶祝行事を盛大に行うように導いた。

金日成主席生誕 90 周年記念全国チュチェ思想討論会、中央報告大会など

多彩な政治・文化行事を催して、全国に主席への欽慕と称賛の熱気が満ちるようにした。

平壌では金日成主席と党の業績に関する世界各国の政党による討論会とチュチェ思想国際研究所理事会執行委員会第9回会議、第20回4月の春親善芸術祭が行われた。

主席の生誕90周年に際して、数多くの国の国家元首と110余の進歩的政党から祝電や手紙、花かご、贈り物などが寄せられ、世界の数十の国で太陽節（金日成主席の誕生日、4 月 15 日）慶祝準備委員会が組織され、280余の記念集会や講演会、討論会、映画鑑賞会、図書および写真展示会、芸術公演など多彩な政治・文化行事が盛大に催された。

(4)

金正日総書記は、党をチュチェの革命偉業の導き手として強化・発展させるための活動を賢明に指導した。

まず、党組織の戦闘的機能と役割を全面的に強めるようにした。

そのために、党の中核であり根幹である幹部の陣容を党と領袖の指導に忠実に従う人で固め、人民軍で鍛えられ、専門技術を身に付けた人を幹部に登用するようにした。また、領袖決死擁護の精神に徹しており、実際の闘争で功労のある人を厳選して党に受け入れる原則を厳格に守るようにした。

総書記は、2004年8月に朝鮮労働党第8回組織活動家大会と全国党組織活動家講習を、2007年10月には朝鮮労働党第3回細胞書記大会を開き、これらを契機に党組織の機能と役割を一段と強めるようにした。

総書記は、社会主義建設のための総攻撃戦において幹部と党員と勤労者の精神力を最大限に発揮させることに党の思想活動の力点を置いた。

2001 年 9 月、先軍政治、先軍革命指導に関する中央文化芸術部門模範問答式学習コンテストを指導した総書記は、今回の問答式学習コンテストの成果と経験を十分に生かし、わが党が示した独特で優れた問答式学習コンテストを大いに発展させるべきだと強調した。そして、2002 年 10 月には、先軍政治の偉大さと正当性を幅広く、かつ深く解説・宣伝することを党の思想活動の総体的方向、基本課題とし、すべての宣伝・鼓舞活動を先軍思想で一貫させ、先軍政治の宣伝に服従させるようにした。また、2003 年 5 月 7 日に**「わが党の栄えある先軍革命思想万歳！」**というスローガンを提示し、2008 年 4 月には、先軍思想についての原理教育を先行させ、チュチェの旗を高く掲げて百戦百勝をとどろかせてきた党の先軍革命実録による教育に力を入れるようにした。

2000 年 3 月、白頭山地区の革命戦跡を現地で指導した総書記は、革命伝統教育を強化するための社会的雰囲気をつくり出すことについて強調した。そして、全国各地の革命戦跡や革命史跡を訪ね、革命戦跡、革命史跡をよく整備しそれを通じての教育を強化するようにした。

また、2002 年 11 月 25 日に主席の革命活動史の学習を強化するための措置を講じ、2003 年 9 月には、金日成同志革命思想研究室の名称を金日成主義研究室と改称し、主席の革命思想の学習をさらに深めるようにした。そして、2008 年 7 月 30 日には、朝鮮革命博物館創立 60 周年を迎えて、革命事績を通じての教育に力を入れるよう強調した。

2006 年 12 月 20 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『社会主義教育を強化することはわれわれの時代、朝鮮革命の切実な要求である』**において、総書記は、社会主義教育を強化するうえでの原則的問題を明示し、幹部と党員と勤労者の間で社会主義に対する信念を持たせる教育と社会主義防衛精神で武装させる教育、社会主義的愛国主義教育を強化すべきであると指摘した。

総書記は、時代と革命発展の要求に即して党の思想活動の形式と方法を革新するよう導いた。

総書記は、全党、全人民が徹底した領袖決死擁護の精神を持ち、領袖の周りに思想・意志、道徳・信義のうえで一層固く結束するようにした。

2000 年 1 月 1 日の党中央委員会の責任幹部への談話で、総書記は、全人民がいつどこにいても党を固く信じて従い、党と生死を共にするようにしなければならないとし、革命歌劇『党の真の娘』の中の歌謡**『懐かしき将軍はいずこに』**に反映されている領袖への信頼、領袖決死擁護の精神を見習うべきであると述べた。

そして、すべての幹部と人民が革命の指導者に清らかな良心と信義をもって忠誠を尽くした金策同志と党の基礎構築時期の活動家のように生き、闘うよう強調し、全人民が党の周りに思想・意志、道徳・信義のうえで一層固く結束して、党の思想と指導に忠実に従うようにした。

総書記は、革命的同志愛に基づく革命隊伍の一心団結をさらに強めるように導いた。

2002 年 2 月、『同志愛の歌』についての意義深い教示を与えて、この歌が永遠なる闘争の進軍歌となるようにし、党員と勤労者がこの歌に込められている崇高な意を体し、実際の活動に具現するようにした。

2004 年 4 月 7 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『革命的同志愛は一心団結の基礎であり、朝鮮革命の推進力である』**で総書記は、革命的同志愛に基づく党と人民大衆の一心団結を強めるための指導指針を示し、革命戦士への偉大な同志愛によってこの地に心温まる光景を現出した。

総書記は、党の仁徳政治を具現して、すべての人が心から党の周りに固く結束するようにした。

そして、すべての幹部が人民的活動作風を体得して、人民から「われら

の」と呼ばれる人民の真の奉仕者となるように導いた。

また、党組織と党活動家が民心を把握し、対人活動を正しく行って人民を党の周りに固く結束させるようにした。2010 年 12 月 1 日の党中央委員会の責任幹部への談話では、すべての幹部が党の大衆路線を貫徹しなければならないと強調した。

総書記は、帝国主義者と反動勢力の思想的・文化的浸透策動と心理謀略戦を粉砕するための闘争を展開して、ブルジョア思想と生活風潮の些細な要素もわれわれの内部に浸透できないようにした。

総書記は、人民政権機関の機能と役割を強めるようにした。

そのために、勤労者に対する順法教育を強化し、全社会に順法気風を確立して、社会のすべての人が国家の法を重んじ、社会共同の生活規範と崇高な社会主義的生活様式の通りに働き生活するよう強調し、2007 年 2 月には全国法務活動家大会の参加者に書簡を送り、社会主義順法生活を強化するための綱領的指針を与えた。そして、人民保安機関が党の政治防衛者、階級の第一線防衛隊としての使命と役割を果たすよう強調し、2010 年 1 月 23 日には新しく建設された法廷と中央裁判所の庁舎を見て回り、人民民主主義独裁を強化するうえで裁判機関がその役割を立派に果たすべきであると指摘した。

特に、2008 年 9 月 5 日、党機関紙『労働新聞』と政府機関紙『民主朝鮮』に寄せた談話**『朝鮮民主主義人民共和国は不敗の威力を持つチュチェの社会主義国家である』**において、人民政権機関と活動家が時代と革命発展の要求に即して活動気風と活動方法を改善して自分の使命と任務を立派に果たし、人民の奉仕者としての本分を尽くすよう強調した。

総書記は、青年重視の思想を一貫して堅持し、青年同盟の役割を強めるようにするとともに、職業同盟と農業勤労者同盟、女性同盟の活動を改善することにも大きな力を入れた。

(5)

金正日総書記は、人民軍を強化するための活動を賢明に指導した。

2000 年 1 月 1 日をはじめとする多くの機会に、総書記は、人民軍内に最高司令官の命令に一体となって動く革命的軍紀を確立するよう強調した。

総書記は、人民軍の政治的・思想的威力を強化するようにした。

2003 年 1 月 2 日、人民軍が領袖決死擁護のスローガンを高く掲げていくべきであると指摘し、同年 3 月には、平壌で朝鮮人民軍呉仲洽第 7 連隊称号獲得運動熱誠者大会を開催し、人民軍軍人を領袖決死擁護の銃弾・爆弾に鍛え上げ、思想教育を強化して彼らを思想と信念の強者に育て上げるようにした。

2000 年には、全軍的な政治活動家の講習と会議を開いて、火線式政治活動の要求通りに宣伝・鼓舞活動を軍隊らしく戦闘的に行い、人民軍新聞の発行部数を増やし、卓上教育カードをすべての中隊に配布して広く利用させるなど、人民軍内の党の政治活動の形式と方法に根本的な改善をもたらすようにした。

また、**「人民を助けよう！」**、「全軍が一つの同志になろう！」というスローガンの下に、全軍が官兵一致、軍民一致の美風を一層強く発揮するようにした。

総書記は、人民軍の軍事技術的威力を強化するようにした。

全軍に白頭の訓練熱風を巻き起こすために、指揮官、参謀部の訓練に第一の関心を払い、各級の指揮官と参謀部のメンバーの軍事的資質と指揮能力を高めるようにした。また、軍人の間で実戦訓練と同時に行軍と射撃、地形熟達訓練を強化することに大きな力を入れるようにした。そして、各

軍種、兵種の実動訓練を現地で指導して、人民軍の戦闘力を一段と高めた。

総書記は、中隊を全軍強化のキーポイントとみなし、人民軍の幹部が中隊に日常的に出向いて助けることを制度化するようにした。

そして、1999 年 2 月に朝鮮人民軍中隊長大会を開き、大会の参加者に金日成主席が 1973 年 10 月 11 日に行った演説『**人民軍の中隊を強化しよう**』の録音を聴取させ、2002 年 10 月には、朝鮮人民軍中隊青年同盟初級団体書記熱誠者会議の参加者に書簡を送った。

総書記は、部隊の指揮・管理を改善し、軍紀を確立するために、部隊内に厳格な命令・指揮体系を打ち立て、指揮官の責任感と役割を決定的に強めるようにした。

また、軍人の食生活を改善し、軍隊生活で提起される問題を円滑に解決するとともに、文化・情操生活にも深い関心を払い、彼らが軍務生活を楽しく過ごせるよう導いた。

総書記は、人民軍が社会主義建設の主要部門で突破口を開き、絶えず奇跡と革新を起こすようにし、強国の面貌にふさわしい生活文化を確立するうえでも、革命の柱であり社会主義建設の先鋒隊である人民軍をその先頭に立たせ、軍隊で創造された軍人文化の手本を社会に一般化させるようにした。

総書記は、全社会に軍事重視の気風を確立するようにした。

総書記は、全人民武装化を高い水準で実現するため、民間武力を打ち固めて訓練を強化する一方、戦闘動員の準備に万全を期するようにした。特に、2009 年 2 月 4 日の民間防衛部門の幹部への談話で、労農赤衛軍をはじめとする民間武力を、党の革命的武力、最高司令官の武装隊伍としての政治思想的・軍事的風貌と資質を備えた真の革命武力として強化・発展させるための課題を示し、それを貫徹するよう導いた。

また、後方の要塞化を完成し、主要な工場をはじめ各種の対象を保護する対策を立てるとともに、世界的な兵器発展の趨勢に即して国土全体の要塞化水準を引き続き高め、民間防空対策に万全を期することによって国土全体の要塞化を高い水準で実現するようにした。

2002 年 11 月、総書記は、全国軍支援美風熱誠者大会を開催し、これを契機に全国に軍支援の熱風が巻き起こるようにした。

総書記は、国防工業を全面的に強化することに引き続き大きな力を入れた。

まず、軍需工業部門の従事者が君子里精神を呼び起こし、その精神で働くようにし、そのための具体的な措置を講じた。

そして、世界の国防科学技術発展の趨勢に即して国防科学技術を急速に発展させ、特に、日ごとに激化するアメリカ帝国主義の反共和国孤立・圧殺策動に対処して核技術の発展に深い関心を払い、そのための事業を指導した。

そうして、2003 年 1 月 10 日に核不拡散条約からの完全脱退に関する朝鮮民主主義人民共和国政府の声明が、2005 年 2 月 10 日には核兵器保有に関する朝鮮民主主義人民共和国外務省の声明が発表された。朝鮮の科学者と技術者は自らの力と技術によって、2006 年 10 月と 2009 年 5 月の 2 度にわたる地下核実験を成功裏に行い、2010 年 5 月には核融合反応を成功させた。

(6)

金正日総書記は、2002 年 9 月 5 日の教示と 2003 年 8 月 28 日の党・国家経済機関の責任幹部への談話『**党が示した先軍時代の経済建設路線を確実に貫徹しよう**』において、先軍時代の経済建設路線を提示した。

先軍時代の経済建設路線は、国防工業を優先的に発展させながら、同時

に軽工業と農業を発展させることである。

総書記は、国防工業を優先的に発展させることに主力を注ぐようにした。

そのために、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会の共同決定書を示達し、軍需生産の正常化と軍需品の品質向上を国防工業部門の第一の課題として提示した。

そして、国防工業を自国の原料と資材に徹底的に依拠し、自国の実情に即して自らの力と技術に基づく自立的国防工業として発展させる一方、軍需工業の近代化を実現するための闘争を賢明に指導した。

総書記は、軽工業と農業を同時に発展させ、人民生活をさらに向上させるようにした。

まず、軽工業部門の工場の近代化を推し進め、人民生活に切実に必要な一次消費財をはじめ、人民の需要に応じた各種の一般消費財の生産を増やし、その質を高めるようにした。

2003 年 5 月 21 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**わが党の農業革命方針を貫徹することについて**』をはじめとする多くの著作で、総書記は、党の農業革命方針の内容とそれを貫徹するうえでの原則的問題を明示した。

そして、チュチェ農法の要求通りに適地適作、適期適作の原則を守り、種子革命とジャガイモ栽培革命を推し進め、二毛作に転換をもたらし、耕地整理と農業の水利化をより高い水準で完成するようにした。また、近代的な畜産拠点と養魚拠点の構築にも大きな力を入れた。

総書記は、経済管理において社会主義の原則と実利主義の原則を具現するよう指導した。

2001 年 10 月 3 日と 2008 年 6 月 18 日の党・国家経済機関の責任幹部への談話で、経済管理において堅持すべき「種子」は、社会主義の原則を固守しながら、最大の実利が得られる経済管理方法を開発することだと指摘し

た。そして、工場を一つ建て、経済活動を一つ展開するにしても、必ず社会主義の原則と実利保障の原則を具現し、その質を最高の水準のものにするようにした。

総書記は、新たな革命的大高揚ののろしを上げて全人民を奮起させた。

総書記はチョンリマ製鋼連合企業所に、UHP 電気炉と取瓶精錬炉を共和国創建 60 周年までに建設する課題を与え、2008 年 12 月 24 日には同企業所を訪れ、新たな革命的大高揚ののろし、降仙ののろしを上げるようにした。

そして、2009 年 1 月 1 日、新年の共同社説を発表するようにし、2 月 26 日には、すべての党員に新たな革命的大高揚を起こすうえで捉えていくべき闘争目標と方向、戦闘的課題を示した。また、人民軍部隊と人民経済各部門の活動を現地指導して、降仙ののろしが全国に激しく燃え広がるようにした。

2009 年 3 月 28 日と 4 月 1 日、党中央委員会の責任幹部に「150 日間戦闘」と「100 日間戦闘」を行うように指示し、党と行政・経済部門の活動家で指導グループを組織して下部に派遣し、彼らが指導を正しく行うようにした。そして、2009 年 6 月 25 日、党・軍隊・国家経済機関の幹部への談話で、金日成民族の偉大な精神力を一層強く発揮させるための課題と方途を示した。

戦闘期間、総書記は人民経済各部門の活動を現地で指導し、4 大先行部門をはじめとする経済建設全般において新たな革命的大高揚の炎が燃え上がるようにした。

そうして、戦闘期間に、城津製鋼連合企業所でチュチェ鉄の生産システムが確立され、熙川(ヒチョン)発電所の建設現場で時代を代表し象徴する「熙川速度」が生まれ、人民経済のすべての部門、すべての単位が戦闘課題を超過遂行した。

総書記は、「150 日間戦闘」と「100 日間戦闘」を勝利のうちに締めくくっ

たその気勢で社会主義強国の大門を開くための最後の突撃戦を力強く繰り広げるようにした。

　そのために、熙川発電所の建設の現場に何度も出向き、「一気に」という攻撃精神と気概をもって10年以上かかるといわれていた大規模動力拠点の建設をわずか3年間で終えるという奇跡的な成果を上げるようにした。

　総書記は、新世紀の産業革命ののろし、咸南の火の手を上げて、経済強国の建設で驚異的な出来事が次々と起こるようにした。

　そうして、CNC工作機械生産のモデル工場が完成して、最先端CNC設備を生産するようになり、人民経済の主要部門でも近代化が実現された。

　総書記は、毎年何度も咸鏡（ハムギョン）南道を現地指導して、2・8 ビナロン連合企業所で16年ぶりにビナロンの生産を正常化させ、興南（フンナム）肥料連合企業所でチュチェ肥料の大量生産を実現させた。そして、竜城機械連合企業所に先軍鋳鉄工場と先軍コンプレッサー職場を建設し、大興（テフン）青年英雄鉱山と端川（タンチョン）マグネシア工場でマグネシアクリンカー工業のチュチェ化、近代化を実現し、端川港の建設で世間を驚嘆させる奇跡と革新を起こすようにした。

(7)

　金正日総書記は、金日成主席の生誕100周年を迎えて、軽工業と農業生産に力を集中して人民生活の向上に画期的転換をもたらすための活動を賢明に指導した。

　金正日総書記は次のように述べている。

「人民生活の向上を最大の大事、最高の闘争目標とし、最後まで推し進めるというのは私の確固たる立場であり決心です」

　総書記は、軽工業を発展させて一般消費財の問題を解決するようにした。

2009年4月、三日浦（サムイルポ）特産物工場で食品工業発展の火の手を上げるようにし、その模範を全国に一般化させた総書記は、軽工業部門の工場、企業を現地指導して、軽工業部門の工場の近代化を推し進め、人民に好評を得る人気商品、どこに出しても遜色がない、世界的な競争力を持つ一般消費財を大量に生産するようにした。また、2･8ビナロン連合企業所をはじめとする化学工業部門を盛り立てて、軽工業の原料、資材を十分に生産・供給するようにした。

2010年11月には、昌城郡を現地指導して地方工業発展の火の手を上げ、会寧（ヘリョン）や満浦（マンポ）、江界のように、すべての市、郡がそれぞれの実情に即して地方工業工場の技術改造を着実に推進し、原料源を総動員して生産を増大させるようにした。

また、2010年8月3日には咸鏡南道一般消費財展示場を見て回り、8･3一般消費財生産運動を一層力強く推し進めるように指示した。

2009年4月8日の党・国家経済機関の責任幹部への談話**『穀物生産で革新を起こして食糧問題を解決するのは現段階の社会主義経済建設で提起される最も切実な課題である』**と、2011年1月28日の党・国家経済機関の責任幹部への談話で、農業に力を総集中・総動員して穀物生産で大革新を起こす課題を示した。

そして、沙里院（サリウォン）市嵋谷（ミゴク）協同農場と載寧郡三支江（サムジガン）協同農場、竜川（リョンチョン）郡新岩（シンアム）協同農場、泰川（テチョン）郡銀興（ウンフン）協同農場、咸州（ハムジュ）郡東峰（トンボン）協同農場が社会主義的競争を展開するようにし、すべての農場がこれらの単位を模範として見習って穀物のヘクタール当たり生産量を一段と高めるようにした。

また、農業部門に対する国家的投資を増やし、すべての部門、すべての単位が農作に必要な設備と資材を営農工程に先立って優先的に提供し、農村に対する勤労支援を強化するようにした。

総書記は、新たに築かれた家禽および畜産基地がその能力を最大限に発

揮するようにさせる一方、大同江果樹総合農場を国のモデル果樹農場として立派に建設し、多くの果樹農場を現地指導して果物の生産を増やすようにした。そして、多くの養魚場を現地指導して、人民が実際にその恩恵をこうむるようにした。

総書記は、人民の住宅問題を円滑に解決するために、万寿台通りをモデル住宅街として完成させるようにした。

2007 年 12 月 27 日、新たに建設する万寿台通りの住宅形成模型を見た総書記は、街の形成、住宅の内部を最高の水準のものにするようにと指示した。

そして、強力な建設集団を動員するとともに、工事で提起される問題をすべて解決するよう取り計らった。こうして、近代的な住宅が立ち並ぶ万寿台通りは 1 年 2 カ月という短期間で完成を見た。

2009 年 10 月 20 日、完成した万寿台通りの住宅を見て回った総書記は、首都建設部門の幹部と建設者が 1950 年代の「平壌速度」の創造者や 1970 年代～1980 年代の「平壌繁栄期」の開拓者のように、新世紀の首都建設において新たな「平壌速度」を生み出し、「平壌繁栄期」を再現するよう呼びかけた。

総書記は、金日成主席の生誕 100 周年を迎えて倉田（チャンジョン）通りの住宅建設を提唱し、住宅建築形成案を何度も検討しては、最高の水準で建設するよう強調し、2011 年 9 月、現地で建設工事を指導した。

そうして、主席の生誕 100 周年を迎えて倉田通りが建設され、首都の各所で 10 万世帯の住宅建設が強力に推進され、全国各地に理想都市と理想村が次々と建設された。

総書記は、商品供給活動と給食および便益サービス事業をさらに改善するよう取り計らった。

そのために、百貨店や商店をはじめとする商業サービス拠点を立派に整

え、商業設備を近代化し、商品の価格も適正なものにするようにした。そして、整然とした商品供給システムを打ち立てて商品を切らさず人民に販売し、商品の陳列とサービスの形式・方法を絶えず改善し、サービス部門従事者のサービス精神を高めるようにした。

総書記は生涯の最後の年である2011年にも、平壌第1百貨店の第2回商品展示場と普通門（ポトンモン）通り食肉・魚商店をはじめ多くの商店を現地指導し、商業部門の幹部と従事者が人民に対する献身的奉仕精神を発揮して商業サービス活動に画期的転換をもたらすようにした。

総書記は、玉流館（オンリュ）と清流館（チョンリュ）を人民のための公共給食サービス拠点として立派に整え、日増しに高まる人民の文化的要求に即して香満楼大衆食堂をはじめとする給食サービス拠点を近代的に整えるようにした。また、朝鮮民族料理と世界の有名料理を専門に供する玉流館料理専門食堂を新設して、国の料理の発展において原種場の役割を果たすようにした。

一方、中央と地方の給食サービス拠点を訪ねて、すべての食堂で料理の水準を高め、運営とサービス活動を絶えず改善していくようにした。

人民によりよい文化生活条件をもたらすために、総書記は、柳京（リュギョン）院をはじめとする近代的な総合便益サービス施設を新たに建設し、既設の総合便益サービス拠点である恩情（ウンジョン）院や恩徳（ウンドク）院をより立派に整えるようにした。また、各種の便益サービスの質を高め、人民の利益と生活上の便宜を最優先させる原則に基づいてサービスの手配と方法を改善するようにした。

総書記は、発展する時代の要求と日増しに高まる人民の文化的要求に即して、人民の文化・情操生活をさらに改善するようにした。

そのために、平壌大劇場や国立演劇劇場、大同門映画館をはじめとする平壌市内の劇場、映画館を人民の立派な文化・情操生活拠点として改善し、金日成主席の生誕100周年を迎えて、万寿台地区に人民劇場を時代の記念

碑的建築物として新しく建設するようにした。

また、黄海北道芸術劇場をはじめとして各道に劇場を新設または改築し、市、郡、工場、企業でも文化会館をよく整えるようにした。

総書記は、2008 年 7 月、凱旋（ケソン）青年公園を最新式の遊戯娯楽施設と電飾、各種のサービス施設を備えた総合遊園地として改築することを発案して、その工事を具体的に指導し、2010 年 4 月と 2011 年 12 月には、リニューアルオープンした凱旋青年公園を視察し、人民に些細な不便もかけないように遊園地の管理運営を改善するよう指示した。

そして、竜岳山（リョンアクサン）遊園地と妙香山（ミョヒャンサン）遊園地をより立派に整備して、人民が祖国の絶景を満喫できるようにし、綾羅（ルンラ）島に遊戯場と総合遊泳場、イルカ館からなる綾羅人民遊園地を建設するようにした。また、中央動物園を勤労者と青少年の文化・情操生活と教育の重要な拠点となるよう拡充させた。

総書記は、人民の文化・情操生活に役立つ電子設備や製品を開発・生産するモンランビデオ社やハナ音楽情報センターなどの近代的な拠点を設け、その管理・運営を改善するようにした。そして、生涯を終える時期となった 2011 年 12 月 15 日にはハナ音楽情報センターを現地指導し、数十年間、体系的に自ら収集してきた音楽作品をすべて寄贈し、それを人民が広く鑑賞し利用できるようにした。

(8)

金正日総書記は、平壌市をはじめとする全国の都市と農村を立派に整備するための事業を賢明に指導した。

まず、錦繍山記念宮殿と樹木園に最上の樹木と美しい草花をより多く植えて育て、樹木をうっそうと生い茂らせ、緑地をきれいに造成して、記念

宮殿の風致を一層引き立てるようにした。また、万景台革命史跡地をはじめとする平壌市内の革命史跡の園林緑化を最高の水準で行うようにした。

そして、平壌市内の公園や遊園地、道路の周辺により多くの緑地を造成し、良種の樹木と美しい草花を多く植えるようにした。

一方2000年7月、平壌花卉研究所を新設して花卉の研究と生産を専門に行うようにし、2011年3月3日にはこの研究所を現地指導して、花卉の研究を一層強化し、栽培を科学化、工業化して花卉の生産を増やすようにした。そして、近代的な花卉温室を新設し、市内の各所に花売り場を設け、花卉の栽培を大衆挙げての運動として展開するようにした。

総書記は、建設突撃隊を組織して白頭山地区の革命戦跡や革命史跡を整備するとともに、三池淵市を密林の中の都市として立派に建設するようにし、咸鏡南道利原(リウォン)郡と慈江道満浦市を手本としてすべての市・郡が園林緑化に力を入れるようにした。

総書記は、土地の管理と保護に力を注ぐようにした。

1998年5月4日、江原(カンウォン)道昌道(チャンド)郡大白(テベク)里の耕地整理の構想を示した総書記は、次いで全国の耕地を整理するための作戦を展開した。

2000年1月24日と27日に平安北道の耕地整理を現地指導した際の幹部への談話**『耕地整理は国の富強発展のための大自然改造事業であり、万年大計の愛国偉業である』**をはじめとする多くの談話で、耕地整理で提起される課題を示した総書記は、全国の耕地整理現場に出向いて、耕地整理を大々的に行って国土を社会主義朝鮮の土地らしく変貌させるように導いた。

また、大渓島(テゲド)干拓地の建設現場をたびたび現地指導して、工事を早期に完了するように導き、2010年7月15日には完工した大渓島干拓地を訪れ、一つの郡の面積に匹敵する耕地を得て国土の面貌を一新させた彼らの英雄的偉勲を高く評価した。

そして、「党が決心すればわれわれは実行する！」というスローガンは1980年代に人民軍が掲げたものだが、今は**「朝鮮は決心すれば実行する！」**という新しいスローガンを掲げるべきだと述べ、大渓島干拓地の建設を完成して金日成主席の遺訓を貫徹した平安北道干拓地建設連合企業所に金日成勲章を、大渓島干拓地の設計には金日成賞を授与するようにした。

総書記は、郭山（クァクサン）干拓地、龍媒（リョンメ）島（ド）干拓地などの干拓地の建設工事を強力に推進するようにした。

2008年4月2日の党・国家経済機関の責任幹部への談話**『水害の防止対策に万全を期するために』**をはじめとする多くの教示で、総書記は、長雨などの天災によって耕地が埋没したり流失したりすることのないようにし、客土を行い、有機質肥料を多く施し、緑肥作物を栽培するなどして地力を高めるべきだと指摘した。

また、2002年3月6日の党・国家・軍隊の責任幹部への談話**『治山治水事業を強力に展開して祖国の山河を労働党時代の錦の山河に変えよう』**をはじめとする多くの著作で、朝鮮民族が代々住んできた三千里錦の山河をわれわれの時代によりしっかり保護し、より立派に整備して、風光明媚で無数の果実がたわわに実る社会主義の理想郷、労働党時代の錦の山河にするというのが今日の党の構想であり決心だと述べ、山林の造成と管理における原則的問題を明示した。

総書記は、山林の造成を将来を見通して計画的に行うようにした。

そのために、国土環境保護省の中央育苗場、利原郡山林経営所の育苗職場をはじめとする中央と地方の育苗場を現地指導して、育苗場をよく整備し、その生産能力を拡大し、苗木生産の科学化、工業化、集約化を実現するようにした。

また、毎年、春と秋の国土管理総動員期間と植樹期に大衆挙げての運動

として植樹を行うようにし、2004 年 3 月には前線視察の最中に人民軍将兵と共に木を植えた。そして、植えた木の肥培管理に力を入れて活着率を一段と高めるようにした。

総書記は、山林の保護にも深い関心を払った。

2008 年 7 月 1 日に慈江道和平（ファピョン）郡五佳山（オガサン）自然保護区を訪れた際の教示をはじめとする多くの教示で、樹木を乱伐しないように教育と統制を強化するとともに、住民の焚き物問題を解決し、山火事や病害虫による被害を防止するよう強調し、そのために万全の対策を立てた。

そして、山林監督員の陣容を責任感の強い人で固め、時代の英雄である江東（カンドン）郡山林経営所垈里（テリ）労働者区の山林監督員を模範として見習う運動を力強く展開するようにした。

総書記は、自流式水路の工事を推し進め、河川整理に力を入れるようにした。

まず、2000 年 1 月 23 日、价川—台城湖間の水路工事を行う課題を示し、2 月 24 日にはこれに関する朝鮮民主主義人民共和国国防委員会の命令を下達するようにした。そして、工事の量が平南灌漑工事の 7 倍、岐陽（キヤン）灌漑工事の 5 倍をはるかに超える膨大な水路工事が 2 年余りの間に完工するようにした。

2002 年 11 月、白馬（ペクマ）—鉄山（チョルサン）間の水路工事を提唱して工事が順調に進むようにし、2005 年 12 月 4 日には完成したこの水路を視察し、次にミル原の水路工事に着手するよう指示した。

そうして、大規模の水路工事とともに、全国各地で中小規模の水路工事も進められ、国の水利システムと、国土の面貌が時代の要求に応じて一新された。

総書記は、普通江、大同江、清川（チョンチョン）江をはじめとする主要な河川の浚渫

工事や護岸整理工事を進め、堤防の補修を定期的に行うよう強調し、2011年 1 月には新しく造られた浚渫船の構造や作用原理、性能などを確かめ、浚渫作業の機械化が高い水準で実現されるようにした。

2006 年 2 月 3 日、2006 年 4 月 24 日の党中央委員会の責任幹部への談話をはじめとする多くの著作で、総書記は、道路の建設と管理で提起される原則的問題を明示し、道路を近代化するための事業を積極的に推し進めた。

そして、高速道路と幹線道路、産業道路、革命戦跡踏査道路、名勝参観道路を新たに建設し、各都市に迂回道路を建設し、道路の技術状態を改善し、道路をきれいに舗装して道路網全般を立派に完成させるようにした。

2000 年 8 月に慈江道城干（ソンガン）郡の道路補修管理隊九峰（クボン）嶺家族小隊員たちに会った総書記は、彼らの愛国的行為を高く評価し、すべての人が彼らを模範として見習って道路の補修と管理に力を入れるようにした。

総書記は、鉄道の近代化事業を強力に推進するようにした。

まず、線路の強度を高めるために黄海製鉄連合企業所を重レール生産基地にし、重レールの生産を促進するための対策を立てるとともに、羅興（ラフン）コンクリート枕木工場と勝湖里（スンホリ）コンクリート枕木工場を改築、拡充して枕木の問題も解決するようにした。

そして、各道に鉄道建設と改築・補修を専門に行う事業所を設け、各道の鉄道の補修・管理は道党の責任幹部が責任を持って道自体の力で行う整然たるシステムを構築して、全社会が鉄道の建設と補修・管理を責任を持って行うようにした。

また、青年同盟に北部鉄道の改築・補修工事を任せ、大衆挙げての運動によって鉄道駅と鉄道周辺の整備を根気よく行うようにした。

(9)

金正日総書記は、党の科学技術重視路線を貫徹して国の科学技術を飛躍的に発展させるための活動を賢明に指導した。

2000 年 1 月 1 日、総書記は、思想重視、銃剣重視とともに科学重視を社会主義強国建設の 3 大柱の一つとして位置付け、2003 年 10 月 15 日の党中央委員会の責任幹部への談話**『党の科学技術重視路線を貫徹することについて』**において、党の科学技術重視路線の基本的要求は、短期間内に先端科学技術を速く発展させ、国の科学技術を世界的水準に引き上げ、社会主義強国の建設を科学技術的に確固と保証することだと指摘し、それを貫徹するための課題と方途を明示した。

総書記は、1999 年を科学の年とし、同年 1 月に国家科学院を現地指導した。ついで数多くの科学研究機関を訪ね、科学者と技術者を大いに押し立て、優遇するようにした。また、1999 年 3 月と 2003 年 10 月には全国科学者・技術者大会、2005 年 10 月には全国科学者・技術者突撃隊運動先駆者大会、2007 年 11 月末～12 月初めには全国知識人大会、2010 年 3 月には先軍時代の全国科学者・技術者大会を開いて、それらの大会が全社会に科学技術重視の気風を打ち立てる重要な契機となるようにした。

また、核心基礎技術である情報技術、ナノ技術、生物工学を発展させることに主力を注ぐとともに、新素材技術や宇宙技術をはじめとする先端科学技術を急速に発展させ、経済強国の建設で切実に提起される科学技術上の問題を解決するようにした。

総書記の賢明な指導の下で科学技術重視路線を貫徹するための闘争が力強く展開された結果、2009 年 4 月 5 日、人工衛星「光明星-2」号の打ち上げに

成功し、先端技術の覇権を握るといった驚異的な出来事が次々に起こった。

総書記は、2008 年 5 月 7 日の党中央委員会の責任幹部への談話をはじめとする多くの著作と教示において、教育部門の主な任務と社会主義強国建設の要請に即して教育事業に革命的転換をもたらすうえで堅持すべき原則、その遂行方法を示した。

金日成総合大学や金策工業総合大学をはじめとする全国各地の多くの大学と学校を訪ねた総書記は、教育部門の従事者が次世代の教育に知恵と精力を尽くしていくようにし、2004 年 10 月に開かれた第 12 回全国教育者大会が教育部門従事者を党の教育政策貫徹に奮い立たせるうえで画期的転換の契機となるようにした。

そして、英才教育体系と大学教育体系、専門学校教育体系を整備・完成し、働きながら学ぶ高等教育体系を強化・発展させるようにし、全民学習と社会教育を強化することにも深い関心を払った。

特に、2009 年 12 月 11 日の党および教育部門の責任幹部への談話『**金日成総合大学をチュチェ教育と科学の最高の殿堂、世界一流の大学として一層立派に整えるべきである**』をはじめとする多くの著作で、金日成総合大学を世界一流の大学として整備する構想を示した。そして、金日成総合大学をたびたび訪ねては、それを実現するための活動を賢明に指導し、金日成総合大学を手本としてすべての大学を盛り立てるようにした。

総書記は、教育の内容と方法を改善し、社会主義強国建設に役立つ革命的人材をより多く育成するようにした。

まず、すべての教育段階で政治・思想教育と教育活動を確固として優先させながら科学技術教育を強化する方向で教育内容を構成するようにし、現代科学技術の急速な発展とその水準の飛躍的な向上に即して教育内容を絶えず改善し、補充、完成させていくようにした。

そして、金日成主席が示した開発授業法を具現することに力を注ぎ、優れた授業を行う教員と新しい授業方法を考案した教員には「10・8模範教育者」の称号と新授業方法登録証を授与するようにした。また、すべての学校で理論と実践、教育と生産労働を適切に結合し、学校での試験方法、学生・生徒の実力評価方法を改善するようにした。

教員の責任感と役割を強めるために、教員を社会的に大いに押し立て優遇する気風を打ち立てるようにし、特に、2008 年には教員栄誉勲章と教員栄誉メダルを制定して功労のある教員に授与するという国家的措置も講じるようにした。

総書記は、2009 年 12 月 17 日に金日成総合大学に**「足は自国の地に据え、目は世界に向けよ！ 崇高な精神と豊かな知識を兼備した先軍革命の頼もしい根幹となれ！発奮し、また発奮して偉大な党、金日成朝鮮を世界が仰ぎ見るようにせよ！ 2009・12・17 金正日」**という親筆書簡を送り、すべての学生が党と革命、祖国と人民のために一心に学ぶようにした。

総書記は、教育事業に対する国家的保障と社会的関心を高めるようにした。

まず、金日成総合大学と金策工業総合大学に体育館と電子図書館を最高の水準で建設するようにし、金亨稷師範大学、咸興化学工業大学をはじめとする国の主要な大学を立派に整備するよう取り計らうとともに、近代的な教育設備を送った。また、社会的に模範教育郡称号獲得運動を活発に繰り広げるようにし、2005 年には朝鮮最初の教育後援基金を設けて、次世代教育のための支援活動を全国的規模のみならず国際的規模でも活発に展開するようにした。

総書記は、文学・芸術の高い境地を切り開くための活動を賢明に指導した。

まず、作家が現実の中に深く入って、時代の壮大な現実を反映し、時代の要求を具現した作品を多く創作するようにした総書記は、彼らが創作し

た数多くの作品を見て、小説や詩をはじめとする国の文学がより高い段階へと発展するように導いた。

また、映画部門を最短期間内に盛り立てるために、2005 年 1 月に映画部門で創作家、芸能人の再武装のための集中学習を行う特別措置を講じ、ついで全人民を社会主義守護精神で教育し、社会主義強国建設に立ち上がらせる劇映画や記録映画、科学映画、アニメを多く制作するようにした。

総書記は、勲功国家合唱団が時代のラッパ手としての使命と任務を立派に果たすようにする一方、2004 年から 2011 年までに二十数回にわたって国立交響楽団の公演を見て指導し、チュチェの交響楽をさらに発展させるようにした。

そして、朝鮮労働党創立 55 周年を迎えて、マスゲームと芸術公演を結合させた朝鮮式の大マスゲーム・芸術公演『百戦百勝の朝鮮労働党』を創作・公演するようにし、金日成主席の生誕 90 周年と朝鮮人民革命軍創建 70 周年を迎えて、大マスゲーム・芸術公演『アリラン』を 21 世紀を代表するモデル作品、世界的な大傑作として完成させ、主な契機にそれを公演することを恒例化するようにした。そうして、世界中に「アリラン熱風」が巻き起こり、2007 年 8 月 15 日には、大マスゲーム・芸術公演『アリラン』にギネス世界記録証書が授与された。

総書記は、『血の海』式革命歌劇と軽喜劇『山びこ』、演劇『今日を思い起こさん』をはじめとする時代精神を反映した軽喜劇と演劇をより多く創作・公演するようにし、歌劇『紅楼夢』、『エフゲニー・オネーギン』、『梁山伯と祝英台』、演劇『ネオン街の兵士』など外国の名作も新世紀の要求に即して立派にリメークして公演するようにした。

総書記は、人民軍で創造された大衆文化芸術の手本を大いに見習うようにし、第 2 回 4 月の春人民芸術祭の大衆芸術部門総合公演や興南肥料連合

企業所と平壌市内の大学生の芸術サークルによる公演など多くの単位の芸術サークル公演を観覧し、大衆文化芸術活動を党の思想と要求に即して革命的かつ戦闘的に繰り広げていくようにした。

総書記は、スポーツの発展に深い関心を払った。

まず、人民軍のスポーツを発展させ、それを手本にして国のスポーツを発展させるという方針を提示し、朝鮮式のスポーツ競技原則と競技方法を具現して世界の覇権を握り、スポーツ科学を速やかに発展させるようにした。

また、2000 年 10 月に芸能人スポーツ大会に出席して大衆スポーツが活気づくようにし、平壌体育館をはじめとする競技場と競技館を大衆スポーツの場として広く利用し、祝日を契機に大衆スポーツの雰囲気をつくり出すようにした。

総書記は、党の予防医学の方針を貫徹し、医療サービス活動と医科学研究活動、物質的・技術的土台を近代化するための活動を力強く推し進めるようにした。

そのために、新設の薬品研究所と注射器工場、江界高麗薬工場と興南製薬工場を現地指導し、大衆薬と医療機器の生産に転換をもたらすようにした。また、江西薬水のような鉱水を国家的に保護し、広く利用するよう指摘し、先端科学技術に基づく遠隔医療サービスシステムを確立するようにした。

総書記は、社会主義的生活文化を確立し、民族文化遺産を正しく継承し、発展させるための活動を指導した。

2003 年 2 月 10 日と 7 月 2 日の党中央委員会の責任幹部への談話『**先軍時代に即した社会主義的生活文化を確立するために**』において、全国に時代の要求に即応した生活文化を確立するための旋風を巻き起こすよう強調し、それを実現するための活動を指導した。

そして、すべての人が自分が住む村や街、家や職場などの生活環境を新しい時代にふさわしく文化的に、清潔に整えるようにした。また、服装や身づくろいを時代の要求に即したものにし、言葉づかいや食生活の文化水準を高めることにも深い関心を払った。

総書記は、歴史・文化遺跡を訪ねて、その保存・管理状況をつぶさに確かめ、2005 年には、朝鮮人民の英知と才能、反侵略闘争史を物語る歴史遺物である北関大捷碑を反日教育に利用するようにした。

(10)

金正日総書記は、チュチェの革命偉業継承の歴史的転換期を迎えていた 2010 年に朝鮮労働党第 3 回代表者会の開催を提唱し、代表者会が成功裏に行われるようにした。

総書記は、2010 年 1 月 5 日、党中央委員会の責任幹部たちに朝鮮労働党第 3 回代表者会の準備を着実に進めるよう強調した。

朝鮮労働党中央委員会政治局は 2010 年 6 月 23 日、決定書「朝鮮労働党代表者会を招集することについて」を採択した。

決定書には、社会主義強国建設偉業の遂行において画期的転換がもたらされている党と革命発展の新たな要求を反映して、朝鮮労働党最高指導機関選挙のための朝鮮労働党第 3 回代表者会を 2010 年 9 月に招集することを決定するという内容が言及されている。

総書記は、全人民が党代表者会を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えるための闘争に総決起するようにした。

そうして、党代表者会を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果をもって迎えるための決起集会が全国各地で開かれ、新聞や放送、出版物では、朝

鮮労働党の歴史に特記すべき画期的な意義を持つ党代表者会招集が集中的に特集された。

総書記は、党を絶対的に信頼して従う革命的信念を人民に持たせるための思想教育をさまざまな形式と方法で行うとともに、党の大衆路線を貫徹して、党代表者会を契機に党の周りに固く結束した革命隊伍の政治的・思想的威力を誇示するようにした。

そして、人民経済の各部門を現地指導して勤労者の生産闘争を励まし、党代表者会をかつてない勤労の成果をもって迎えるための大高揚進軍に拍車をかけるようにした。

総書記は、党代表者会の文書の準備が高い水準で完了するように導いた。

まず、党代表者会で党規約改正の問題を討議するようにし、その草案作成の作業を指導した。

規約には、金日成同志を党と革命の永遠なる領袖として高く仰ぎ、朝鮮労働党の創立と強化・発展に尽くした主席と党の不滅の業績を新たに反映させ、領袖を中心とする組織的・思想的全一体としての党の特性に即して朝鮮労働党最高指導機関の構成とその地位と役割を新たに規定した。また、党の当面の目的は、共和国北半部で社会主義強国を建設し、全国的範囲で民族解放・民主主義革命の課題を遂行することであり、最高目的は、全社会をチュチェ思想化して人民大衆の自主性を完全に実現することであると規定した。そして、チュチェ革命の新時代の要求に即して党員の義務と各級党組織の活動内容を全般的に修正・補足し、「党と人民政権」、「党マーク、党旗」の章を新たに設け、人民政権と青年同盟に対する党の指導を強化し、人民軍内の党組織の役割を強めるという内容を補足した。

総書記は、党代表者会の開会の辞と決定書、代表たちの討論文にも、党の指導の下に社会主義強国建設偉業を立派に達成していくという朝鮮人民

の鉄石の信念と意志がそのまま反映されるようにした。

2010 年 8 月、朝鮮労働党代表者会に参加する代表者選挙のための朝鮮人民軍党代表会が開かれ、ついで各道の党代表会と朝鮮人民内務軍、内閣、鉄道省、文化省の党代表会が行われた。

全人民の一致した意思によって金正日同志と金正恩(キムジョンウン)同志を朝鮮労働党代表者会の代表に推挙した。

特に、2010 年 8 月 25 日に 4・25 文化会館で行われた朝鮮労働党朝鮮人民軍代表会では、金正日同志と金正恩同志を朝鮮労働党第 3 回代表者会の代表に推挙するという決定を採択した。

こうして 2010 年 9 月 28 日、首都平壌では、金正日同志の指導の下に朝鮮労働党第 3 回代表者会が盛大に行われた。

代表者会には朝鮮労働党朝鮮人民軍代表会、道党(政治局)代表会で選出された代表 1653 名とオブザーバー517 名が参加した。

代表者会では、第 1 議案「わが党と人民の偉大な指導者金正日同志を朝鮮労働党総書記として変わることなく高く推戴することについて」と第 2 議案「朝鮮労働党規約改正について」を討議決定し、第 3 議案として朝鮮労働党中央指導機関の選挙を行った。

歴史的な朝鮮労働党第 3 回代表者会は、金正日同志を党と革命の首位に変わることなく高く戴き、朝鮮労働党を金日成同志の党としてさらに輝かせ、白頭山で切り開かれたチュチェの革命偉業をあくまで成し遂げるという全人民の革命的信念と意志を今一度全世界に示し、社会主義強国建設偉業をさらに前進させていくうえで画期的転換の里程標をもたらした重大な政治的出来事であった。

金正日総書記は、チュチェの革命偉業継承の問題を立派に解決するための活動を賢明に指導した。

総書記は、金正恩同志がチュチェの革命偉業の後継者としての資質と品格を備えることに深い関心を払った。

総書記は、人並みすぐれた天稟を備えた金正恩同志が早くから銃剣と縁を結び、政治と軍事、経済、文化など、すべての分野の多方面にわたる知識を身に付けるようにし、特に、困難を極めた「苦難の行軍」の時期には人民と苦労を分かち合い、人生体験を積むようにした。

金正恩同志は、「苦難の行軍」の時期に人民と共に苦難と試練を乗り越えて、革命同志と人民への信頼、チュチェの革命偉業の正当性への信頼を強め、革命家にとって愛より偉大で大切で、力のあるものは信頼であるという哲理を胸に深く刻み込み、金正日総書記に随行して人民軍の各部隊や最前線の軍営への現地視察の道を歩みながら、チュチェ革命偉業の正当性と生命力を実感した。

総書記は、金正恩同志を金日成軍事総合大学で学ばせ、師となって、卓越した政治家、鋼鉄の総帥としての資質と品格を備えるように導いた。

金日成軍事総合大学に入学した金正恩同志は、在学中、帝国主義の強敵との２度の革命戦争を通じてその正当性と生命力が実証された党のチュチェ戦法に精通し、近代戦に必要な先端軍事科学と技術を全面的に体得するとともに、人民軍に対する金正日総書記の指導を忠実に補佐した。

その過程で、人民軍を領袖決死擁護の結晶体としてさらに強化・発展させ、国防工業を新たな高い段階へと発展させた。そして、2009 年 4 月には反打撃司令官として人民軍を指揮して、朝鮮の人工衛星を「迎撃」するという敵の策動を断固粉砕し、衛星の打ち上げ成功に貢献した。

また、歴史的な「150 日間戦闘」と「100 日間戦闘」の現場にたびたび出向いて、経済強国の建設に飛躍と革新をもたらすようにし、花火夜会を直接指導した。

実生活を通じて金正恩同志の偉人としての風格と業績の偉大さに魅せられた全人民は、金正恩同志を「金将軍」、「われらの青年将軍」と称揚して高く仰ぎ、歌曲『足どり』など尊敬と欽慕の念を込めた頌歌をつくって歌った。

中央と地方の各級党組織では金正恩同志についての講演会が行われた。

全国の党組織と人民は、2010 年 9 月に開催される朝鮮労働党第 3 回代表者会を控えて、金正恩同志を党と国家事業全般を受け持つ公職に推戴することを求める数多くの請願書を寄せた。

2010 年 9 月 28 日、朝鮮労働党第 3 回代表者会が開かれた。

金正恩同志は朝鮮労働党第 3 回代表者会で党中央指導機関の一員に、党中央軍事委員会副委員長に推戴された。

全人民は、金正恩同志を金正日総書記の後継者として高く戴いたことをチュチェ朝鮮の一大慶事、大幸運として祝い、金正恩同志の思想と指導に忠実に従うことを誓った。

金正日総書記は、金正恩同志の指導体系を確立することに深い関心を払った。

総書記は、まず人民軍が金正恩同志の思想と指導に忠実に従い、金正恩同志の命令一下、一つになって動く厳格な命令指揮体系と革命的軍紀を確立するようにした。

2011 年 10 月 8 日と 12 月 15 日の党中央委員会責任幹部への談話で、金正日総書記は、全党と全人民、すべての人民軍将兵が金正恩同志の周りに一つの思想、一つの意志で固く結束して、金正恩同志の指導に忠実に従い、チュチェの道に沿って確信を持って闘っていくようにと述べた。

金正日総書記の遺訓に従い、2011 年 12 月 30 日、党中央委員会政治局会議では金正恩同志を朝鮮民主主義人民共和国武力最高司令官に推戴した。

金正日総書記の賢明な指導の下に金正恩同志を党と国家、革命武力の首位に戴き、その指導体系を確立するための活動が力強く展開されることによっ

て、朝鮮では革命偉業継承の問題が確実に解決され、チュチェの革命偉業は金正恩同志の指導の下に前進する新たな高い段階に入ることになった。

(11)

金正日総書記は、北と南、海外の 3 者連帯・連合を実現するための闘争を賢明に指導した。

まず、南朝鮮の「民主労総」の代表たちの平壌訪問を契機に、北南労働者の組織的な連帯・連合を実現するようにした。

そのために、1999 年 4 月、平壌を訪れる南朝鮮の「民主労総」の代表たちが滞在期間にいかなる不便も感じないように取り計らい、彼らが提起した北南労働者サッカー競技開催の問題も解決するようにした。

こうして、南朝鮮の「民主労総」の代表たちが 4 月 27 日に平壌を訪れ、双方代表間の実務会談では、1999 年 8 月と翌年 8 月に平壌とソウルでそれぞれ北南労働者のサッカー競技大会を開催するという共同合意文が採択された。

総書記は、1999 年 4 月と 5 月に、民族の和解と祖国統一のための愛国・愛族の道に一身をささげた文益煥牧師を回顧する集いと第 10 回汎民族大会を共同で推進する活動を通じて、北と南、海外統一運動団体の連帯・連合を発展させていくようにした。

こうして、1999 年 6 月 1 日に中国の竜井では、北の民族和解協議会と南の「全国連合」をはじめとする北と南、海外の権威のある統一運動団体と個々の人士の参加の下に「文益煥牧師を回顧する集い」が催された。また、同年 8 月 15 日には、汎民連（祖国統一汎民族連合）の北側本部と南側本部、海外本部の代表のほか、南朝鮮の基本運動団体である「全国連合」、「韓総連」、「民主労総」など南朝鮮のほとんどの運動団体の参加の下に、民

族の自主と大団結のための 99 統一大祝典、第 10 回汎民族大会が開かれた。

総書記は、6･15 北南共同宣言の採択とそれを履行するための闘争を賢明に指導して祖国統一の画期的局面を開いた。

20 世紀の最終年である 2000 年に至り、朝鮮人民の祖国統一運動と内外情勢には新たな変化が生じた。

こうした情勢の推移を読み取った総書記は、2000 年の初めに北南首脳の対面によって祖国統一偉業実現の画期的局面を開く構想を立てた。

2000 年 4 月 8 日、歴史的な平壌対面と北南最高位級会談開催に関する北南合意書が発表された。

その後、2000 年 6 月 13 日から 15 日まで平壌で、国土分断 55 年にして初めての歴史的な北南首脳対面と最高位級会談が行われた。

総書記は空港に出向いて南側の最高位級代表団一行を温かい同胞愛をもって迎え、北南最高位級会談を成功に導いた。

総書記は、6 月 13 日から 15 日まで 10 回にわたって多くの時間を南側の執権上層部との活動に当て、6 月 14 日には金大中（キムデジュン）との単独会談を行った。

単独会談で総書記は、われわれが初めて対面するのだから、7000 万の同胞に祖国統一への希望と未来への楽観を与える宣言文を一つ発表すべきだとし、民族が力を合わせて自主的に統一を実現することに関する問題と統一の方途に関する問題、非転向長期囚の送還と離散家族・親族の訪問団交換問題、北南対話問題など、祖国の統一を実現するうえで提起される原則的かつ重要な問題を主動的に提起し、会談をその解決へと導いた。

こうして 2000 年 6 月 15 日、歴史的な北南共同宣言が採択･発表された。

歴史的な北南首脳対面と最高位級会談以降、総書記は、6･15 北南共同宣言履行のための活動を賢明に指導した。

そのために、北南閣僚級会談をはじめとする各分野の会談が北南関係の

改善と祖国統一に寄与する実のある会談になるようにし、北南間の協力と交流が活発に行われるようにした。

こうして、2007 年 6 月までに数十回の北南閣僚級会談が行われ、2003 年 2 月に開城—汶山（ムンサン）間の臨時道路が開通し、2003 年 6 月と 2007 年 5 月には北南東西海鉄道連結行事と北南東西海列車開通のための試験運行が行われ、開城工業地区の建設と金剛山観光事業が進捗した。

北南間のスポーツ・文化交流もかつてなく活発に行われた。2002 年の秋に釜山（プサン）で開催された第 14 回アジア競技大会と 2003 年 8 月に大邱（テグ）で開催された第 22 回ユニバーシアードに共和国の選手団と応援団が参加し、2003 年 10 月に済州（チェジュ）島で開かれた民族統一平和スポーツ・文化祝典に共和国の体育団とテコンドー示範団などで構成された大規模の代表団が参加し、2006 年 12 月にはカタールのドーハで開催された第 15 回アジア競技大会の開幕式に北と南の選手が統一旗を掲げて一緒に入場した。また、2000 年 8 月の朝鮮の国立交響楽団のソウル公演、2002 年 9 月の南朝鮮の交響楽団と公演団の平壌訪問公演をはじめとして、北南のアーティストの合同公演や合同演奏会が行われた。そして、2001 年 6 月には平壌で民族服展示会が、2002 年 9 月と 10 月には平壌とソウルで北南のテコンドー示範団の出演が行われ、北南の歴史学者による平壌とソウル、金剛山での討論会と共同資料展示会および写真展示会などが開かれた。

総書記は、北南間の往来と接触が活発に行われるようにした。

そのために、2000 年 8 月、国土分断以降初めて南朝鮮の言論社代表団が平壌を訪問するように取り計らい、8 月 12 日には彼らのために昼食会も催し、記念写真も撮影した。

南朝鮮の言論社代表団の平壌訪問以降、南朝鮮の言論人の間では金正日総書記の偉人としての風格を積極的に紹介・宣伝し、連共・連北を志向す

る言論活動がかつてなく盛り上がった。

そして、朝鮮労働党創立55周年慶祝行事に南朝鮮の政党、団体の代表と各界の人士40余人が参加し、2005年には分断以降初めて北と南、海外が当局と民間の区別なく朝鮮民族同士で6·15と8·15を記念する大祝典を催し、北と南の離散家族・親戚の10余回にわたる平壌とソウル、金剛山での対面が行われた。また、2000年9月には、63人の非転向長期囚が社会主義祖国の懐に抱かれるという劇的な出来事が起こった。

総書記は、北南首脳対面によって祖国統一と民族共同繁栄の活路を開くために、南側の盧武鉉（ロムヒョン）一行の平壌訪問を受諾し、その準備を細かに指導した。そして、2007年10月2日には4·25文化会館の前まで出向いて彼らを温かく迎え、10月4日には歴史的な「北南関係の発展と平和・繁栄のための宣言」が採択されるようにした。

「北南関係の発展と平和・繁栄のための宣言」は、全民族の統一の意志を内外に誇示し、朝鮮民族同士で力を合わせて北南関係をより高い段階へと発展させ、平和と民族共同の繁栄を成し遂げるための具体的な目標と課題を示した実践綱領である。

総書記は、李明博（リミョンバク）の反共和国対決策動を粉砕し、祖国統一運動を推し進めるようにした。

2008年2月、南朝鮮で「政権」の座についた李明博は執権するやいなや6·15共同宣言と10·4宣言を全面的に否定し、「先対米関係、後北南関係」を唱えて親米事大主義的かつ反民族的な姿勢をあらわにし、「非核・開放・3000」なるものを持ち出して北の核放棄を云々する一方、南朝鮮全域でアメリカと共に「キー・リゾルブ」、「フォール・イーグル」合同軍事演習を繰り広げた。

2008年3月2日と3日、朝鮮民主主義人民共和国外務省、朝鮮人民軍板

門店代表部、祖国平和統一委員会は談話と回答を通じて、南朝鮮全域で繰り広げられている合同軍事演習はわが共和国を武力で攻撃するための核戦争演習であると暴露し、朝鮮の人民と人民軍将兵は共和国の自主権をはなはだしく脅かすアメリカの軍事的企図に受動的な防御ではなく、主動的な対応打撃をもって立ち向かうであろうと警告した。

こうして、3 月 28 日には、「北方限界線」を「固守」するという南朝鮮当局の軽挙妄動を強く問題視した朝鮮人民軍海軍司令部スポークスマンの談話が発表され、3 月 29 日には、北の核基地を精密誘導兵器で「先制打撃」するという暴言を吐いた南朝鮮軍事当局に共和国の強硬な立場を明らかにした電話通知文が送られ、30 日には、南朝鮮軍事当局が手出しをするならば南朝鮮を廃墟にすると警告した軍事論評員の文が発表された。

総書記は、「わが民族同士」の旗を高く掲げて 6･15 共同宣言と 10･4 宣言を固守し、対決時代の残滓を一掃し、平和・繁栄の新しい歴史を創造していくようにした。

2009 年 8 月には南朝鮮の現代グループ会長と会見して彼女の要請を聞き届け、南朝鮮の金大中元大統領が死去した時には弔電を送り、高位級の特使弔問団をソウルへ派遣した。

(12)

金正日総書記は、新世紀の要求に即して在日朝鮮人運動に新たな転換をもたらすための活動を賢明に指導した。

総書記は、総聯の活動方法を新たに切り替えるうえですべての活動を実情に即して行う原則を堅持するよう強調した。

総聯は、活動方法に新たな転換をもたらすために、総聯の内部をしっか

りと固め、中核基盤を強固にするとともに、同胞大衆との活動、特に新しい世代との活動方法を彼らに合わせて切り換え、広範な在日同胞が一層固く結束できるように組織体系と活動体系を改めた。

そして、総聯の中核隊伍を強化するために、新しい世代の活動家の比率を高める一方、活動家の陣容を精鋭化し、活動家の教育に大きな力を入れて、すべての活動家を動揺や変心することのない幹部に育て上げた。

総書記は、広範な同胞大衆を教育し獲得して総聯の大衆的基盤を固めるようにした。

総聯は、総聯中央と地方本部の機構体系を、変化した活動環境に即して整理し簡素化する方向で改編し、政策的指導、政治的指導を基本とする方向で総聯中央の指導方法を改めた。また、同胞に対する思想教育活動も彼らの要求と水準、総聯の実情に応じて改善し、同胞の権利擁護組織の特性に応じて民族権利擁護運動を大衆運動の中心的位置に据えて展開した。

総書記は、2002 年 5 月の総聯中央委員会第 19 期第 2 回会議を契機に、総聯が民族教育・文化活動と同胞の生活奉仕・福祉活動を 2 大中心柱として捉えていくようにした。

2001 年、総書記は、朝鮮大学校創立 45 周年と在日朝鮮人中等教育実施 55 周年の記念行事が、民族教育事業の雰囲気を盛り上げ、新世紀の要求に即して民族教育事業をさらに発展させる重要な契機となるようにした。また、毎年巨額の教育援助費と奨学金を送り、朝鮮大学校と朝鮮高級学校の学生・生徒が祖国を訪問して社会主義建設に沸き立つ現実を目の当たりにして、祖国と民族を愛する真の愛国的人材として育つようにした。

総聯は、各級組織と地域に整然と設けられた同胞生活奉仕システムを活性化し、高齢者や障害者のための福祉活動を根気よく展開して、その生命力が大衆獲得活動の実績として現れるようにし、特に、子育て支援活動と

同胞商工人に対する経営支援活動に力を入れた。

また、同胞商工人と新しい世代を中心とする広範な同胞大衆を教育し獲得し、総聯の大衆的基盤を拡大・強化することに大きな力を注ぎ、2007 年 5 月に開かれた総聯第 21 回全体大会では「トンポアイネット拡大 21」(同胞探し出し運動）を戦略的かつ恒久的な愛国・愛族運動として展開していくことを決定した。

そして、総聯中央から各級組織・団体に至るまで「トンポアイネット拡大 21」を活発に繰り広げるための組織体系と活動体系を確立するとともに、この運動でモデルをつくり、その成果と経験を全組織に拡大していった。また、この運動で団体・事業体の役割を強め、支部、分会をはじめとする基層組織を強固にする活動と有機的に結び付けて進めた。

総書記は、総聯の合法的地位を固守し、同胞の権利を守るための闘争を力強く展開するようにした。

総聯は、すべての活動家と同胞が敵の反総聯・反朝鮮人策動の本質と企図を明確に認識するようにした。そして、日ごとにエスカレートする敵の策動に対処して、総聯組織の内部を強化し、主体的愛国勢力を打ち固めることに組織全体が力を入れるようにした。

そして、在日同胞の法的地位の問題を朝・日平壌宣言の一条項として明記するようにしただけでなく、日本が総聯の破壊を謀り、同胞を迫害するたびに強力な国家的措置を講じて内外の世論を喚起し、総聯の活動家と在日同胞を力づけ、勇気を奮い起こさせた。

総書記は、韓徳銖議長をはじめとする総聯の 1 世の幹部は革命の元老、老革命家、真の愛国忠臣だと称揚し、同胞が祖国の愛情と恩情を身にしみて感じるようにした。

2004 年 10 月に新潟県の中越地方で地震が起こった際と、2011 年 3 月に

大地震と津波が東日本一帯を襲った際に、総書記は、被害を受けた同胞たちに祖国から慰問金を送り、総聯へ慰問電文も送るようにした。

総書記は、アメリカとヨーロッパ地域の同胞の運動にも深い関心を払った。そうして、2005 年 6 月、ニュージーランドに「在ニュージーランド同胞連合会」が設けられた。

2005 年 9 月、アメリカの南部地域が台風に襲われて被害が出た際には、朝鮮海外同胞援護委員会の名義で在米同胞全国連合会と在米同胞中南部連合会宛に慰問電文を送るよう措置を講じた。

総書記は、海外同胞に祖国の現実を積極的に紹介・宣伝する一方、祖国の芸術団が海外同胞の間で芸術活動を活発に展開するようにした。

(13)

金正日総書記は、朝鮮の自主権を尊重し、友好的に対する世界のすべての国と友好・協力関係を発展させていくようにした。

まず、自主性の原則に基づいて中国、ロシアとの友好・協力関係を発展させた。

総書記は、2000 年 3 月 5 日と 2007 年 3 月 4 日、2008 年 3 月 1 日に駐朝中国大使館を訪問し、2000 年 5 月、2001 年 1 月、2004 年 4 月、2006 年 1 月、2010 年 5 月と 8 月、2011 年 5 月と 8 月に中国を訪問して中国の党および国家の指導幹部と対面し、会談を行った。

数回にわたる中国訪問を通じて、金日成主席が築いた朝中友好の伝統を代を継いで絶えず強化・発展させていくという両国の党と政府の確固不動の意志が内外に誇示され、両党、両国間の相互理解と信頼、友好と協力をさらに増進させ、朝鮮半島の平和と安定、アジアと世界の平和を守るため

の両国人民の共同闘争を鼓舞した。

総書記は、江沢民主席（2001 年 9 月）、胡錦濤主席（2005 年 10 月）、温家宝総理（2009 年 10 月）をはじめ、訪朝した中国の党および国家の指導者たちとの対外活動を精力的に行った。

また、朝中両国間で党・国家・軍事代表団をはじめとする各分野の代表団を交換して相互理解と友情を引き続き深めるようにし、2009 年 10 月の朝中国交樹立 60 周年と 2010 年 10 月の中国人民志願軍朝鮮戦線参戦 60 周年を契機に朝中友好を新たな高い段階へと発展させるようにした。

総書記は、2000 年 7 月 19 日から 20 日にかけて朝鮮を訪問したロシア連邦のプーチン大統領と会見し、両国の関係と互いの関心事となっている国際問題について幅広い意見を交換し、朝ロ共同宣言に署名した。

そして、2001 年 7 月 26 日から 8 月 18 日までロシアを訪問して、朝ロモスクワ宣言に署名した。また、2002 年 8 月にロシア連邦の極東地方を訪問し、2011 年 8 月にはシベリアおよび極東地方を再度訪問して朝ロ友好関係をさらに深めた。

総書記は、アジア太平洋地域諸国との関係を拡大・発展させるようにした。

そうして、朝鮮はベトナム、インドネシア、ラオス、カンボジアとの友好関係を発展させるとともに、2000 年 5 月に、25 年間断絶していたオーストラリアとの国交を回復し、2000 年 7 月にフィリピン、2001 年 4 月にはクウェートと国交を結び、2000 年 7 月には ASEAN 地域フォーラムに加入し、2007 年 4 月にはミャンマーとの国交を回復した。

総書記は、ヨーロッパをはじめとする西側諸国との関係を発展させるようにした。

冷戦の終息後、独自の道を進もうとする西欧諸国の動向を深く洞察した

総書記は、西欧諸国との活動に一層力を入れるよう強調し、それらの国との活動をより積極的に行うようにした。そうして、朝鮮は2001年1月にイタリアと国交を結び、ついでイギリス、オランダ、トルコ、ベルギー、スペイン、ドイツ、ルクセンブルク、ギリシャと国交を樹立した。

2001年5月、総書記は、訪朝したEU（欧州連合）の最高位級代表団と会見し、朝鮮とEUとの関係発展と種々の国際問題について原則的で論理的かつ明確な解明を与えた。これは、朝鮮とEUとの関係を発展させる重要な契機となり、同年5月14日、EUは朝鮮と外交関係を結んだ。

総書記は、西欧諸国とともに、カナダ、ブラジルなど他の地域の国々とも外交関係を結ぶようにし、アフリカ諸国との友好・協力関係を発展させるようにした。

そうして、朝鮮はアフリカの多くの国と国交を樹立するようになり、帝国主義者の反共和国人権騒動にもかかわらず、第63回国連総会で敵の「人権決議案」を表決する際、アフリカ諸国が反対や棄権などをして国際舞台で朝鮮の偉業を支持した。

総書記は、朝・日最高位級会談によって両国間の国交正常化の実現と善隣関係樹立の新たな展望を開いた。

過去1世紀の間、朝日両国間の関係は日本の朝鮮侵略と敵視政策のため不正常な状態にあり、1991年から1992年にかけて朝・日国交正常化のための会談が行われたが、結実を見ることなく中断した。

2002年9月17日、朝・日首脳の会談が平壌で行われた。

会談では、両国間で長い間引きずってきた歴史の未解決問題と懸案を解決し、関係の正常化を実現するという問題が真摯に討議され、その内容を反映した歴史的な朝・日平壌宣言が発表された。

朝・日平壌宣言では、日本が過去の植民地支配によって朝鮮人民に莫大

な損害と苦しみを与えた歴史的事実を素直に認め、痛切な反省と心からの謝罪の意を表明した。

しかし、歴史的な朝・日平壌宣言が採択された後、日本の小泉総理はブッシュ政権の妨害策動と日本の極右反動勢力の対朝鮮敵視政策に追従して、朝鮮に対する制裁策動の度を強めた。

その後、日本の総理は共和国に対する態度を変え、自分の側近を朝鮮に派遣して平壌訪問交渉を開始し、2004 年 5 月、再び朝鮮を訪ねた。

5 月 22 日、日本の総理との会談で金正日総書記は、日本が朝鮮との約束を反故にし、反共和国敵視政策をとってきたことを追及した。そして、朝日関係を改善するうえで提起される原則的問題と核問題に関する共和国政府の立場を明らかにした。

日本の総理は、これまで共和国との関係でよからぬ出来事があったことについて遺憾の意を表し、朝・日平壌宣言を重視し、それを誠実に履行する過程を通じて敵対関係を協力関係に変え、両国の関係を正常化していく意志を表明した。そして、今後、反共和国「制裁法」の発動を中止し、在日朝鮮人を差別せずに友好的に対することと、両国間の信頼関係回復のために共和国に対する人道支援を即時に再開することを確認した。

チュチェの革命偉業の継承・完成のために生涯をささげ、社会主義祖国の強盛・繁栄と人民の幸せのために、国の統一と世界の自主化のために精力的に活動していた金正日総書記は、2011 年 12 月 17 日 8 時 30 分、精神的・肉体的過労による急病で現地指導の途上であまりにも惜しく逝去した。

12 月 19 日正午、特別放送として金正日総書記が逝去したという悲報が伝

えられるや全国が悲しみに包まれた。

全国の老若男女は昼夜を分かたず金日成主席の銅像と金正日総書記の太陽像の前で地をたたき胸をたたいて号泣し、皆が喪主となって深甚なる哀悼の意を表した。

10余日の哀悼期間に、延べ2億6000余万の各階層の勤労者と青少年・学生、人民軍将兵が金正日総書記に弔意を表した。

12月28日、首都・平壌では、雪が降りしきる40キロの沿道に立ち並んだ数百万の市民と人民軍将兵の哭声が天地を揺るがす中、金正日総書記と永訣する儀式が執り行われた。12月29日には平壌で中央追悼大会が行われ、各道・市・郡でも追悼大会が催された。

海外同胞と南朝鮮の同胞も金正日総書記の逝去に深い哀悼の意を表した。

190余りの国と国連をはじめとする国際機関、朝鮮と敵対関係にある国さえ金正日総書記の逝去に哀悼の意を表し、弔旗掲揚、党および国家・政府首班の海外朝鮮代表部への弔問などさまざまな弔意行事が執り行われた。

哀悼期間、150余の国と地域の1万余の出版物・報道が外国の国家元首の弔意行事ニュースの前例を破って、金正日総書記の逝去に関して、時々刻々、速報として連日特集した。

金正日同志は逝去したが、敬愛する金正恩同志の気高い革命的徳義心によって生き続けている。

金正恩同志は、金正日同志を高く仰ごうとする全人民の信念と意志を込めて、**「偉大な金日成同志と金正日同志は永遠にわれわれと共におられる」**、**「偉大な領袖金日成同志と偉大な指導者金正日同志の革命思想でしっかり武装しよう！」**というスローガンを提示し、チュチェの最高聖地である錦繡山記念宮殿を錦繡山太陽宮殿と新たに命名した。そして、錦繡山太陽宮殿を最高の水準で整備し、金正日同志を生前の姿のまま安置するようにした。

2012 年 2 月 14 日、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議常任委員会の決定により、金正日同志に朝鮮民主主義人民共和国大元帥の称号が授与された。

2011 年 12 月 19 日、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議常任委員会の政令により、金正日同志に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号が授与された。そして、万寿台の丘と万寿台創作社をはじめとする全国各地に金正日同志の銅像が建てられ、太陽像と永生祈願のスローガンが掲げられた。また、金正日同志の誕生日である 2 月 16 日が光明星節として制定され、金正日勲章と金正日賞、金正日青年栄誉賞、金正日少年栄誉賞が制定された。

金正恩同志は、金日成・金正日主義を朝鮮労働党の指導思想として規定し、全社会の金日成・金正日主義化を党の最高綱領として宣言した。

そして、金正日同志の思想と業績を固守し、革命と建設で提起されるすべての問題を金正日同志の思想と意図通りに、金正日同志式で解決していくようにし、金正日同志の遺訓を綱領的指針として捉え、寸分の狂いもなく、一歩の譲歩もせずに、無条件にあくまでも貫徹して、金正日同志の構想と念願を立派に実現していくようにした。

金正恩同志がいるがゆえに、金正日同志は朝鮮人民の心の中に生き続けて新しい勝利へと鼓舞激励しており、金正日同志の革命活動史は金日成民族・金正日朝鮮の富強・繁栄の中に永遠に輝いている。